改訂

明治文學十二講

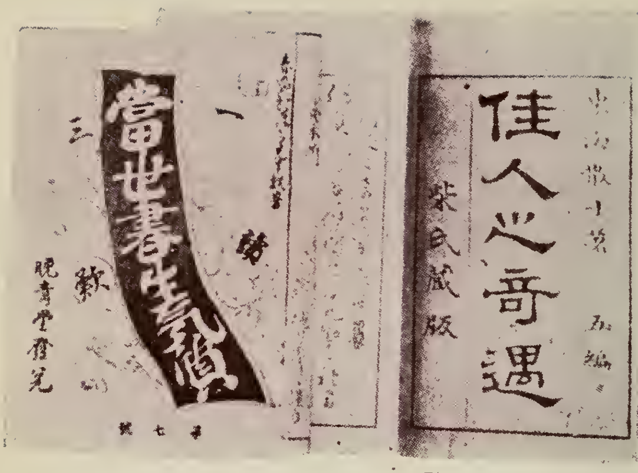
宮島新三郎著

改訂

明治文學十二講

宮島新三郎著

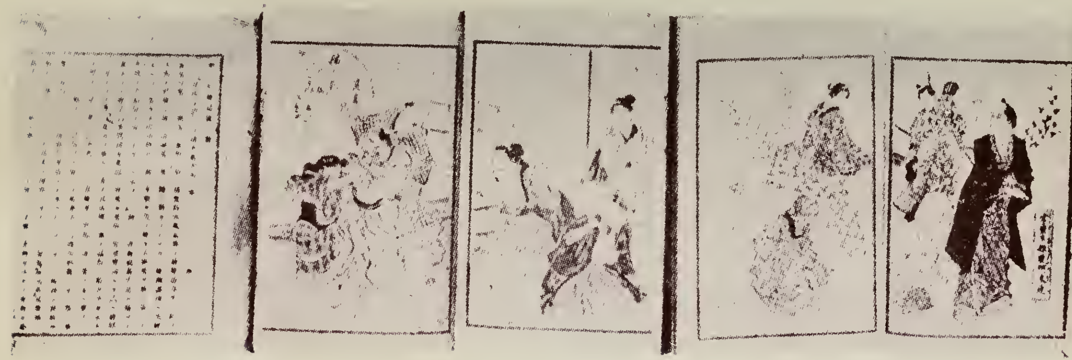
東京出版社刊



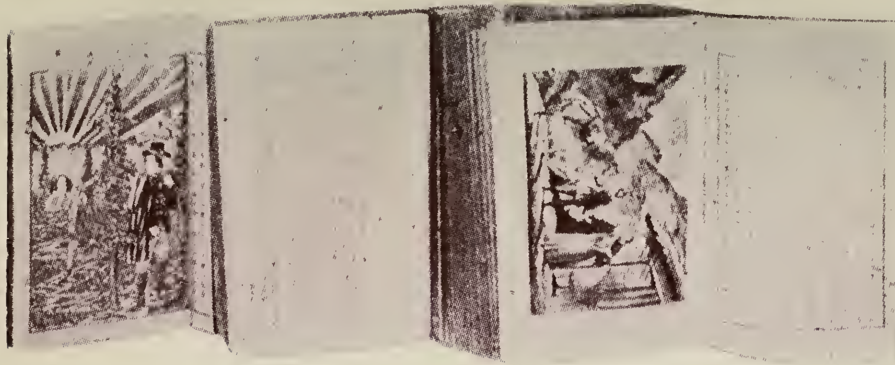
（右）東海散士（柴四郎）の『佳人之奇遇』の表紙裏
（左）春のおぼろこと坪内博士の『當世書生氣質』の表紙



（右）明治二十一年十月の創刊、當時有名な作品は多くこれによつて發表された。（中央）坪内博士を首領とする早稲田派の根城たりし初期の早稲田文學。明治二十四年十月創刊。（左）森歐外の主宰せる本邦最初の文學評論雜誌。明治二十二年十月の創刊にかゝる



（右）スコツト原作「ランマームーア」橋顯三譯「春風情話」の挿絵（中央）
假名垣魯文の「西洋道中膝栗毛」の挿絵（左）「明六社雑誌」明治七年の創刊
本邦最初の評論雑誌といつて可なり。今日の「改造」「中央公論」の類か



(右)スコット原作「アイバンホー」牛山鶴堂譯「梅蕾餘薫」(中央)矢野龍溪氏
「經國美談」政治小說として廣く讀まる。(左)リットン原作「アーネスト•
マルトラバース」丹羽純一郎譯「花柳新話」本邦最初の飜譯小說と稱せらる

改訂版への序

『明治文學十二講』の初版は、私が留學する前即ち大正十四年に上梓されたのであるが、その後間もなく印刷所の火災で紙型が灰になつてしまつた。出版書肆の方からは、改版をしきりに申込んで來たが、私は紙型がなくなつたのを寧ろ幸ひと考へ、これを絶版にして、新しい明治文學史を書く約束を書肆と結んだ。それが歸朝後間もないことだつたので、もう四年ばかりになる。

書肆の方からは始終催促を受ける。しかし何かと多忙であつた私はなかなか筆をとることが出來ないで、漸く昨年春から、『明治文學概論』といふ題目で書き出した。けれども相變らず雜事に追はれて筆はすゝまず、半分も書けないで一年はたつてしまつた。そして今年になると間もなく大患に襲はれ、永く床につくといふ仕末、これでは新しい方が何時になつたら出せるか一寸見當がつき兼ねた。

書肆はそこで新しい方は健康を快復した上でゆつくり書いて貰ふとして、差あたりもとの『明治文學十二講』を出させてくれといつて來た。私としては種々不滿のある以前の書を出すのは心苦しいのであるが、それかといつて新しい方がおいそれと書ける見込みもないので、到頭書肆の依賴に應じてもとの『明治文學十二講』を出すことにきめたのである。勿論前著そのまゝではなく、多少の改訂增補は試みた。明治文學研究の入門書としては、依然いくらかの價値があると思つて、敢へて改版上梓をした譯である。やがて完成されるであらう『明治文學概論』とは見方も自づから變つてゐるから、別著と見做され、それへの序論として弘く讀まれるならば、著者の喜びはこの上なしである。

昭和七年四月

著　者　識

序言

單に明治文學と限らず、廣く明治文化に對する研究熱が、最近は著しく度を高めて來たかの如く見受けられる。明治維新の改革以來、星霜こゝに六十年、回顧すればその文化的進歩には驚くべきものがあり、又それに關聯して文學の方面にも未だ甞つて見なんだ大變遷大飛躍があつたに拘らず、未だ一個完全な明治文化史若しくは明治文學史の出てゐないのは、甚だ遺憾にたへなかつたが、最近に於ける斯かる研究的傾向は、やがてその遺憾を補ふ序曲ではないかと觀測されて、甚だ愉快である。殊に、多少なり明治の文化乃至文學に興味を以前から持つてゐた私に取つては、この上もない喜びである。

斯かる時に際して、小著『明治文學十二講』を出して、廣く世間に問ふことの出來るのは、これ亦た私に取つて何といふ幸福であらう。

私は前々から文化史的の立場から見た『明治文藝思潮史』といふやうなもの

を書いて見たいと思つてゐた。しかしいざとなつてやり出して見ると、材料を蒐めるだけでも、一生涯はかゝるやうに思へて、なか〳〵はかどらない。今度の小著『明治文學十二講』はいはゞその『明治文藝思潮史』の序論のやうなもので、極めて僅かな材料により極めて狹い範圍を取扱つたにすぎない。即ち小說が中心で、他の方面、演劇とか詩歌とかいふ方面へは殆どふれてゐないのである。しかし、著者に多少の自負を許して貰へるなら、所謂、在來の單なる記述的文學史を書かうとしたのではなく、文學を論じつゝ自づからにして文化の推移が分り、時代の變遷が分るやうにと思つて取扱つた點である。私は、文學を通じて社會を見、社會に依つて文學を明かにするといふ研究の方法を試みた。その點は、他の類似の文學史に見ない特色だといつてよからうと思ふ。

今一つの點は、歷史は單に過去の報告のみでなく、未來の豫想であり、又將來を導く力であるといふ立場に立つて、過去の明治文學を眺めたことであ

る。その意味では、『明治文學十二講』も一つのクリエーシヨンである。廣く細かくいろ〳〵の事實を知らうと思ふ者には、或は本書は不滿をいだかせるかも知れない。けれども最初からそれは本書の目的でなかつた。明治文學思潮の變遷推移の順路が明瞭に分り、合せて一般文化の變移が理解して貰へれば、著者の望みは足るのである。しかし他方一つ一つの作品の鑑賞批判といふ點にも相當の努力は拂つた。その意味では著作解題の役目をも果してゐるといへよう。

本講は最初「國民新聞」學藝部長島田青峯氏の依賴を受けて、國民婦人會の席上で六七回に亘り講演したものを、その後加藤武雄君の好意に依り、大正十一年三月から約一年に亘つて「文章倶樂部」に連載した。それに今度改めて多少の筆を加へて公けにすることにしたのである。だから本書が生れるにあたつては何よりも先づ先輩島田、加藤の兩君に感謝の意を表さねばならぬ。尚ほ木村毅、柳田泉の兩友からは材料その他の點で多くの援助を仰いだ。出

版の勞をとられた松元竹二君に對すると共に、こゝに厚く謝意をさゝげる。

繁忙の間に原稿の整理をし、校正をしたのであるから、自分としては非常に不滿であるいろ〳〵の思ひ違ひや誤謬があることと思ふ。大方の指教を仰ぐ次第である。

大正十四年五月

近く渡歐の日を控へて
東京西大久保の寓居にて

宮島新三郎

目次

第一期の文學

第三期の文學

第四期の文學

目次終

改訂

明治文學十二講

宮島新三郎著

第一期の文學

第一講　明治文化の混沌時代

一　時代の區劃

一口に明治時代の文學といつても、それは四十五年間に亙る文學であり、而かもその間に、眼まぐるしいまでの變化推移を遂げた文學であるから、一括して述べることは甚だ困難である。其處で、もとより白いものと黒いものとを區別することが出來るやうに判然と區分するのは容易でないが、一般の歷史家がするやうに、又文學史家が試みるやうに、便宜上、明治文學の時代を、大體四期に區別して、その各々に就いて述べて行きたいと思ふ。

第一期は、明治初年から十七八年頃までゝ渾沌時代とでも言はうか、舊文學、即ち江戸文學が、僅かに假名垣魯文一派の戲作にその餘光を止めてゐたに過ぎず、而かも尚新文學の黎明は、未だ明澄な色彩を見せず、僅かに飜譯

文學、及び政治小說にその曙光を現はしたに過ぎない時代である。明治十八年に至り、坪內逍遙博士の『小說神髓』（新文學の本質論）、及びその批評を裏付けるものと見て好い小說『當世書生氣質』の公表に依つて、はじめて明治文學はその建設期に入つた。さうして明治文學たるの所以を大いに發揮したのである。硯友社一派の連中が華々しい活動振りを示したのはこの時期で、二十七八年の日淸戰爭を境として、新文學は更に一轉化を試みた。それから十年ばかりの間、卽ち三十七八年の日露戰爭當時までを第三期とし、文學の實際の主張が鮮明な色彩をとるやうになり、就中理想主義と寫實主義との對立の鮮かになつた時代を第三期すとる。三十七八年から明治末期卽ち四十五年頃までは、これを所謂自然主義時代として一括することが出來よう。尙ほ時代を重んずるのは、文學の文化史的意義を特に重大視するからである。

以上の說明を表示すると、ざつと次のやうになる。

明治文學の時期

- 第一期〈舊文學の餘光／新文學の曙光〉時代（自明治初年　至同十七八年）
- 第二期—明治文學の建設期（自明治十七八年　至同二十七八年）
- 第三期〈理想主義／寫實主義〉對立期（自明治二十七八年　至同三十七八年）
- 第四期—自然主義時代（自明治三十七八年　至同四十五年）

尙ほ本講は、明治文學といつても、主として小說を中心としての說述であることを豫め斷つて置く。

二　舊文明の破壞と新文明の建設

第一期は、既に述べたやうに渾沌時代で、嚴密な意味では無文學の時代と言つても好い位である。明治維新の事業は、物質文明の新建設、物質改造の新氣運に支配された大業であるから、從つて精神文明、特に文學や美術は全く泥土に委せられて、毫も顧みられるところがなかつた。辛じて餘命をつな

いでゐたのは、既に述べたやうに江戸文學の殘流と、新文明の氣運に促進された飜譯文學と新しい政治思想の影響に依つて生れた政治小說位のものである。

文學が常に時代を背景として生れてくることは言ふまでもない。けれども優れた文學は、時代を背景として生れながら、常に又時代を支配するだけの偉大な生命をもつてゐる。ところが、明治の第一期文學は、時代を背景として生れたといふよりは、寧ろ、時代に支配され、蹂躙された文學といつた方が一層適切である位、時代の隸屬的產物である。それだけに又時代粧を現はしたものと見ることは出來る。從つて文學的立場から見ては、さまで大きな價値はないが、時代の文化史的意義から見ると、尠からず參考になる。

それ故に、明治の第一期文學は、何時、如何なる文學に於てもさうであるが、特にこの第一期文學は、時代ときりはなしては寸毫の價値もない。時代の姿を明瞭に知悉すればする程、この期の文學は、明瞭な意義を帶びて來る

し、その逆も亦眞理たるを失はない。

この意味からして、吾々は、第一期の文學にはひる前に、その時代の輪廓を大體心得て置きたいと思ふ。

明治維新の革命は、一言にして盡せば、我が國に於ける大きなルネサンスである。嚴密にいへば、精神文化の方面をマイナスしたルネサンスといつて好い。さうしてこの革新運動の根柢は、言ふまでもなく、歐洲に於けるルネサンスの要因たる自我の解放と舊套破壞とである。凡ての生活秩序、社會組織、個人意識がこれほど徹底的に改造された革命は、恐らく人文史上に又となかつたであらう。幕末以來動き始めた新思潮の流は、忽ちにして大奔流、大激浪となつて、舊物舊思想を押し流さうとした。大きな渦卷が到る處に起つた。けれども時局は新思想の目ざましい勝利となつた。明治文化の基礎は全くこの新しい思想に掉したものである。さうしてこの思潮の底流たるもの即ち明治文化發祥の根本動因は、かの五ケ條の御誓文である。この御誓文の

中には明白に、今日切りに問題になつてゐるデモクラシー、普通選擧等の政治思想が含蓄されてゐるし、又文化運動の根本精神が遺憾なく發揮されてゐる。既に斯樣な新しい革命運動の精神が、大廟の奥所から現はれたのに加へて、當時の政治に參與したものは、悉く新思想に浴した三條、岩倉の諸公卿に、大久保、木戶、伊藤、大隈等の如き俊傑ぞろひであつた。彼等は皆立派な社會革命家であつた。かゝる人々の手に依つて先づ政治上の大革命が、次には社會上の革新が斷行された。これ等の詳しい改革個條は一般の歷史に讓るとして、吾々が特に記憶に浮べて見る必要のあるものを擧げるならば、穢多非人の稱を排すといふが如き、僧侶の肉食妻帶蓄髮を許すといふが如き、人身賣買の禁令を發すといふが如き、又外人との婚嫁を許すといふが如き、或は從來忠臣孝子の美擧として無暗に奬勵した復讐を禁止すといふが如きである。これ等の個條を見ると、維新前には如何に人間が人間らしくない取扱ひを受けてゐたか、又それに甘じて生きてゐたかといふことが知れるではな

いか。

更にこの改革を、社會一般の狀態に就いて見るに、羽織袴下駄の服裝が洋服靴と變り、悠々たる驛路傳馬は汽車汽船と化し、びたんこな日本家屋の間に洋風の建築物が聳立するに至り、日本風の食物に俄かに西洋風の料理が入り來るといふ風で、凡ての點で新舊が雜然紛然たる光景を呈した。洋服に佩刀、チョンマゲに靴といふやうな不調和すら、至るところに見られた。これは如何なる改造期にも現はられる變態現象である。新しい酒をもるべくまだ新しい容器の出來ぬ時代に於て見られる過渡的現象である。その變態現象、過渡的現象の特色が顯著であればあるだけ、改造事業が大きいことを示すのである。

舊物破壞の斧は、啻に社會制度や施設や風俗習慣の上にのみ止まつてゐたのではなかつた。凡ての舊道德、舊宗教は勿論、舊文學、舊美術に至るまでその斧に依つて薙仆された。神社佛閣にして破壞されたものが幾つあつたか

知れない。芝の增上寺や奈良の興福寺の五重塔でさへ無用視されて、まさに燒き拂はれようとした。古書古畫の類、今日では數萬圓にも及ぶそれ等のものが、紙屑同樣に扱はれ、甚しきに至つては厠の用にさへ供されると云ふ風であつた。斯樣にして、古いものは全く價値を失つて了つた。

舊物破壞の斧は實にすばらしいものであつた。或は今日のロシアのボリシェヴィキー以上であつたかも知れない。赤化も赤化、極端なる赤化が、今から五十年ばかり前には、我が日本の國で行はれたのだ。それなのに、吾々はその當時の大破壞の事業をすつかり忘れてゐる。思つても見たまへ、明治の初年には徹底的な破壞事業が、而かも政府の手でドシ〳〵行はれたのだ。これに比較すると、今日の社會改造運動は寧ろ手ぬるいといつてもいゝ位である。不徹底な改造論が多い。明治維新に於ける最も徹底的な改造論を二三紹介するなら、ローマ字論だ、自由結婚論だ、基督教化論だ。

ローマ字問題は今日尙ほ未解決の問題として時々識者の間に論爭の種を蒔

いてゐるが、これは何もこと新しく始まつたものではない。抑々ローマ字はずつと明治以前からあつたもので、明治二年になつて、南部義範といふ人が國字を廢して、ローマ字にせよといふ議を提唱し始めた。而かも彼の說は詔勅や法律の文に至るまでローマ字にせよといふ極端な論であつた。但しローマ字採用を主張した彼の建白書は、その全部が漢文であつたといふのだから皮肉である。彼に續いては西周の如きがその主唱者であつた。

今日、婦人問題の中心になつてゐる結婚論なども、既に明治の初年からその後數年に亘つて盛んに論議されたものだ。福澤諭吉が一度人間平等論、男女同權論を唱へ出すに及び、女子の平等獨立といふことが、彼方此方で力說主張され、今までの如く奴隷的生活に甘ずることが如何に不合理であるかが明かにされるに至つた。その結果として、終には結婚の自由が主張された。森有禮、西周の如きはその主張者の雄なるものであつた。

更に突飛な改造論は、基督教を以て國教とすべしといふ論であつた。基督

教は世間熟知の如く、舊幕時代に於ては、非常な迫害を受けてゐた。けれども岩倉右府が歐米漫遊から歸朝すると共に、禁制の高札は撤回されて、明治五年には、横濱に教會さへ設立された。さうして該教發展の端緒が漸く開かれた。而かも尙ほ其處には樣々の迫害や妨碍や反對があつたにも拘らず、一つには岩倉右府と共に歐米を漫遊して來た、熱烈な基督教信者新島襄氏の加き信仰家があり、又他方には破壞に次ぐに破壞を以てし、人心の不安動搖その極に達した時代の常として新信仰、新宗教に對する一種のあこがれがあつた爲めとで、基督教は偉大な勢力を占めることになつた。而かも當時の基督教信者と言はれる横井時雄、海老名彈正、山崎爲德、浮田和民の諸氏は、何れも一面に於ては學界の先覺者、指導者であつた爲めに、基督教は忽ちの間に思想界を照らす新しい光明となつた。事情既に斯くの如くであるのを以て見れば、基督教を新國教とすべしといふやうな說の出たのも、決して不思議ではない。

以上で、舊物破壞が如何に徹底的に行はれたか、政治上、社會上の施設制度が如何に全的に改造されたか、又西洋の物質文明が如何に崇拜の的となつて、その輸入移植に全勢力が傾倒されたかといふことが、略々理解出來るであらう。明治維新の大業は、從つて、舊文明を破壞して、その跡に西洋の物質文明を建設しようといふ努力の結晶であつたと言へる。だから、所謂西洋崇拜熱、歐化主義は第一にはその物質文明に於て始まつたのである。さうしてこの西洋崇拜熱、歐化主義は、終に、物質的感覺的な、善美を盡した二十年前後の鹿鳴館（今の華族會館）の假裝舞踏會に於て、その極點に達した。この假裝舞踏會は、當時の歐化熱のシンボルで、その馬鹿騷ぎに至つては全く兒戲に類してゐた。故伊藤公や故大山元帥や、故山縣公などが、田舍芝居の役者と間違へられるやうな假裝をして、踊り狂ひ、茶目の限りを盡したのが、この舞踏會である。維新前後に何でも西洋式でなければならぬ、食物はパンに限ると言ひながら、而かもパンがどこの店にもまだないので、仕方な

く饅頭の皮を蒸させて、これをパンと思つて喜び食したといふ學者と共に、これは歐化狂の好一對である。

更にこの西洋崇拜熱、歐化主義は、一般の教學界にも甚大な影響を及ぼした。教學界の全般が既に西洋崇拜であり、歐化主義であつたから、その當時の時代相が、凡てそれを反映してゐたと見る方が、正しいかも知れぬ。それは兎に角として吾々は更に一般教學界のことを少し知つて置く必要がある。時代的背景を知つただけでは、まだ明治の第一期文學を充分に鑑賞し理解することはむづかしい。更にその當時の學術界、思想界、新聞雜誌界の大要を知るにあらざれば、決して充分とは言へない。わけても、吾々と緣遠い時代の文學を味はうといふのだから、尙更それは必要になつて來る。

三　思想界の一班

一　實利的傾向——前にも述べたやうに、維新の革命は、何よりも先づ物

質文明の改造であつたし、實際生活の刷新であつた。從つてそれを指導し若くはその根柢となつた思想や學問も亦、當然功利的な、實用的な、所謂、直接、吾々の生活に役立つ種類のものでなければならなかつた。人生の祕奥を極めた深淵な哲理よりも、帳簿の附け方、算盤のはじき方を說いた實用學の方がどんなに有難がられたか知れない。今日の言葉で言へば、實用主義の學問、功利主義の說法が、一般の學術界を風靡してゐたのである。さうしてこの常識的、實用的、功利的の傾向を代表したのが、三田の福澤諭吉氏である。實に彼は實用主義の學問の唱導者であると同時に、明治の物質文明に確實な基礎を與へた先驅者の一人である。

福澤氏は明治以前既に慶應義塾（その起原は安政五年にあるが、慶應末年に至りこの名稱生る）を起し、專ら英米の實利實益の學風を以て、天下の學生を指導し、政治、道德及び風俗習慣の古きを打破して、新文明を建設することにつとめた。彼の著述はその數頗る多く、『福澤全集』五卷となつて現は

れてゐるが、その中最も廣く讀まれ、その影響の甚大であつたものを擧げると、ざつと次の通りである。

『西洋事情』(明治二年、十冊より成る、西洋事情につきて平易に說きたるもの)。

『世界國盡』(明治二年、『世界は廣し萬國は』に初まる唱歌體なる一種の地理書)。

『學問のすゝめ』(明治五年――九年)。

『童蒙をしへ草』(明治五年、五冊)。

『窮理圖解』(明治五年。三冊)。

『文字の敎』(明治六年)。

その他、實利實益を主眼として飜譯書も可なり澤山ある。斯樣に西洋の事

情に精通し、その著はす所のもの多く外國のことに關する所から、時人は終に洋書を福澤本とまで言ふに至つた。卽ち西洋の知識卽福澤と云ふ意味だつたのであらう。

では福澤氏は何故それほどにその當時歡迎されたか。それには樣々の理由があらうが、何よりも先づ、その學說が物質文明の建設期に適合してゐたといふこと、その說く所が平易簡明であつたといふこと、この二點に歸着すると思はれる。時代は明白に深い一方面の研究者よりも、寧ろ淺くとも間口の廣い雜學者を要求した。恰も新開地に於ては、精巧な專門的な品物を賣る商店よりも、何でも御座れ主義の雜貨店の方が、より必要である如く、その當時に於ては、一人の深い哲學者、一人の偉大な政治家、一人の科學者よりも政治にも財政にも法律にも地理にも歷史にも敎育にも一通りの知識を具へた者の方が、どの位役立つたか知れない。福澤氏は明かにさういふ人の代表的典型であつた。

『學問とは唯むづかしき字を知り解し難き古文を讀み和歌を樂み詩を作るなど世上に實のなき文學を云ふにあらずこれ等の文學も自から人の心を悅ばしめ隨分調法なれども古來世間に儒者和學者などの申すやうさまであがめ貴むべき者にあらず古來漢學者に世帶持の上手なる者も少く和歌をよくして商賣に巧者なる町人も稀なりこれがため心ある町人百姓は其子の學問に出精するを見てやがて身代を持崩すならんとて親心に心配する者あり無理ならぬことなり畢竟學問の實に遠くして日用の間に合はぬ證據なりされば今斯る實なき學問は先づ次にして專ら勤むべきは人間普通日用に近き實學なり。』(『學問のすゝめ』第一編)。

これが彼の根本思想である。今日から見れば、種々批評さるべき餘地はあるが、飽くまでも物質上の幸福を基礎とした功利主義の學問、經濟主義を標

榜した學說に依據した點に、時代を支配する力があつたと言ふべきである。

更に時代を動かした有力な理由は、その說く所が平易簡明であつたといふ一事である。前に引用した一節に依つても知れる通り、彼の文章は飽くまで平明簡潔である。普通に文字の心得あるものには、誰にでも分る。文章が極めてやさしくなつて來てゐる今日から見れば、さほどには目立たないが、明治の初年、文章と言へば、誇大粗笨な漢文調か、まのびのした雅文か、滑稽諧謔を主にした戲文位しかなかつた當時に、今日の吾々が讀んでもさまで不自然を感じない、平易流暢な一新文體を創めたのであるから、それが一般民衆の意嚮に投じたことは、想像するに難くない。この一事は、又明治文學史上特筆すべきことでなくてはならぬ。彼は一散文家、一飜譯家としての文學者たるに過ぎないが、新しい一つの文體に先鞭をつけたといふことは、有意義なる事實である。漢字制限、國字改良といふやうなことが、今日も時々問題になるが、福澤氏は早く既に、『漢字の數は二千か三千にて澤山なるべし』

（文字の敎）と看破して、漢字制限論の先驅をなしてゐる。彼は、その實利實益主義を文章の上にまで應用したのである。

二　精神的傾向――然し實用主義、功利主義は、猶ほ人生に於ける半面の眞理であつて、これを以て全體を推すことは出來ない。人生には實利實益を超越した半面の眞理がある。卽ち精神的方面である。而かも福澤氏の功利主義、實利主義はこの精神的方面には餘り多くの貢獻をしなかつた。けれども幸にして又この方面に努力を惜まなかつた一派があつた。それは中村正直氏の同人社（明治六年小石川に設立）と、新島襄氏の同志社（明治八年京都に設立）とであつた。

中村正直氏（敬宇と號す）は、改革家といふよりは、寧ろ學殖の深い一箇尊敬に値する君子であつた。さうして彼の思想の根柢は、在來の儒敎と基督敎との調和した所にあつた。從つて彼の主張提唱は、刺戟的ではなかつたが奥深かつた。さうして常に人生の理想的方面、精神的方面を揭げて、暗に福

澤氏と對抗した。彼の譯書、『西國立志編』(Smiles-Self-help)、『西洋品性論』(Smiles-Characters)『自由之理』(Mill-On Liberty) 等は、最も廣く讀まれたものである。彼は又『文學雜誌』を發行して、詩や文章を勸め、且つ西洋の新知識を紹介した。尙ほ漢文に長じてゐた爲め、西洋の思想を、頑迷固陋な漢學者の間に擴めるに尠からぬ功績のあつたことは、注目に値する。

人生の精神的方面に新しい光明を齎したのは、何と言つても基督教の傳播である。前にも述べたやうに、基督教は明治初年までは、ひどく虐待されてゐたが、明治五年に禁制の札が撤廢されると共に、次第にその勢力を挽回し明治八年に新歸朝者新島氏が京都に同志社を設立するに及んで、俄かに同宗の者がその數を增して來た。所謂神學校なるものが各地に出來たのも、亦、基督教に關する雜誌などの刊行されたのも、皆この前後である。文明の宗教――それへ向つて改宗するものは、實に多數であつた。

そこで、基督教の宣傳及び傳播の徑路については、宗教史に讓るとして、

吾々は、その文化史的意義若しくは文藝史的價値を少しく探つて置く必要がある。基督敎は元々、人類生活の理想的方面、所謂ヒューマニティ、正義、博愛を標榜した。この人類の大目的に合致するものでなければ、如何なる行爲も業蹟も價値はないとされた。この基督敎の根本原理は、明かに福澤氏の實利實益主義とは違つた或る理想へと人心を向けて行つた。斯くしてそれは當時の人々の心に理想主義の根を植ゑつけた。精神生活の光、さういつたやうなものを、實利に傾いてゐた人々の心、動搖不安の念に驅られてゐた人々の胸は感じ始めた。更に基督敎の傳播は、文學への、特に西洋文學への道を切り開いた。基督敎の聖典そのものが、詩的であり、想像的であつて、既に立派な文學である。さうしてそれを味ふには、是非とも語學の力を養はねばならぬ、それをするには種々これと關聯した英文學書を讀むに如くはないといふ所から、英文學に接するの端緒を開くに至つた。從つて聖書は、宗敎的思想を養ふものであると同時に、文學上の趣味を引き出す大きな力であつた。勿

論基督教の影響は直接當時の文學に及びはしなかつたが、二十五六年頃になつて、それが文藝の上に立派な一つの花を開いたことを思へば、輕々に看過することは出來ない。

以上を概括して見ると、福澤氏の三田派は飽くまでも實際生活を導く直接の羅針盤となり、中村氏の同人社、新島氏の同志社は、海路を明示した地圖の如きものとなつて、共に人生の行路をなめらかにした。一方は目前の實行に重きを置き、他方は遠く理想を目指した。二つながら人生を導く力である。さうして吾々は、功利主義、實利主義が、混沌たる實際生活をしめくゝる上に於て大きな効果のあつたことを認めると同時に、動揺不安極まりない海上に漂つてゐた人々の心に精神上の糧を與へて、後年の文藝を發展させる基礎になつた精神主義、理想主義の傾向に對して感謝することを忘れてはならない。

福澤氏の慶應義塾、中村氏の同人社、新島氏の同志社以外、尚ほ明治初年

に、思想界、學術界に貢献した學派、私塾の類は可なり多い。この點から考へると、明治の新文明、新學術は、まさしく私學の勃興に依つて開拓されたと言つて好い。勿論明治五六年頃から、學制々度なども出來て、教育の施設が一般化されて、官學の權威も自然高まつて行つたが、直接にその當時の文明を支配したものは、私塾に依つてゐた新人諸氏であつた。民衆的精神の活躍に依つて促進された新文明の一例と見て好からう。

吾々は更に明治十年の西南の役を境として次第に政治社會に浸潤して行つた佛國流の自由思想、政治上の革命思想等についても述べなければならぬのであるが、第一期の文學中舊文學の餘光を述べるに當つては、差當りさまで必要はないと思ふから、これは新文學の曙光を說く際に讓るとして、一先づ教學界の一班を打切りたいと思ふ。

三　新聞雜誌の刊行——そこで愈々實際の文學に入る譯であるが、こゝに未だ一つお話して置かなければならぬ項目がある。それは外でもない、新聞

雑誌の刊行である。

明治以前の日本には、完全なる意味のジャーナリズムはなかつた。社會上の出來事若くは政治上の法令などを報導する機闘が全然なかつた譯ではなく、德川時代には、殿中御沙汰書とか、封廻狀とか、秘密公文書とか、外國事情とかいふものがあつたが、專ら政府内若しくは上流社會の一部に行はれてゐたにすぎぬ。民衆の間に行はれてゐたものには、僅かに讀賣といふものがあつた位である。で、始めて新聞紙と名のつくものが出來たのは、文久年間のことであるらしい。文久元年に、幕府から米國へ派遣された小栗上野介といふ人が歸朝し始めて、新聞發行の建議をしたが、容れられなかつた。そのうちに、民間で『バタビヤ新聞』(文久二年二月創刊)が生れた。これは和蘭人が爪哇のバタビヤから持つて來た新聞を飜譯したもので半紙數枚の木版刷であつた。然しこれは地方的興味がなかつた爲め、一號を出しただけで廢刊になつた。續いて元治元年には『新聞紙』(月二回)といふのが、橫濱で岸田吟香に依

つて發行された。これは外國の記事と同時に國内の記事をも載せた。これも間もなく廢刊になつた。かういふ有様で時代は明治へと進んで來た。さうして明治元年には亞新聞が十種ばかり一度に生れた。先づ第一に、『太政官日誌』が出た。これは今日の官報の前身で、政府と民衆との掛橋としての役目をつとめた。續いて福地源一郎氏に依り『江湖新聞』(四六版小冊子)が發行された。時事論、政治論をのせた恐らく始めのものであらう。盛んに薩長攻撃をやり、佐幕論をした爲め、終には政府の忌諱に觸れて、新聞は發行禁止、主筆は監禁となつた。新聞紙取締法が設けられたのはこの時である。その他で名高いのは、岸田吟香主筆の『もしほ草』(四六版小冊子)などである。爾後新聞の要求は次第に民衆の間に擴まり、明治四年には、『新聞雜誌』(四六版)が木戸孝允監修の下に、活字版、日刊新聞の嚆矢たる『横濱毎日新聞』(後に『東京横濱毎日新聞』と改題)が島田三郎、沼間守一等の手に依り、翌五年には『東京日々新聞』が篠野傳平氏等に依り、六年には『郵便報知』が小西義敬に

依り、七年には『朝野新聞』が成島柳北氏に依り、八年には『新聞雑誌』が改題して『曙新聞』として岡本武雄、末廣鐵腸等に依り、それ〴〵發行された。是等の世に所謂五大新聞が各々その陣容をとゝのへて、議論縱横攻守矛を交へるに至つて、始めて新聞紙はジャーナリズムの價値を發揮することになつた。かうして新聞紙の效果が漸く世間に知れて來た。けれども尙ほ以上の諸新聞が取扱ふ材料は主として政治とか上流社會の出來事とかに限られてゐて、未だ一般民衆殊に婦人に對しては、閉ぢられたる書庫であつた。何處にかまだ學者の臭味があり、上流階級の冠がくつついてゐた。この窮屈な、政論的、貴族的趣味を打破して、一般の民般に近付いたのが、『讀賣新聞』(明治七年、鈴木田正雄によつて創刊)である。これは文章も漢字には假名を振つて、なるべく平易にし、家庭的の記事も加へたので、中流階級に歡迎された。次いで八年には『平假名繪入新聞』が高畠藍泉、落合芳幾等に依り、『假名讀新聞』が假名垣魯文に依り各々創刊された。これ等には繪が這入り、そ

れに當時の戲作者の書いた戲作が續きものとして掲載された。斯くして所謂『三面記事』と新聞小說との先驅を示すに至つた。こゝで吾々が注意すべきことは、これ等の新聞紙が當時の戲作者の作品をのせたことである。卽ち明治の第一期の文學中、特に舊文學の餘光を代表する文學は、これ等の新聞紙に依つて僅かに餘命を保つてゐたのである。

新聞については以上に止め、次には雜誌界のことに言及しよう。明治の初年にあつては、新聞と雜誌とは名目こそ違へ、實質や體裁は大同小異であつた。卽ち新聞といつても今日の如く決して日刊ではなく、月二回とか週刊といつた風のもので、內容も亦多くは論說で埋まつてゐた。さういふ譯で、始めて今日見る如き雜誌らしい內容と體裁とを備へたものは、明治七年に明六社から出た『明六社雜誌』（四六版）である。これには所謂明六社の同人が顏を揃へて執筆した。その同人中には、森有禮を初め西周、加藤弘之、西村茂樹、大槻文彥、津田眞造、中村正直、福澤諭吉、箕作麟祥等當時の錚々たる

新人がゐた。何れも新思想を抱いて社會改造の氣運を促進しようとつとめた點から言へば、差當り今日の『改造』格であらう。尙ほその他で注目すべきものは、『洋々社談』(大槻、小中村等執筆)『共存雜誌』(大内靑巒主筆)『同人社文學雜誌』(中村正直)『扶桑雜誌』『近事評論』『評論新聞』『頴才新誌』等であらう野崎左文の『團々珍聞』(大阪)といふやうな滑稽雜誌も、隨分廣い讀者を持つてゐた。これ等諸雜誌の內容についても一々實例を擧げて說明すると可なり文化史的な興味が湧くのであるが、餘談になる恐れがあるから、別の機會に俟たう。以上新聞雜誌界を總括して見ると、明治十年頃までのそれは、一方に於ては、政府攻擊の具として大いに役立ち、他方に於ては、一般民衆の享樂機關として大きな役目をしてゐることに注意される。更にそれが政黨の具となり、コンマーシャル・ジャーナリズムとなつたのは後のことに屬する。

第二講（その一）　舊文學の殘榮

一　文學上の暗黑時代

前にも述べた通り、明治維新の革命は、物質文明の基礎を築くための革命であつた。從つて精神生活の頂上に花を開く文藝や藝術の如きものは、殆ど顧みられなかつた。精神生活の全部は、擧げて日常生活をみちびく手段方便をつくるために費された。時の知識階級者は、その仕事の全部を實學に供して毫も惜む所がなかつた。又一般民衆も、花をめで歌をよむなどといふ呑氣なことに浮身をやつしてなどはゐられなかつた。かういふ譯で、明治維新から十年頃までの日本は、文學上の暗黑時代であると言へる。勿論、全然文學がなかつたとはいへない。けれどもこれが明治の新時代を代表する文學であるといつて誇り得るものは、一つもなかつた。あるものは、たゞ德川のデカタ

ン時代から餘端をつないで來た戲作文學の殘榮のみであつた。それは丁度既の光にかき消されようとする常夜燈の最後の微光の如きものであつた。それは又醜い形骸のやうなものであつた。生活の實體が破壞されて了つた後に、その形骸のみがみすぼらしい存在をつゞけてゐたに過ぎなかつた。

では、その所謂、最後の微光、醜い形骸たる德川文學の殘榮とはどんなものか。言ふまでもなく、かの馬琴に始まつた讀本、春水に始まつた人情本、種彥に始まつた、草双紙一九三馬に系統をひいた滑稽本の亞流で、世に所謂戲作に外ならないものである。今それ等の主なるものだけを記して見ると、ざつと次の如くである。

假名垣魯文作『假名讀八犬傳』(明治元年)。『萬國航海西洋道中膝栗毛』(明治三年――同九年)。『牛店雜談安愚樂鍋一名奴論建』(明治四年)。『河童相傳胡瓜遣』(明治五年)。

萬亭慶賀作『釋迦八相倭文庫』(明治五年)。『當世利口女』(明治六年)。『日本女

教師』(明治七年)。

二世春水作　『北雪美談時代加賀實』(明治六年)。『雜談雨夜氣質文庫』(明治七年)。『東京開化膝栗毛』(明治八年)。

松村春輔作　『復古夢物語』(明治六年)。『近世櫻田紀聞』(明治八年　―同九年)。『春雨文庫』(明治九年)。

なほ以上の外に、德川期からの遺物としては、種彥の『白縫物語』『八犬傳犬廼草子』『室町源氏胡蝶卷』や、春水の『新篇九尾傳』などが、甚だしい時代錯誤であるにも拘らず、出版されて一部の讀者をつないでゐた。それから又同時代の作者としては、成島柳北とか、二世柳水亭種彥(高畠藍泉)とか、山々亭有人(條野傳平)とか、鶴亭秀賀とか、笠亭仙果とか、梅亭金鵞とかがゐた。けれど彼等の多くは明治以前の作者であつて、時代と多少なり交渉があつて、當時の讀者に何物かを與へ、又後の時代から見て多少の文化史的意義を有する作家は、假名垣魯文と成島柳北位のものである。然し柳北は隨筆

若しくは雜文で、頽れ行く江戸趣味を嘆じ且つ詠じた文人故、玆には略す。

二　魯文の作とその意義

魯文は文政十二年江戸に生れたが、その二代前までは代々相模國の農夫であつた。家の貧しいために彼は幼い時から丁稚奉公にやられたが、讀本が好きで僅かに獨習し得た學力でそれを耽讀した。後には花笠魯介の門に入つて、こゝに文學的生涯の端を開くやうになつた。『政談靑砥碑』といふのがその處女作で、爾來明治の始めまでにも多くの作品を發表した。けれども元々彼は一個の奇拔な戲作者で、前代人の模倣以上には一歩も出なかつた。別に非凡な才能がある譯ではなかつた。その彼が、何故に明治の新時代に生き殘つて尙ほ多少の生命をつないでゐたのか。他の同時代の作者が、時勢の變遷推移と共にその生命を失つて了つたのに、彼一人だけが嶄然頭角をあらはして、新時代を濶歩してゐたのであるか。

それは、彼に時代の推移を見て、その趣向、その動向、その精神に順應して行くだけの世才があつたからである。然しその世才とは時代の根本生命を洞察把握して、これを達觀し指導して行くといふやうな才能ではなかつた。くだいて言へば、小悧巧ともいふべき性能であつた。

彼は馬琴の眞似をするごとも出來た。一九や三馬に化ける術も心得てゐた。けれどもその眞似や化け方たるや、その師に遠く及ばず、何時も尻尾を見せてゐた。さういふ彼が兎にも角にも明治文學の初期の數頁を飾ることになつたのは、全くその時代の歸趨に對するアダプタビリティーのおかげである。

彼は維新の革命に接するや、同じ戲作で飯を食ふにしても、今迄のやうなものを材料にしてゐたのではとても駄目だと覺悟をきめたらしい、けれども今更長い間持ちつゞけて來た革袋まで捨てゝ了ふには忍びなかつた。そこで先づなかに盛る酒だけでも新しくして新時代の人々の口に合ふやうにしたいと考へた。かうした境地から生れたのが、『西洋膝栗毛』であり、『安愚樂鍋』

であり、『胡瓜遣』であつた。これ等の作品の中に盛られた新しい酒とは何であるか。當時の時代相、卽ち時勢粧そのものであつた。

既に述べた通り、その當時の時勢粧といへば、一にも歐化主義、二にも歐化主義、さうして三にも亦た歐化主義を口にして、あらゆる制度文物、實生活の機關が、歐羅巴臭味に中毒してゐたことを指すに外ならない。更に詳しく言へば、社會事情の眼まぐるしい變轉動搖、新舊思想の矛盾、風俗習慣の齟齬、半可通に基く滑稽といつやうに數限りがない。それらを巧みに自家藥籠中のものとして、彼は更にこれを一九や三馬から受けついだ革袋、卽ち滑稽諧謔の筆致に盛つたのである。

以上三篇中、最も弘く讀まれ、又最も文化史的價値に富んでゐるものは『西洋膝栗毛』である。これは言ふまでもなく、十返舍一九の『東海道中膝栗毛』にならつて書いたものである。彼が如何にその時代の趣向に投じようとしたかは、次の凡例の一節によく現はれてゐる。

『元祖十返舍一九が作なる道中膝栗毛が初篇刊行なりて世に流布せしは享和二壬戌の春にして當年を去ること既に六十九年に及べり。滑稽の妙逆旅の奇至れり盡せりと雖所謂流行後れの類ひに落、今日の形勢に比すれば人情齟齬することのみ多かり。是に次で二世三世の一九等が膝栗毛あれども時は文政と隔り弘化嘉永と遠退きたれば今は昔となりにけり。僕年來の戯作の筆に口を糊せど滑稽の道に疎く笑語頗る不可にして斯る稗史を綴らんこと世の嘲を招くに似たれども活計を如何せん。』

或は又『この節の西洋ばやりへつけこんで目先の變つた趣向をこらす』とも言つてゐる。舞臺を江戸にとるのは一九の時代に於てすら最早古しとされたからこそ、一九は東海道へまで乘出した。魯文は、日本は既に新しい戯作讀物の舞臺とすべく餘りに陳腐と考へて、日本から英國のロンドンへ行く航路、それに沿うた港々、それからロンドンに舞臺をとつた。彼は勿論外國な

ど〜行つたことはなかつた。『僕が文盲なる書は草冊子の外を讀ますず何ぞ學ばん異邦の事情然れども文物盛典の德たる近世福澤先生を始め諸々の洋學先生が著述されし飜譯の書とぼしからねばその階梯にとりついて』出來たのが、『西洋膝栗毛』である。

本篇のプロットは、東京神田に生れた遊蕩兒、彌次郎兵衛、北八の二人が横濱の豪商大腹屋に連れられて、横濱から飛脚船に乘込み、船の上や港々で種種樣々な滑稽、惡戲を試みながらロンドンへついて博覽會を見物してそここに歸る迄のことを綴つたものである。樣々の駄洒落、樣々の滑稽、樣々の惡戲のうちに、西洋の半可通が無暗に新しがつたり、まだ見ぬ新奇なものに觸れて驚嘆し誤解し眩惑するありさまなどがなか〳〵巧みに描出されてゐる、その他、彌次北二人が盛んになまつかじりの漢語や英語等を使つてゐる點、(例へば『この頃漢語圖解なんぞ捻り廻して人參具足だ』の『ヲット待つたり因循姑息の事駄郎』とか、『最午刻だぜチト腹が北アメリカだ』の如き、又二人

が盛んに窮理を談じたり、文明開化の餘澤を讃美したりしてゐる點、何れも時代の反映ならざるはない。なまつかぢりに覺えた國名を巧みに使ひこなして一齣の歌にしたものがある。一寸面白いから紹介して置く。

雪の普魯西も扨アメリカも馬車で通ふてインギリス。僕はこれほどホルトガル。君はいつでも佛蘭西か。浮世のギリシヤとたゞ印度。床をトルコの一ツ夜着。エジプトこちらへよらしやんせ。チヤイナ〳〵ととりすがり、おロシヤに見えるが戀の路ハアトツチリトン………

『西洋膝栗毛』につゞいて廣く讀まれたのは、『安愚樂鍋』と『胡瓜遣』とである。前者は四六版形で、三篇五冊からなつてゐる。これは西洋料理などが當時急激に流行し出し、尙ほ今迄は食へば罰があたるとか何とか言つて餘り人の口にのぼらなかつた牛肉が、一般の食料となり、所謂牛店がそちこちに

出來たのにつけこんで、作者が舞臺をこの牛店にとつて、こゝへいろ〳〵の人物、主として明治維新の革命によつて解放された平民階級のあらゆる種類の人物、書生とか、娼妓とか、鄙武士とか、大工とか、商人とかを拉し來たつて、文明開化を讃美させ、放たれた喜びを祝福せしめてゐる。今日で言へば小話を幾つも寄せ集めたやうなものである。半可通をふり廻して、傳信機(當時用ゐられた文字をそのまゝ)の話をする奴もあれば、風船の由來を物語る男もあり、蒸汽車の有難味を解く者もある。『新聞好の生鍋』といふ一篇にはこんな面白い建言書があるといつて隣の客に讀んできかす男がある。その建言書なるものがふるつてゐる。

恐れながら書附を以て建言たてまつり候凡無用をして有用に充候義經濟專務御國益第一の義とぞんじたてまつり候人民毎戸炎夏の季に至り候ては一般に蚤を生ぜざるはなし此虫人身を刺傷し短夜睡眠を破り白晝の活計をさ

またげ候而已にて實に無用有害の小虫と申ながら彼も億萬生靈の小數なり採用によつては有益の一端ともなるべく哉とぞんじたてまつり候……

こんな風に說き出して、蚤は火にくべると音を發して死ぬ、このことから自分は好いことを思ひついた。卽ち布令を出して戶每にこの蚤を取溜めさせこれをば每日十二時の刻砲の火薬代りにしてはどうか、無用を以て有用にあてる、何と好い思ひつきではないかといふのである。福澤氏などに依つてとかれた實利實益主義の鮮かな反映と見て非常に面白い。

次に『胡瓜遣』は、福澤諭吉の『窮理圖解』をもぢつたもので、初篇上下二册しか出なかつた。これも幾つかの小話を集めたもので、運氣の事附り開運の身上話とか、食氣の事附り下婢の食亂とかいふ見出しがある。前二者と同じく、或は文明開化の餘澤に濕うて身代を興したり、半可通の知識をふり廻したりする男があつて、時勢粧の一面を浮き上げてゐるところに値打がある。

以上何れの作品も、これを文學として見る時には甚だ愚劣なものである。その滑稽諧謔は遠く一九や三馬に及ばず、その布置結構は馬琴の足下へも寄りつけない。而かもその全體の印象を言へば、舊態そのもので、その趣味は恐しく卑俗低劣である。例へば、『膝栗毛』には北八が上海か何處かで往來を歩いてゐてオワイ屋に突當つて糞尿まみれになるところとか、又は彌次公が香港の妓院で、便器を水差と早我點して、その中の水を飲むとかの例は、殆ど枚擧にいとまがない。又その描く事柄も大抵は淺薄皮相にとゞまり、實感として迫つて來ない。更に人物などに至つては全く死物そのもので、作者の滑稽味、諧謔味、諷刺味を傳へてゐるに止まり、全く蓄音機同然である。

然しさういふものを書いた魯文その人、又はさういふ作品それ自身が最も明白に、その時代の西洋崇拜熱の淺薄さ、文明開化熱に醉つてゐる一般民衆の浮足振を示す好個のカリケチュアである。この意味で彼及び彼の作品はその時代の立派な證劵であると言へる。從つてその時代の社會的空氣、人心の歸

趣、一般の風俗習慣を知らうとするものは是非とも一讀せねばならぬ。彼の作以外にも、尙ほ『新文兎談』『日本女敎師』等、材料を維新以後にとつたものもないではないが、魯文のものに遠く及ばない。矢張り魯文は明治文學第一期の前半を代表する唯一の文學者である。

三　時代の比較

第一期の前半は魯文を述べることに依つてつきるが、松村春輔の實錄物、例へば材を王政維新の出來事にとつた『復古夢物語』とか、又櫻田の變を材料とした『近世櫻田紀聞』の如き作品が、相當に讀者を得てゐたことは注意して置かねばならぬ。恐らくこれは明治に於ける最初の歷史小說であらう。

魯文は戲曲に於ける默阿彌と共に、明治初期の前半を代表する舊文學の殿將である。さうして彼は自稱文明人を以て自ら誇つてゐたでもあらうが、新文藝の勃興に對しては、全く何物をも寄與することが出來なかつた。新文藝

の萠芽は寧ろ全然違つた畑から生れて來ることになつた。さうしてその新文藝の萠芽期にあたつては、それらの舊文學の殘骸は見る影もない憐れなものとなつた。卽ち明治十年西南の役を境として、舊文學は殆ど一時全くその跡を絕つたといつてよい。これに反して、新文學運動の芽が彼方からも此方からも簇々と頭をもたげ出して來た。これらに就いては、新しい時代精神若しくは新しい政治思想の發生と共に、次の講で述べることにする。

翻つて明治初期の文學を見ると、それは情けない悲しむべき貧弱さを以て幕が開いたのである。政治上社會上には他の如何なる時代にも增して誇るべき多くのものを持つたに拘らず、文學上に於ては何一つ誇るべきものを持たない。ロシアは明治五年に『アンナ・カレニナ』、同八年に『處女地』を持つた。フランスは明治十年に、『居酒屋』の傑作を持ち、ノルウェーは明治十一年に『人形の家』を持つた。さういふ時代にあつて、吾々は僅かに『西洋膝栗毛』や『胡瓜遣』や『安愚樂鍋』の作しか談ずることが出來ない。けれども僅か四十有

餘年の後に於て、明治の最後の幕が下りる時分の文學、それを思へば、何となく胸の大きく擴がるやうな氣がする。その餘りにも急激な進步と發展とに對して、驚き怪しまずにはゐられない。從つて吾々は落莫荒凉たる光景を以て始まる明治の文學に對して輕々しく悲しみなげくことは差控へよう。

第二講（その二）　新文學の曙光

一　政治思想と文學

明治十年前後までの文學は、嚴密な意味に於ては明治の文學といふことが出來ない。それは急激な時代の進運からあまりに後へとりのこされてゐた。新裝の洋服ばかり着てゐる人達の間へひよつこり古い鎧甲冑のいでたちで出て來た人といふ形であつた。然し何時までも後れてはゐなかつた。他のあらゆる局面からの刺戟に無關心ではゐられなかつた。茲に於てか、明治十年前後を境として、新文藝の曙光が幽かではあるが見え始めて來た。さうしてこの新文學の發生を促したものは、當時の政治思想、若しくは政治思想に對する一般民衆の渴望に他ならなかつた。

建設時代の社會に於て、最も華々しい活動を示すものは、言ふまでもなく

政治の舞臺である。明治建設期に於て、最も人氣のあつたのは、さうして又最も成功的であつたのは、木戸、大久保、伊藤、大隈、西鄕等の少壯政治家であつた。わけても初期の革命的精神と進取的活動性とを失ひかけて、保守にかたむきつゝある政府に向つて勇ましい革命ののろしをあげた西鄕は、自由に憧れ、進步を理想し、且つ未來の國家の料理人たることを空想してゐた青年書生の偶像となつた。『書生々々と輕蔑するな、西鄕隆盛はもと書生』の流行唄さへあつた位だ。

政府當路にあるものは勿論、親讓りの大きなくすぶつた紋のついた羽織をひつかけて、親の脛をかじつて、下宿の四疊半にごろ〳〵してゐる書生も、その日その日の職業に追はれてゐる商人や職人や俥夫までも、口を開けば必ず政治を談じた。時の人々は、今日の世人よりも遙かに政治的國民であつたといつて好い。

かやうにして、政治思想は廣く民衆の間に普及し、その結果は政府の政治

から人民の政治への推移に對する熱望となつてあらはれた。さうしてこの結果がみちびかれるには、凡そ内外二つの原因があつた。一つは政府當事者の保守的傾向の漸加に對する進步的革命熱の激增であり、今一つは佛國流の自由思想の輸入である。さうして前者は、西南の役を試金石として、剱の上では保守派の勝利を示したが、實質に於ては遂に自由革命思想の勝利となつた。この地盤の上に、後者の自由思想は安々と芽をのばすことが出來た。世に所謂自由民權說はかくして生じたのである。

當時佛國から輸入された思想は、主として十八世紀の思想家、社會改造家たるルソー(一七一二――一七七八)や、ヴォルテール(一六九四――一七七八)や、モンテスキュー(一六八九――一七五五)やの政治思想であつた。わけてもルソーの『民約論』(Contract Sosial)は、自由思想を抱いてゐた政治家乃至政論家の寶典であつた。この書は遂に自由主義のチャンピオンたる中江篤介(兆民居士)の手に依つて明治十五年に漢譯された。人民は平等の權利を有す。その權利は天

賦のもの、萬古不易、これを壓迫するは背理の業である――この思想は、兆民の手に依つて益々一般世人の間に普及された。又明治十六年には、馬場辰猪の『天賦人權說』が出版された。箕作麟祥が佛國民法の飜譯を出して人權論の普及に參加したのも、この當時であつた。その他、久しく佛國巴里に留學してゐた西園寺公望は、歸朝するや、自ら『東洋自由新聞』を發行して、自由民權の急進思想を鼓吹し、田中耕造は、同じく新思想の講述に於て、それぐ多大の效果を收めた。

無鐵砲といへば無鐵砲、無批判といへば無批判に相違はない。永い間德川幕府の勢力下にあつて、人民の權利が全く抑壓されてゐたに對して、維新の大業は決して一擧にしてそのフューダリズム(封建制度)を打破することは出來なかつた。而かもそこには早くも形をかへた選ばれた人々の橫暴史の一ページが始まらうとしてゐた。それに對しては、英國流の功利主義や基督敎的理想主義は餘りにきゝめのうすい藥劑でしかなかつた。佛國流の自由民權說は

將に生まるべくして生じた一大劇藥であつた。然しその劇藥もそのまゝでは服用されなかつた。やがて獨逸流の國家敎育や國粹主義の如き御用哲學の緩和劑のために、その效果は半減されて了つた。若し彼の自由民權論が何等の緩和劑をも伴はずして、伸びるがまゝに伸びて行つたら、どうであつたらうか。今日のプロレタリア對ブルジョアの問題の如きは、或は起らずにすんだかも知れぬ。

これは兎に角、以上に述べた政治思想の普及と自由民權說の主張提唱とは文學圈內にもその影響を及ぼした。魯文一派の趣味と當代の政治靑年の趣味とは何處にも一致するところがなかつた。然し、靑春の血に燃えてゐる彼等は、何等かの形に於て文學を求めずにはゐられなかつた。この慾求を端的に滿足させたものが、新文學の曙光たる飜譯小說と政治小說とである。

二　飜譯小說の流行

その當時の政治家又は政論家といはれる人々は、元よりその知識を英語若しくは佛語を通して外國に求めた。かやうにして自由民權の思想を求めてゐる間に、彼等は端なくも英佛の政治小說、ロシアの革命小說等にめぐり合つた。それ等は、在來の殘黨文學とは比較にならぬほど面白味のある、さうして又革命思想をいやが上にもそゝるものであつた。そこで、別に文學者といふ程でない人々、寧ろ政論家などがこれを飜譯して世に問ふといふ結果になつた。『西洋血潮小暴風』(デューマのザ•メモアース•オブ•エ•フィジャン)、『自由の凱歌』(同人テーキング•バスチーユ)、『鬼啾啾』、『夢戀々』等何れも、題材を佛國革命又はロシア虛無黨の叛逆等にとつた飜案物で、自由民權に關する寓意小說である。作者、飜案者には、宮崎夢柳、小室案外堂等があつた。然しこれ等はその文體が多くは戲作者のそれを離れること遠からず、眞に飜譯小說として明治の新興文學に繰入れることからは差控へなくてはならぬ。

そこで、少くとも明治らしい新裝をこらした飜譯小說を求めるなら、誰し

も、明治十一年十一月に始めてその初篇を出した丹羽純一郎譯『歐洲奇事 花柳春話』に指を屈しなければならない。原著者は、今日の讀者には寧ろ『ポンペイ最後の日』の著者と言つた方が分り好いと思はれる、英國のロード・リットン（一八〇三――一八七三）で、原作は『アーネスト・マルトレーヴァス』である。譯書は附錄一篇を添へて全部五冊になつてゐる。それは大政治家、大文學者たることを理想とする主人公アーネストが、樣々な人生の慘苦をなめ、困難に遭遇し、遂に永年の目的を貫いて身に榮冠を得ると同時に、久しく見失つてゐた戀人を昔のまゝの貞操に於て見出し、目出度く結婚するといふ極めて甘い物語（ローマンス）である。文體は所謂漢文直譯體といふので、當時の學者が論文や新聞記事をかくに用ひたのと同じ文體である。けれども戲文の跡は毫も認められず、その漢文直譯體に却て一種の淸新味があつた。試みに冒頭第一頁をあけて見よう。

『爰に說き起す話柄は市井を距ること凡そ四里許にして一ツの荒原あり、綠草繁茂、怪石突兀、滿眼荒凉として四顧人聲なく恰も砂漠の中を行くが如く唯悲風の愁々として草蕪に戰ぐを聞くのみ……』(原文は片かなである)。

今日では、如何に邊陬な田舍の中學生でも、こんな文章を書きはしないが、これが一新文體とされてゐた時代もあつたといふことだけは記憶して貰ひたい。兎に角、この作品は非常に廣く讀まれたものと見え、五六十代の人々に聞いて見ると、みんな面白く讀んだと言ふ。一體、何故そんなに廣く讀まれたのであらうか。それは言ふまでもなく、原作者その人が、英國の大政治家であり又文學者であつたからである。單に文學者であるといふだけでなく、大政治家といふことが、當時の青雲をのぞんでゐた青年の心を捉へたのであつた。

又この『花柳春話』は、明治の文壇に於ける意義ある飜譯小說の嚆矢として、吾々の注意すべき作品である。無論これ以前に於て飜譯文學がなかつたとは

言へない。既に明治の初年に於てはシェークスピアの『ハムレット』が何人かの手に依つて『西洋歌舞伎葉武列土』として『平假名繪入新聞』にかゝげられたといふ事實もあるし、又明治六年には渡邊溫の譯で、『通俗伊蘇普物語』が出たといふ事實もあるが、前者は殆ど原作の彿を存せず、從つて飜譯文學としての第一義を缺き、又後者は寧ろ文學としてよりは童蒙訓話として譯出されたのであるから、先づ純文學としての飜譯は、『花柳春話』であると見ることに、異議はないと思ふ。

『花柳春話』が一度人氣に投ずると、これに類似の飜譯が簇出した。先づ同じリットンのものでは藤田茂吉、尾崎庸夫共譯『繫思談』(ケネルム・チリングリー)、織田純一郎譯『寄想春史』(ポンペイ最後の日)、坪内雄藏譯『慨世士傳』(リエーンジ)や、同じく政治家の崇拜の的になつてゐた英のビーコンスフィールド卿卽ちデスレリイ(一七六六——一八四八)のものでは、關直彥譯『春鶯囀』(コニングスビイ)等は、何れも有名なものである。なほこの外、牛山鶴堂譯の『梅蕾

餘薰』（スコットのアイヴァンホー）、橘顯三（實は坪内雄藏）譯『春風情話』（スコットのランマームーア）、井上勤譯『全世界一大奇書』（アラビアン・ナイツ）、伊澤信三郎譯『鐵烈奇談』（フェネロンのテレマック）、服部誠一の名で出た『春窓綺話』（スコットの『湖上の美人』譯者は坪内、天野、高田の三氏であるといふ）、それから坪内雄藏の『自由太刀餘波鋭鋒』（シェークスピアのジューリアス・シーザーを院本風に綴つたもの）が出たのもこの前後である。『ロミオとジューリエット』さへ多分の政治的興味を加へて飜案されたのであつた。

以上の飜譯は主として、政治小說か歷史小說、さうでなければ傳奇的趣向を多く含んだ物語であつて、やがては政治の舞臺に登場して主人公の役目をつとめようと夢見てゐる青年、青春の血に燃えてゐる青年の胸を强く打つものがあつた。更に又この時期には、傳奇的趣向に科學知識を盛つた所謂科學小說の飜譯が多く出て、これ又世人の注意を引いた。今、その主なるものを擧げると、服部誠一譯の『二十世紀』を筆頭に、井上勤譯の『海底旅行』（フラ

ンスのジュール・ヴェルヌ原作)、『月世界旅行』(同人作)、『造物者驚愕試驗』(同人作)、川島忠之助譯『八十日間世界一周』(同人作)、その他『三十五日間氣球旅行』(同人作)等その數は可なりにのぼる。これは、後年小中學の生徒の間に非常な勢力で廣まつた、かの冒險小說若しくは怪奇小說の先驅と見て好い。

さてこの當時の飜譯小說は、政治小說と言ひ、歷史小說と言ひ、又科學小說と言ひ、何れも今日から見れば甚だ幼稚不完全なものであるが、單に學問の窓からでなく、藝術の世界から西洋人の思想や感情を日本人に知り味はせたといふ効果、及び微妙な思想感情を我が國の文學に注入して、新文學の芽生を培つたといふ業蹟は、これを認めなくてはならぬ。

尙ほ飜譯小說に就いて注意すべきことは、それ等の飜譯執筆者が二三氏をのぞいては、皆な政治家若しくは政論家であつたといふことである。これはひとり飜譯小說に限らず、次に述べようとする政治小說の筆者もさうであつた。從つて或る意味では、飜譯小說や政治小說は、文學者の產物でなくて、

政論家の餘技になつたものといふことが出來る。然し、これは表面の觀察であつて、眞相を穿つた解釋ではない。元々彼等が政治方面に於て自己の技倆を發揮して成功を收めようとしてゐたことは言ふまでもない。けれども政治の舞臺は野心ある人々全部を主要役者たらしむることは不可能であつた。そこで自然野心を抱きながら、尙その捌口なく、徒らに憂憤憂悶の狀態を生ずるに至つて來た。その憂憤憂悶を飜譯の筆に、政治小說の筆に托したのが、彼等なのである。だから彼等には最初から文學的才能はあつたのである。その文學的才能に依つて、求めて得られない憂憤憂悶の心境を披瀝したのである。從つて飜譯小說、政治小說の執筆は彼等に取つての餘戲ではなく、生命を賭した事業であつた。

以上の如くであるから、その飜譯にしても又その小說にしても、傾向的、概念的、政治的であることは寧ろ當然すぎることである。彼等は自己の所見と一致するものを求めては飜譯し、自己の政論を披瀝するために小說を書い

た。さうして一層端的に自己の所論を感情的に訴へることの出來るものは、飜譯よりは寧ろ小説であつた。茲に於てか、飜譯小説の流行と前後して政治小説の出現を見るに至つたのである。

三　政治小説の出現

政治小説として當時の讀者を强く動かした主なるものを擧げて見ると左の通りである。

矢野龍溪著『經國美談』(明治十六年―十七年)
同　『浮城物語』(明治二十一年)
東海散史(柴四郎)著『佳人之奇遇』十六冊(明治十八年―三十年)
菊亭香水(佐藤藏太郎)『慘風悲雨世路日記』(明治十七年)
末廣鐵腸著『雪中梅』上下(明治十九年)
同　『花間鶯』上中下(明治二十年―二十一年)

須藤南翠著『新粧之佳人』（明治二十年）
同　『緑簑談』（明治二十年——二十一年）

以上の他に、當時非常な歡迎を受けて讀まれた藤田鳴鶴（茂吉）の『文明東漸史』を政治小說と見做す文學史家もあるが、私は、寧ろこれを著者自身の序文に述べてある通り、『天文以降天保の末年に至る迄凡そ三百年間外國交際より生じたる事變を記述し泰西文明の東漸せる起因成果を明かにし讀者をして封建鎖國の世に當り泰西文明の進步せる實狀を知らしむる』一種の文明史論と見做したい。篇中、渡邊華山、高野長英の二氏に特に力點を置いてヒストリカル・キャラクターとして取扱つてゐるあたりを見れば、或は又政治小說、歷史小說の一變態と見ることは出來ようが、無理にさう解釋するにはあたるまいと思ふ。

さて前に列擧した著作中、最も廣く讀まれ又最も大きな影響を社會に與へ

たものは、言ふまでもなく、東海散史の『佳人之奇遇』である。

頁をくると、吾々は直ちに米國費府（フイラデルフイア）の獨立閣に導かれる。そこには主人公東海散史が米國獨立當時を追懐思慕してゐる樣が見える。吾々は更に主人公と共に、『春風駘蕩朝霞烟の如き』なかを輕舟に掉して蹄水（デラウエーヤー）の支流を下る。忽ち會す一妃の綽了たる風姿をのせた小艇に。その一妃は女主人公愛蘭の幽蘭女史である。かやうにして舞臺はそれからそれと世界に擴がる。散史はかうして到る處、亡國の跡を弔ひ、將來の希望を語る。その間に甘い戀愛を織り込んだものが、この『佳人之奇遇』である。散史自身會津の遺臣で、亡國の非運を身に負つた人であるだけに、全篇に一種のスウィート・ペーソスが漲つてゐる。文體は漢文直譯體で而かも一種の句調さへ帶びてゐる。參考の爲めその一節を擧げて置く。

『百花翩翩風に隨て飛び黨嚶鸝々樹を繞て囀る。水に枕して一家あり廣壯

ならずと雖も古雅清致塵俗を脫し庭前の松柳其自由に任せ門に長者の車轍を見ずと雖も人をして偉人の居たるを察せしむ……』（原文片假名）

『經國美談』は『佳人之奇遇』に比べると、その文章が大變やはらかになつてゐて雅文に近い。その內容は、ギリシャの各邦が競ひ立つて爭つてゐた時に、テーベの名士エパミノンダスとペロピダスとが力を協せて國威の全盛を來した史上の美談が中心になつてゐる。理想に燃え、野心にあふり立てられてゐる靑年の心に可なり大きな刺戟を與へた作品である。

末廣鐵腸の『雪中梅』と『花間鶯』とは、前二者に比し、甚しく技巧が現代化してゐる。その內容として取扱つてゐるところも、皮相ではあるにせよ、現實生活、卽ち現實の政治を背景として動く人間生活である。自由民權說の主張、各地に於ける宣傳演說、それに對する警察の取締り、過激思想取締り、あちこちにある撿束騷ぎ、その間にあつて、飽くまでも紳士的に自由民權の

思想を國民の頭腦に徹底させようとして幾多の苦難に遭遇する若い政治靑年、この殺伐な空氣をいろどるに、『當世の女は昔風では行かぬ琴や三味線は大抵でいゝから十分に學問をさせる』との父の意見をそのまゝ受けて育つた新しい而かも美しい女性を以てしてゐる。自由結婚の思想なども、無論作者は無意識であらうが、自づと表はれてゐて面白い。須藤南翠の『綠簑談』の表紙には "Political Novel" なる文字が入れてある。政治小說の流行が如何に盛んであつたかはこれでも知れる。尙ほこの作は農村問題を取扱つた最初の作品として注目に値する。彼等以外にも尙ほ多くこの政治小說に筆をとつたものがあるが、殆ど言ふにたらない。

さて政治小說は、前にも一寸述べた通り、政治家や政論家が、政治の舞臺から引き出された結果、その憂憤憂悶をもらしたもの、若しくは自己の政見を宣傳せんが爲めに書いたものであるから、元より傾向的、第二義的たることを免れない。從つて獨立した第一義の文學といふことは出來ない。文學は

常に政治の道具となり傀儡となつてゐた。だから、文化史的見地から見れば、時代の反映として、時世相の寫鏡として存在意義があり、又眞の文學の如何なるものであるかを明白にする對象物となつて、飜譯小説と共に、次の新興文藝を培ふ素因となつた所に存在價値がある。けれども文學それ自體としての價値や意義は殆ど認められない。性格の描寫に別に見るべき物があるでもなく事件の發展に自然の推移があるでもなく、空想を深くほりさげて、讀む人に鋭く喰ひ入るチャームがある譯でもない。時代の推移と共に、その力は失せて行く。

かやうにして明治第一期後半の文學を代表する政治小説も飜譯小説も次第にその影を沒することになつて、その間に徐々に養はれて來た文學に對する自覺の念は、遂に凝つて明治十八年、坪内逍遙の『小説神髓』となつてあらはれた。その前後を境として、明治の文學は、始めてその眞實の建設期に這入つた譯である。明治十年前後は謂はゞ文學の上に曙の第一線がピカリと射し

たに過ぎなかつた。その光が萬天地に及んだのは、二十年前後のことに屬する。吾々はこの時代を第二期として、追々論及することにしよう。

斯く、一方に於て文學はその獨立性を自覺して、他の部門の利用に供せられることがなくなると同時に、他方、二十三年の國會開設と共に政治運動にも一段落がついて、國民の政治的興奮は沈靜し、從つて政治小說の飜譯創作が以前ほどには興味を惹かなくなつた。先づ創作の方面では『佳人之奇遇』の第十卷が明治二十四年に出たのが最後の打ちきりであり、飜譯では末松謙澄の『谷間の白百合』の二十一年に出たのがとまりであらう。

さて以上の飜譯創作の政治小說を通して、明治二十年代の日本國民の思想感情の背景を眺めて見ると、私には何となく、極めて大ざつぱな、ラフな、散文的な意味に於て、一脈のロマンティックな傾向が共處に漂つてゐるやうに思はれるが、間違ひだらうか。極めて實際的な政治や經濟の奧底に、より以上の生活に對する一脈の憧憬思慕の感情の漂ひ流れてゐることを、私はどう

しても看取せずにはゐられない。『經國美談』や『佳人之奇遇』に對する讃美は、極めて低い意味に於てではあるが、ヘロイズム、英雄崇拜の讃美とは見られないであらうか。又『花柳春話』や『全世界一大奇書』や『浮城物語』に對する興味は、キューリオシティに對する無限の慾望と見ることは出來ないだらうか。一般に自由民權論や地方自治の主張を表現した政治小說が歡迎されたといふことは、比較的手近な政治といふ實際生活の中に、無限に求めてやまない人間の理想を具現しようとする一つの可憐な美しいロマンティシズムの現はれではあるまいか。かう見て來ると、傾向的な、第二義的な飜譯創作の政治小說も、瑕があつたり、歪みがあつたり、汚點がついてゐたりしても、ロマンティシズムの精でねりかためた器として、なかなか捨てがたくそゞろに愛着の念を禁じ得ない。

第二期の文學

第三講　『小說神髓』の主張

一　個性自覺の閃光

明治十六年に東京帝國大學文學部を出た坪內逍遙は、同十八年新文學運動の宣言書『小說神髓』二卷を公けにした。尙ほその裏書と見做さるべき小說『一讀三嘆當世書生氣質』をば、その前年から十九年一月にかけて著はし、以て小說壇の風潮を一新した。坪內博士の作には、まだこの外に『妹と背かゞみ』(十八年――一九年)、『內地雜居未來の夢』(十九年)、『細君』(二十二年)などがある。明治二十年には、二葉亭四迷の『浮雲』第一篇が出た。同二十一年にはその第二篇が世に現はれ、又同氏譯、ツルゲーネフ原作『獵人日記』中の一篇『あひゞき』が、『國民の友』誌上に揭げられた。山田美妙齊の短篇集『夏木立』が出版されたのも亦たこの年である。尙ほこの二十一年には、硯友社同人の機關

雜誌『我樂多文庫』を始め、『都の花』(金港堂)、『小說華錦』(春陽堂)、『大和錦』(博文館)、二十二年には森鷗外一派の『しがらみ草紙』などが簇々創刊された。先にあげた『國民の友』は二十年の創刊で、德富蘇峰主宰の思想及び文藝の雜誌であつた。それから二十年に出た美妙齊主宰の『以良都女』も文藝物をのせて一方の權威となつた。

斯くの如くにして新文學の萠芽は、一時にあちらからもこちらからも頭をもたげて來た。これには勿論遠近さまぐ〳〵の原因があるが、最も直接的にして効果の多かつたのは、坪內博士の熱心な活動であつた。さうして坪內博士を斯く動かしたものは何かと言へば、いふまでもなく時代の氣運そのものに外ならない。從つて玆では、坪內博士の活動に論及する前に、その大勢について簡單な說明を試みて置かう。

二十年前後と言へば、維新以來、日に月にその熱度を加へ來つた歐化主義が、その極點に達した時である。十八年に始めて建設された伊藤內閣の外交

政策は、一にも二にも、外國の甘心を買はんが爲めの極端な歐米模倣主義であつた。その結果が、嘗つて述べた、かの鹿鳴館の晝夜ぶつ通しの假裝會、舞踏會のらんちき騷ぎであつた。既に政府の方針や行動がさうであつて見れば、一般世相の傾向が何で獨り立ちはなれてゐよう。或は大學生と女學生とが一緒になつて英語の忠臣藏を演ずるとか、束髮や女の洋裝が流行するとか、或は『羅馬字會』が組織されるとか、その他社會の各方面に於て、西洋崇拜の現象は到る所に見られた。燒鏝をあてゝ頭髮を縮らし、西洋人と似たとて誇る痴漢や、眼の玉を青く染めることが出來ないとて怨む阿呆者が、そこらにうよ〳〵してゐた。何によらず日本固有のものでさへあれば、劣等なもの野蠻なものとして排斥され、西洋のものと言へばボロ靴や破れた古いシャツまでが珍重されてゐた。

然しこの歐化主義に對しては、やがてリアクションが起つて來た。西歐心醉熱に對して、日本固有の思想が擡頭して來た。所謂國粹保存主義がそれであ

る。さうしてこの運動の陣頭に立つたものは、雜誌『日本人』(明治二十一年、今日の『日本及日本人』)を起した三宅雪嶺、志賀矧川、井上圓了、棚橋一郎の諸氏であつた。

勿論その當時まで、歐化主義に對する反動的氣勢が全然なかつたといふ譯ではない。宗敎、道德、敎育の方面に於て幾度か反動運動は惹起されたが、元より大勢を左右するほどのものではなかつた。政敎社の運動に至つて始めてそれは世間の注意をあつめるやうになつたのである。政敎社の人々の主張する所謂國粹保存主義とは何かと言ふに、別に確乎たる國粹の具體的說明がある譯ではない。西洋々々と騷ぎ立てるが、それほど日本固有のものには價値がないのか、二千有餘年間の傳統と歷史とを有する日本には果して何の取柄もないのか、吾々は沈思熟考以て日本には日本固有の文明のあることを知り、その長を取つて短を去り、補ふに彼の長を以てすべきなりといふのが、彼等の主張であつた。その所說、元より固有の文明が何であり、國粹が何を

意味するかを明かにしてゐないが、可なり世間を動かした。といふのは、一般の民衆が、歐化熱の馬鹿々々しいこと、苦々しいことに氣付いて來たからである。言ひ換へれば、自覺の念が湧いて來た爲めである。そこへ持つて來て、まだ〳〵チョンマゲの惜しい連中で、永らく大勢の動く所如何とも仕方なく泣きねゐりになつてゐた者が、我が天下復來れりとばかりに、該主義の傘下に集まつた。かうして保守思想は案外に勢力を得、延いては、やれ淳風美俗だの、武士道だの、儒敎道德だのといふ『傳家の鑄刀』までが持出されるといふ、所謂羹にこりて膾を吹く愚も、亦極端な國粹保存主義さへはびこるに至つた。これ等は明かに思想乃至文化の逆轉であつて、滔々として漲り溢れる大勢を遮る力は元よりなく、一時の反動現象たるに過ぎない。けれどもこれ等凡てを包括した二大運動が、一般の民衆に自覺の念を植ゑつけて、今まで浮腰になつて、西洋の甘い酒に醉つてゐた者の眼をさまさせて、確乎たる文化の進展策を講ぜしめるやうに導いた功績だけは、何としても認めなけ

ればならぬ。

この風潮は、政治に於ては國家主義となり、教育に於ては國語教育となり、宗教に於ては基督教を排する佛教の復活となつて現はれた。この風潮の影響は、又文學藝術の方面へも這入つて來た。政教社の一派は、頻りに古美術保護を奬勵した。それに續いて、帝國大學の雇教師たるフェノロサは、熱心に日本美術の研究を試みて、その價値を高調した。そのため日本美術は意外の隆盛を見るに至つた。これと相前後して國文學も亦復活した。落合直文、小中村義象の如き新進氣鋭の國文學者が出て、歐化主義の下に國文學が日蔭の憂目にあつてゐるのを嘆じて、あらゆる機會を利用して、その鼓吹につとめた。その結果は、終に『日本文學全書』や『日本歌學全書』の刊行をさへ見るに至つた。そのおかげで、西鶴や近松が、地下から呼び起された。序ながら西鶴熱勃興に關しては、淡島寒月の功を忘れてはならぬ。斯うして、日本文學中でも、特に西鶴や近松は、新文學の一要素となつた。それは、西鶴や近松

の中にあるリアリズムが、丁度當時の文學の新興思潮たるリアリズムに合するところがあつた爲めである。

さて、善い意味に於ける國粹保存の思潮は、今まで吾を忘れて、只管西洋熱に浮かされてゐた者が、漸く吾にかへつて吾の眞價に眼をつけて來た、卽ち自覺的、反省的、批評的の傾向を一括したものと見ることが出來る。この自覺的、反省的、批評的の立場に立つて、在來の文學を回顧したら如何なる感じに打たれるか。元より一九や馬琴の舊夢を繰返す魯文一派の戯作に滿足の得られよう筈がない。さうかといつて、政論家や野心家のうさばらしに過ぎない政治小說や飜譯小說の如き變態文學も、餘り食はされてはあきが來る。新興文學が期待されるのは、蓋し當然である。

斯くして上に述べた自覺的、反省的、批評的精神から生れたものが、坪內逍遙の『小說神髓』なる新文學論であり、又その理論を裏付けたと見るべき小說『書生氣質』である。

二　明治文學の曉鐘

實に『小說神髓』と『書生氣質』とは、明治文學の曉鐘である。眞の明治文學は、こゝにこそ出發點を有する。近世文學の世界的思潮をリアリズムとするならば、我が國の文學は『小說神髓』と『書生氣質』とに於て始めて、世界の仲間入りが出來たのである。先づ『小說神髓』の要點を略記し、以て新文學論の「新」なる理由を明かにしよう。

『小說神髓』は上卷下卷の二部から成つてゐる。その目次を列記すると左の通りである。

上卷

小　說　總　論……（註）｛美術（今日の藝術）とは何ぞや
　　　　　　　　　　　　　小說は美術なりとの理由

小説の變遷……（註）
- 小説と歴史の起原
- 小説と演劇との差別

小説の主眼……（註）
- 人情こそ小説の主眼

小説の種類……（註）
- 描寫小説と勸懲小説の區別
- 時代物語世話物語等

小説の稗益……（註）
- 小説の四大稗益を論ず

下巻

小説法則總論……（註）
- 小説法則の必要
- 各文體の得失

小説脚色の法則……（註）
- 快活小説と悲哀小説
- 脚色の十一弊

時代物語の脚色……（註）
- 正史と時代物語
- 時代物語創作の心得

主人公の設置……（註）┌主人公の性質
　　　　　　　　　　　└主人公の二假設法

叙事法……（註）┌叙事法の陰陽二法

この『小說神髓』が如何なる抱負の下に書かれたかは、緒言を見れば、直ぐ了解出來る。左にその大要を示さう。

今日は小說がなか〳〵盛んで、戲作者と言はれる輩も少々でないが、大概は飜案家で、獨立の作者として見るべきものは一人もゐない。近來刊行される小說は、何れも馬琴、種彥の糟粕か、一九、春水の贋物が多い。蓋し彼等は、小說の主腦は勸善懲惡にありと心得、道德といふ模型を作つて、脚色をそれの犧牲にするから、强ち故人の糟粕をなめようとするのでなくとも、その範圍は狹く、從つて同徹同向の小說を作ることになる。この罪は元より作者にあるのだが、又その一半は眼識のない讀者の負ふべきものである。蓋し

古來我が國の習慣として、小説を敎育の一方便と見做し、連りに奬誡勸懲を以て主眼とすべきことを唱へながら、實際には殺伐慘酷な若しくは猥褻な物語のみを歡迎する風がある。そこで作者は元々大した見識がある譯でもないから、忽ち輿論の奴隷となり、流行の犬となつて、時好に適する殘忍な稗史をあみ、陋猥な情史をつゞり、名義を勸懲にかりて、その主旨を强要して、その結果人情をまげて無理な脚色をする。斯くして拙劣な趣向は益々拙劣を加へて、大人學者から見ると馬鹿らしくて讀むにたへない。これは主として作者が、眞に小説の主眼を悟らないで、舊來の誤つた觀念をそのまゝ守つてゐるからに外ならない。自分は幼少の折から古今の小説を讀み、それに關して得た知識もあるし、又小説の目的が何處にあるかも略々悟り得たやうに思ふから、今それ等の考を一纒めにして公表し、一方讀者のまどひを解き、他方作者の蒙を開いて、我が小説壇の刷新を圖りたい。

斯かる抱負の下に、博士は、小説に對する舊觀念を破壞し、新觀念を樹立

した。「小說總論」と、「小說の主眼」とが、この意味で、上下二卷を通じての最要點である。總論に於て、先づ、小說が一種の美術（今日の藝術）であり、美術は實用主義、目的主義のものでなく、それ自身獨立體であり、從つて小說は勸善懲惡の具に供さるべきでなく、又敎育や道德の奴隸たるべきものでないことが主張されてゐる。次に「小說の主眼」の中では、新らしい小說が如何なるものでなければならぬかを說いてゐる。『小說の主腦は人情なり、世態風俗これに次ぐ。』そこで人情とは何であるか。言ふまでもなく、人間の情慾である。人間は情慾の動物で、如何なる賢人善者にも情慾はある。彼等は常にそれを表はさないまでゞあつて、心の底にそれがない譯ではない。從つて人間には、外に現はれる行爲と、內に藏された微妙な感情情緖との二條の現象がある。歷史や傳記は、外に現はれた行爲を叙するが、內部に藏された感情や情緖を細かく描くことは出來ない。そこでこの人情の微妙な奥底を穿ち、所謂賢人君子は言ふに及ばず、老若男女善惡正邪の心の內幕を餘すところな

く描出して周到精密人情を灼然として見えしむるのが小說の役目である。小說家は從つて心理學者でなければならぬ。宜しく心理學の道理に基いて人物を作るべきであつて、苟にも自分勝手な意匠で强ひて人情に悖戾した、否な心理學の理に戾つた人物を作るなら、その脚色が如何に巧みであらうとも、又その物語が如何に奇なりとも、勝れた小說とは言へない。故に小說といふからには、飽くまでも、人物の心の內面を深く描寫し模寫して、それを眼に見えるやうに作つたものでなければならぬ。かくすることに依つてのみ、時代々々の人情世態を寫すことが出來、小說は始めて人生の批評となり得る。

以上は「小說の主眼」に述べられてゐる大要である。これで見ると、心理描寫の說、客觀的傍觀的態度の說、排主觀說、狹義でなく、廣い意味での人生の爲めの藝術の主張等、近世リアリズムの持つ特色の主要なものが含まれてゐる。この說に依つて、文學に對する舊觀念、卽ち文學は道德や敎育の奴隷であるとか、又文學は主として滑稽、諧謔、洒落を主眼とすべきであるとか

いふ觀念が見事に破壞されたのである。

博士は更に、小說の種類に言及し、續いて小說の四大稗益を擧げてゐるが、小說の利益については大分苦しまぎれの案出といふ感じがする。曰く人の氣格を高尙にする、曰く人を勸善懲誡する、曰く正史の補遺となる、曰く文學の師表となる等擧げてはゐるが、どうも手際が見事でない。然しこれは必ずしも博士の罪でない。元々、小說の利益を、科學や經濟學や政治學のそれの如く、ソロバンではじいて數字にしようとするのが、無理な話である。小說の價値とか効果は言ふべくして言ひ得ない所にこそある。常にxだ。それにも拘らず、博士が個條書にしてまでそれを擧げたといふのは、恐らく小說を熱愛する本能のやみがたくして、少しでも小說の價値を世の人々に知らせたい老婆心に基いたのであらう。從つてそれを詮議立てするのは、する方が野暮である。下卷は、上卷の主旨に基いた小說作法で、今日から見れば幼稚な點、明かに考へ違ひと思はれる筋もあるが、當時に於て、あれだけ考をまと

めあげた苦心は、特筆に値する。
一度『小說神髓』が出ると、明治の小說は戲作の範圍を脫して近代小說の名に恥しからぬものとなることを得た。春水、馬琴の舊夢に外ならぬ戲作や、第二義的の飜譯並に政治小說やの流行に對して、實際の人情を描寫せよ、實人生に留意せよと叫んだ聲は、死に瀕してゐた明治小說を救ひ、且つは新しい文學を興す一大警報となつた。
『小說神髓』の理論を實際に適用して、新小說の範を垂れたものが、『一讀三嘆當世書生氣質』(春のやおぼろ先生戲者として、本名は用ひなかつた)十七卷である。新文學に對する要求に燃えてゐた矢先であるから、一般の民衆から歡迎されたことは非常なものであつた。赤門を出た學士が小說を書いたといふ樣な事も、當時にあつては人氣をそゝる大きな要因であつた。當時を追懷した內田魯庵の文に左の一節がある。『生殘つた戲作者の遺物どもは法燈再び赫灼として輝くを見ても戲作の圈內を彷徨して出づるを知らず、指を銜へ

て眼を白黑するより外無かつた。中には戲文や駄洒落の才を顧みて京傳、馬琴の舊夢を繰返す恰かも今の歌舞伎役者が因襲を力に危みながらも安心してゐると同じものもあつたが、大勢は終に滔々として渠等を置去りにした。斯る折から卒然崛起して新文學の大旆を建てたは文學士春廼舍朧であつた。世間は既に政治小說に覺めて、歐米文學の絢爛莊重なるを敎へられてゐた時であつたから、彼岸の風を滿帆に姙ませつゝ、此の新しい潮流に進水した春廼舍の「書生氣質」が恰も鬼ヶ島の寳物を滿載して歸る桃太郞の舟の如くに歡迎されたは當然であつた。是れ實に新文學の勝利であつて天下の靑年は爭つて文學の成功に嚮つて趨つた。

『書生氣質』が如何に多くの人氣をあつめ得たかは、右の一文で十分理解することが出來よう。この『書生氣質』の出現に依つて、小說なるものの權威が俄かに社會から認められ、延いては文壇の社會的位置が急に高く評價されることにもなつた。以後、學者、識者にしてこの道に入るものが多く輩出して

新興文學の基礎は確立した。然らば、當の『書生氣質』の內容及びその價値は果して如何なるものであるか。

三　『當世書生氣質』の價値

この小說は、作者春のやおぼろが、かの『小說神髓』に示した大抱負に從つて筆を下した全部十七號二十回に及ぶ可なりの長篇である。その題材としては、當時の社會に一階級を形造つて來た書生の一團をとり、以て彼等の日常生活、彼等の風俗、彼等の思想乃至理想を、作者自身の小主觀はなるべくはさまずに、ありのまゝ描出したものに外ならない。

この小說には一貫した筋がない。又歷乎とした主人公がない。篇中小町田粲爾と稱する書生は一見主人公の如く見えるが、他の書生と共にその一典型として描き出されたにすぎない。又無理に筋を求めれば、この小町田が、藝妓田の次と戀愛關係を結び且つ又離れて行く徑路にそれらしいものがないで

はないが、全體から見ると、これも大連峰中の一突起たるにすぎない。作者はたゞ甲乙の人物、ＡＢの事件を捉へ來つて、人物と事件とが絡み合つたところに生ずる微妙な人間心理を描き、以て世相の一端を示したにすぎぬ。斯くして作者は、小說には必ず一貫した筋のあるべきもの、歷乎とした主人公のあるべきものといふ舊式の考を抱いてゐた人の前に、全く近代的な樣式の小說を提供して、先づ讀者を煙にまいたのである。

筋のないこと、主人公のないこと、これは近代小說の主要なる特色の一つであると言つて好い。筋のない小說としては、イタリーにダンヌンチョオの『死の勝利』があり、主人公の無い小說としては、英國にサッカレーの『虛榮の市』がある。又日本に於てこれを求めれば、島崎藤村の『春』がある。これには一貫した筋もなければ、歷乎とした主人公もない。而かも立派な小說になつてゐる。この意味からすると、『書生氣質』は『春』などの先驅をなしたものと言つても差支へあるまい。

次には、『小説神髓』の中で述べてゐる抱負を、どの程度まで作者が實現したか、それを少しく調べて見よう。『當世書生氣質』のはしがき中に左の一節がある。

『予頃近小説神髓と言ふ書を著して大風呂敷をひろげぬ。今本篇を綴るにあたりて理論の半分をも實際にはほと〳〵行ひ得ざるからに、江湖に對して我ながらお恥しき次第になん。』

遺憾ながら、吾々はこの言葉を承認せざるを得ない。先づ文章の點から見て行くと、新しがらうと可なり苦心した路は見えるが、馬琴、種彥に私淑してゐたといふ作者の筆致は、やゝもすればその里心を現はし、冒頭からして、『さま〳〵に移れば變る浮世かな。幕府さかえし時勢には、武士のみ時に大江戸の、都もいつか東京と、名もあらたまの年每に開けゆく世の餘澤なれや』と、古い七五調そのまゝである。かういふ點を見るとまだ〳〵舊文學の臭味を脫しきらないことがよく分る。このために、新しい空氣を出さうと試みて、

文明を氣どつた言葉や、英語を隨所に用ひてゐるが、何となく不調和で、効果を減殺することと夥しい。

更に作者が苦心した性格描寫なるものを見るに、苦心のしばえがはつきりしてゐない。甲の性格に神經質な弱々しさを、乙の性格に豪放磊落な性質を附與するといつたやうに、それぞれの人物を性格的に區別してはゐるが、それが終に一個の型、類型に終つて、それ以上に出てゐない。つまり個性的なアクセントがない。各人物を活かすために、更に作者は心理學者にならねばならなかつたのだ。

尙ほ全體を通讀して後に殘る印象を言へば、重い意味よりも輕い調子である。深いといふよりも廣いといふ感じである。新といふよりは舊といふ氣持である。この印象を分析して見ると、皮相な滑稽諧謔な分子が多くて、人生的意義を思はせる要素が尠ないといふことになる。その滑稽諧謔の高尙なる點に於て素より一九や魯文のそれと同日の談でなく、又眞面目な點に於ては

春水、種彥等戲作者の到底及ぶところでないが、その滑稽諧謔や眞面目さが、深く人生的意義に立脚してゐない事實は、如何としてもいなみ難い。

今の高田早苗、半峰居士がこの小說を細評して、この意味に近いことを述べてゐたのは、當時に於ける卓見である。尙ほこの批評は情理を兼ね具へた文藝批評の最初のもので、且つ名批評である。

要するに『當世書生氣質』には、新の字を冠し難い點がある。新の要素と舊の要素とが五分々々に突き交ぜられてゐる。所詮は過渡時代の所產である。歷史的の立場から見てこそ多くの價値はあれ、小說そのものとしては、さまで意味を認めることが出來ない。詮ずる所、坪內博士のこの期に於ける活動は、破壞の事業には遺憾なく効を奏したが、建設の方面に於て未だしの觀なきを得ない。『內地雜居未來の夢』(十九年)『姉と脊かゞみ』(十九年)『細君』(二十一年)『京わらんべ』(十八年)等の作品も、史的價値として存する以外、藝術としての獨立價値を餘り多く持つてゐない。けれども新文學の機運は、坪內博

士の活動を機會として、加速度的に進んで行つた。

第四講　新文學運動の諸相

一　寫實主義の分裂

坪内博士が叫んだ小說革新論の中心たり要諦たるものは、今の言葉で言へば藝術を人生に若しくは實生活に交涉せしめるといふことであつた。餘戲と思はれ、遊戲と見做されてゐた文藝を、眞面目な高尙な人間活動の範圍に入れようとした點、そこに新意義が存してゐた。ところがその作例たる『當世書生氣質』は、必ずしも藝術を人生に交涉させるといふ考、卽ち人生的傾向のみを示したものではなかつた。そこには在來の藝術卽遊戲といふ遺產觀念が殘つてゐた。さうして當時の文藝運動は、この二つの傾向、別言すれば人生的傾向と藝術的傾向とに向つて進むことになつた。一つは藝術に與を托してそれに遊ぶといふ傾向、從つて美の發揮が生命である。他は藝術に如實の人生

を與へてその眞を發揮せんとする傾向、從つて眞の表現を生命とする。或る意味では如何なる文藝運動も、この二つの傾向の消長であると言へる。今まで見て來た明治初期の殘黨文學の如きは、明かに藝術的傾向を示すもので、これに飽き足らずして起つて來たのが、坪内博士の人生的傾向であつた。さうして明治文學の第二期に於いて、この叫びに合致して擡頭したのが、二葉亭四迷であり、藝術的傾向を代表したのが、尾崎紅葉を中心とする硯友社一派である。斯く第二期に於て文藝運動は明かに二つに分裂した。さうして吾吾が特に注意を要すべき點は、この第二期が、革新運動の後を受けて、當然人生的傾向を盛んになすべきであるのに、事實は却つて藝術的傾向に依つて全時期が蔽はれたといふことである。坪内博士の小説革新の聲は、僅かに二葉亭の耳に正しく響いたゞけで、その叫びが眞に廣く鳴り渡つたのは、第三期、眞の意味に於ては第四期の自然主義時代に於てゞあるといはねばならぬ。若しもあの小説革新の叫び聲が、もつと正しく、もつと廣く、第二期に於て

響き渡つたならば、明治の文藝運動は、更に長足の進歩を示したかも知れなかつた。

二　人生的傾向の代表者

坪内博士の『小說神髓』に於ける論旨を、遺憾なくその創作に於て發揮したものは、決して『當世書生氣質』ではなく、私は寧ろ二葉亭四迷の『浮雲』（二十年――二十二年、二十四歲の作）であると思ふ。この一篇こそ新文學好個の典型であり、明治四十五年間の文學を通じて、巍然として聳立する最高峰の一である。

『浮雲』は、三編から成り、第一篇（二十年）、第二篇（二十一年）は、春の舍おぼろと共著で出、第三編だけが二葉亭の名で、雜誌『都の花』（二十二年）に掲載された。一度『浮雲』の初篇が出ると、世間は、書生氣質の出版當時にも劣らぬ程の騷ぎを以て迎へた。小說といへば、何かストライキングな異常な

事件やそれに臨んだ人物を捉へて描くべきもの、又それでこそ小説だと思つてゐた人々の前へ、極めて平凡な事實、極めて平凡な人物、のらくらしてゐる文三、一會社員の本田、平凡な家庭に新しい教育を受けて育つたお勢、古い思想に生きてゐるお勢の母お政、さういふ人々の間に醸される生活事實、そこに動く各人の心理、それをかざらず、いつはらず、極めて平凡な、言文一致といふ新文體に盛つて提供した。描かれてゐることは如何にも平凡だ。珍らしいことではない。それでゐて、讀者はぐん〳〵作品の中へ引込まれる。生活といふものを眞面目になつて考へずにはゐられない。讀後何かしら非常に重苦しい印象が殘る。始終くよ〳〵してゐる文三のことを考へると、暗い氣持になる。さうかといつて所謂世間を誤魔かして紳士顏をして送り、所謂出世の緒にすがつて行く本田を考へても決して光明は感ぜられない。矢張り暗い氣持になる。新しい思想を代表するお勢の生活も、その先に光明があるとは思はれない。勿論、古い生活の傳統をたよつてゐるお政に、新生活の望

みがありやう譯がない。それぐに人はより好い生活を求めながら、而かもそれを得ることが出來ない。と云つてその望みをたち切ることも出來ない。さういふことを考へて行くと深い人生に行きあたらずにはゐない。それほどこの作品は思索的傾向を多く持つた作品である。これは全く、人生を眞面目に考へて、その内部的生命を求めようとする探求者の尊い努力が、作をなす根柢に働いてゐるために外ならない。お政、お勢にからまる新舊思想の衝突なども、人生研究の根本から出發してゐるために、飽くまでも深刻である。

性格の描寫も可なり鮮かである。文三、お勢のそれに於て特に成功してゐる。お勢の氣まぐれには、多少作者の愛讀してゐたツルゲーネフの女性の影響があるやうに思はれるが、如何にも鮮かに描かれてゐる。お政や本田には作者が多くの努力を用ゐてゐないやうである。古い女のタイプ、さらにある紳士のタイプ、それが描かれてゐるにすぎない。

斯かる缺點は擧げれば未だ幾らもあるが、全體の印象から言ふと、勝れた

近代小說の一典型として認めることが出來る。坪内博士の『書生氣質』は印象の總〆高に於て舊であるが、『浮雲』は新である。吾々は、まだ〳〵舊傳統の地盤が勢力を得てゐた頃に、どうしてこれほど新しい自然派的小說が出來たのかを疑ふほどである。けれども別に不思議はない。それは二葉亭が早くから露語を研究して、ロシヤ文學に精通してゐた爲めに外ならぬ。

在來の文學は、外國の影響を受けたといつても、多くは、英國あたりの生ぬるい道德的、乃至功利的小說か、又は佛國あたりのローマンスのそれで、確に人生と密接な交涉を持つた文學のそれではない。ところが二葉亭氏が讀んだのは、全く人生そのものの表現、人生的傾向を極端に發揮したロシヤの小說であつた。ツルゲーネフ、ゴンチャロフ、ドストエフスキー、それらの作家のものの影響を尠からず受けてゐた。たま〳〵坪内博士の小說革新の叫びは彼がロシヤ小說から知り得た小說なるものゝ觀念と一致した。そこで彼は、當時の傾向がどうであらうと、自分のものがどう迎へられようと、一切構ふ

ことなく、只管自己の信ずるところに從つて一篇の創作を試みた。それが『浮雲』だつたのである。かういふ譯だから、自然派の脈を日本の文壇に始めて引き入れたのは、二葉亭だとも言へる。確かに二葉亭は進んでゐた。彼は人生を眞面目に考へ、且つ藝術を遊戲視しなかつた。後年彼は、「文學は果して男子一生の事業とするに足るか」との疑問を起したが、それは藝術を低く見、人生を高く見たのではなく、寧ろ、眞面目に文藝を考へ、且つ人生を痛切に考へた末の疑問であつたのだ。從つて吾々は、やゝもすれば二葉亭を始め、矢崎嵯峨の舍（矢崎鎭四郎、處女作『守錢奴の肚』（十九年十月）、『ひとよぎり』（同年十二月）等あれど、『初戀』（「都の花」により文名大いにあがる。）等に依るロシヤ文學の研究紹介が益々盛んになつて、その潮流が文壇を支配したら、ロシヤ小說はどうも暗くて厭だなどといふ紅葉などがなかつたとしたら、文壇はどんなに新しく進んだかと考へ勝ちになるのである。

以上述べたゞけでも、二葉亭の功績が明治文壇に於て如何に多大であるか

新内容の表現者として、二葉亭は、明治文學史に特筆されねばならぬ。

は、略々理解出來ることゝ思ふ。又新文體の創出者（美妙齋と共に）として、

三　硯友社一派の勃興

二葉亭の人生的傾向と明かに對立の形を取つて文藝界に活躍したのは、硯友社一派である。彼等は明治の第二期文壇に覇權を握つて、文界の梁山泊と稱されてゐた。明治十八年に尾崎紅葉、山田美妙齋、石橋思案、丸岡九華等、當時まだ大學豫備門にあつた同好の士が集まつて硯友社といふ一團を組織した。その機關雜誌として、『我樂多文庫』なる淨寫雜誌を發行して、同人の間に廻送した。十九年十一月の第九號からは印刷にし、更に二十一年五月からは公然發賣することにした。尙ほ十九年には同人も大いに增加して、川上眉山、巖谷小波、廣津柳浪等も名前を連ねるに至つた。

この一派の主義傾向を最も明白に示してゐるものは『我樂多文庫』の初號に

のせた披露の一文である。起草者は半可通人尾崎紅葉である。左に全文を掲げて、同人の文藝觀を知るよすがとしよう。

『激して曰くはチト大業。文して參るはヤ、艶めく。則ち書をもて才子諸彦に告まつる。夫れ、人に樂あり。隣の壁から燈をぬすみて書讀むも樂なり。銅臭きを喜ぶ守錢奴、一簞の冷飯に事足るとする濟貧家も亦樂しむ所なからずやは。傾城の涙に家藏の雨漏りをかへりみず。あるは二合半の寢酒に布袍を打殺して、飛だ罪障つくるも亦樂の一部ぞかし。されど隣の壁ぬかば尻を喰ふのおそれなきにあらず。銅臭きはぢゞむさし。さりとて冷飯は腹踊ばりて病や起らん。家を持ねば傾城の涙の雨の漏り所なく、無一文では寢酒も飲めず。ア、なんとしやう。どうしやうと、凝つて思案のいらばこそ。筆の林に閑居して、不善はなさぬ君子等の、快樂の一派。和歌詩文の上品より、小說散文詩歌俳句、四面に堅き角を去り、端歌都々逸の

心意氣。一切無差別。かきあつめ我樂多文庫の名にしおく。諸彦も我も樂多き冊子を月々に、編して而して讀書餘閑の憂晴し、噫天下無上の快樂、倶にせんとの有志の君達。珠玉を空しく祕め給はず。値をまたず。沾らんかな〳〵とのたまへば我もいはなん。買はんかな〳〵。

明治十八年彌生の末つかた柳翠花江樓のあるじ　半可通人』

如何にも呑氣だ、道樂だ、遊び半分だといふ氣がする。かういふ主旨の下になつた一派の團結であるから、その表現機關たる雜誌の內容も亦、小說、評論、和歌、俳句、新體詩等種々の方面に亘つてはゐるが、何れも戲作的臭味を以て一貫し、そこに何等見るべき人生的意義も、深い思想もなく、新知識を戲作のルツボに溶かし込んだといふに過ぎない。而かもさういふ傾向のものが、案外勢力を得て、終に第二期文學の全般を蔽ふに至つたといふのであるから、其處には何等かの深い理由がなくてはならない。

第五講　藝術至上主義の文學

一　藝術的傾向の跳梁

硯友社一派の全盛とは、取りもなほさず藝術的傾向の跳梁に外ならない。在來の小說、例へば政治小說の如きは粗野であり、概念的であり、宣傳的であり、戲作の殘滓は、卑淺陋醜讀むにたへずといつた風であつたから、どうしても外形の美しい、裝飾澤山の、具體的な、こつてりしたものが要求されることは、言ふまでもない。この要求を充たすに最も都合よく出來てゐたのが藝術的傾向を代表する硯友社一派の作品であつた。何でも目新しいもの、それもギクシャクしてゐるのではいけない、滑かであり、フックリしたもの、艶麗典雅なもの、さういふものであれば何でもよかつた。

丁度時代から言つても、明治二十二年には憲法發布があり、二十三年には

教育勅語の布告があつて、政治的にも、社會的にも、又思想的にも、維新以來の大動亂が眞に安らかな落着の狀態に這入つて、人心はほつと安心の吐息をもらした時である。從つてさういふ時期に於ては、痛切な人生の要求を基にしたやうな藝術が生れる筈もなく、又歡迎されもしない。心を撫ぜいたはつて安らかな落着を與へるやうな藝術のみが、さういふ氣持とぴつたり呼吸をかよはすことが出來る。この意義にかなつてゐたのは、硯友社のかもす藝術的雰圍氣に他ならなかつた。この點から見ても、硯友社は榮える運命を持つてゐたといふべきだ。硯友社一派の者は、この時代の潮流にのつて、思ふ存分藝に遊んだ。だから明かに時代を利用したといへる。けれども時代の精神とか人生の深い要求とかいふ問題には到頭ふれなかつた。要するに、彼等の藝術は、小康に安ずる時代の藝術であつた。眞の意味に於ける明治最初のブルジョア藝術である。丁度維新の革命當時に於て擡頭した野武士、それにくつつき廻つてゐた商工業者連中が、漸く安定な位置にありついて社會的にも

地盤をかためて來た當時の社會の風俗人情に適合したのである。

成り上りもの、通人振り、歐化熱のあふりを喰つた江戸ッ子氣質の發揮、言ひかへれば、當時の社會を風靡してゐた俗臭美の權化が、硯友社一派の藝術の生命であつたのだ。

試みに、山田美妙齋の『胡蝶』(明治二十二年一月、「國民の友」附錄に掲載、女の裸體畫が入れてあつたので物議をかもしたもの)、尾崎紅葉の出世作たる『二人比丘尼色懺悔』(「新著百種」の第一篇として明治二十二年出づ)などを讀んで見るが好い。前者は戀と義理との衝突が巧みに描かれてゐるなどゝいふ評判を惹起したが、今日から見れば、そこに何等當代の社會と交渉する點なく、單に作者が抽象的觀念で史的事實を扱つたといふに過ぎない。なるほど文章は新しい。歐文派を取入れた跡も、その比喩擬人法の中に見えてゐるが、要するにそれはかり着で、中味は舊態依然たるものであつた。『胡蝶』の成功は、作そのものよりも裸體畫の成功だといふ意味のことを、內田魯庵翁はいつて

ゐたが、事實さうであつたと思はれる。

紅葉の『色懺悔』が出た時も、世間では大變な評判を立てゝ、一躍その作者をして文壇の寵兒たらしめた。それを評した新聞雜誌や批評家の文章が、「新著百種」第二號として出た饗庭篁村作『掘出しもの』の附錄となつて載つてゐる。これを見ると、まゝ缺點を擧げてゐるが、大抵は讃辭に終つてゐる。文章が新しい、ゆかしい涙の物語であるといふのがその讃辭である。なるほど、文章の上に鏤心彫骨の跡は見える。『茶の煙だに擧らずば、山賤も知らぬ谷陰の庵に、いとも年若き主の尼と客の尼とが如何なる運命のたはむれか、思をこめてゐた男が同じであつたといふ浮世の戀にからまる緣の絲をたぐりたぐつて涙をしぼり合ふといふ、いつの時代ともいかなる場所とも定めない、たゞある時ある場所の出來事を書いたものである。既にロマンティックな香を帶んでゐるから、平穩無事な心の面にはさぞ好い感じを齎すであらう。けれどそこにはロマンティシズムの中心要素たる生命の充實感もなければ、無限に對する憧憬もなく、又自由放奔な思想感情の發露もない。これを以て見ても、

近代人の胸から生れ出たロマンティシズムでないことはよく分る。

又彼のこの當時の作風を以て寫實主義となすものがある。見當違ひも甚だしい。『枯華徵笑』(二十三年「國民の友」)、『此のぬし』(二十三年「新作十二番」)、『夏痩』、『新色懺悔』(二十三年「讀賣新聞」)、『二人女房』(二十四年「都の花」)、『伽羅枕』(二十四年「讀賣」)、『二人女房』(二十四年「都の花」)、『三人妻』(二十五年「讀賣」)、『心の闇』(二十七年「讀賣」)、等はなるほど、題材を現代に取り、作者としては、女性の心理を深刻に描寫したつもりであらう。けれども實際に描かれてゐるものは、皮相の「現代」であり、類型の女性である。花柳界の女なら誰にでもあり得る花柳氣質、江戸育ちの女なら誰でも持ち得る江戸ッ子肌、さういふものを得意になつて描いたにすぎない。それぞれ特殊な姿を持ち顔を有する女の描かれたためしはない。若しもその作風に寫實的といふことが許されるなら、それは表面的な意味に於てだ。そこで概括的に言へば、紅葉の功績は、文章上の苦心に存する。渾沌としてゐて歸着する所を知らなかつた

文章界に、新生命を吹き込んで新しい時代の思想感情を盛るに相應はしい言文一致體を完成の域に近づけた點である。

硯友社一派に屬してこの期に名を示した主なる他の作家を擧げるならば、廣津柳浪、巖谷小波、川上眉山などであらう。柳浪には『殘菊』(「新著百種」第六號、二十二年)を始め、『絲のみだれ』『五枚繪姿』『いとし子』等の作があつて、後年の特色たる深刻な觀察を思はせる片鱗が見えぬではないが、彼の十分なる活動は寧ろ次期に俟つべきであらう。小波は洒脫輕妙の筆致を得意とし、その作には、『妹背貝』(「新著百種」、二十二年)を筆頭に、『片絲』、『友禪染』などがある。然し彼はその本來の特色たる洒脫輕妙の筆致で少年の讀物を書くに適してゐたので、二十四年、少年文學『こがね丸』を出してからは、專らこの方面に努力して、遂に今日の童話作家の先驅者となるに至つた。眉山は、『黄菊白菊』の一篇を「我樂多文庫」の改題(二十二年三月より)「文庫」に掲げて以來、多少の注目を惹くやうになつたが、彼の重要な活動も矢張り次の期に屬する。

二　ロマンティック・アイディアリズム

紅葉と對角線上に立つて、常に文壇の視聽をそばだてゝゐたのは、幸田露伴である。だからこの第二期をば、俗に紅露の時代といつてゐる。紅葉と同じく、彼も亦西鶴から生れて來た作家の一人であるが、紅葉が主として艶麗芳醇な文體で殉情の女性を描いたに對し、露伴は莊重な嚴肅な想を構へて意志の男性を現したところに、全然相反する特色がある。

彼の處女作『露團々』は二十二年に雜誌「都の花」(九號――二〇號)に出た。續いて『一刹那』が「文庫」(五月)に掲げられ、『風流佛』が「新著百種」第五號として公刊されるに連れて、一般の注目を惹くやうになつた。爾來、『奇男子』『對髑髏』『落語眞美人』から有名な『一口劍』(二十三年)、『新葉末集』(二十四年、『辻淨瑠璃』『寢耳鐵砲』の二篇を收む)、『五重塔』(二十四年より)に至る諸篇を公けにした。

これ等の諸作を通じて見るに、彼のとる題材、彼の取扱ふ人物は、多くは

到底ありさうに思へない架空の、現實世界をはなれた空想から出てゐる。而かも彼の人物の特色は、意志の表象として現はされてゐる點である。言ひ換へれば、熱情にあふれた、思ひ込んだ目的に向つては、どんな苦心をしても突き進んで行かうといふ豪快な進取的な人物である。これを相應はしい雄健な筆致で描き出してゐるのが、例へば、『一口劍』であり、『風流佛』であり、『五重塔』である。身を粉にくだいても名刀を鍛へ上げねばやまぬ熱烈火のやうな男の意氣地、あらゆる誘惑をさけて初一念を貫徹せねば承知せぬ男意氣、腕に對する無限の信賴とその誇、それ等が各篇を貫いてゐる生命であり眞髓である。ぢつとこらへて苦しみの中を押し切つて行く力、さういふものの感得されることは事實である。さういふ點では、紅葉の作品とは比べものにならぬほどの嚴肅さがあるといへよう。

然しその嚴肅さは、理知の世界に於ける嚴肅さである。現實の世界へ持つて來ると案外風船玉のやうにひしやげて了ふかも知れぬ。これは全く彼が佛

致の經典や元祿の文學やの中に現はれた架空的なものに心酔して、生活を理想化し空想化した結果に外ならぬ。

露伴には元々二つの方向が指し示されてゐたらしい。一つは全く普通にいふロマンティシズムであり、他はアイディアリズムである。例へば初期の作品に屬する『對髑髏』の如きは非常にロマンティックな香の高い、まるで遠い異國の物語でも讀んでゐるやうな印象を受ける。アイディアリズムは彼の比較的後年の作中に見られる。それはロマンティックな題材でありながら、はつきりアイディアルなものに支配されきつてゐる作品である。然しその中間に立つてアイディアルなものがロマンティックな香に漂はされてゐると思はれるのは、前に擧げたこの期の諸作である。無論低い意味に於てゞはあるが、そこに、ロマンティック、アイディアリズムの小模型が見られるのである。

紅葉と露伴、この二人は全くタイプの違つた作家ではあつたが、現實生活を觀察研究することなく、勝手氣儘な夢を見てゐたことは同じだ。紅葉は複

雜多岐な人情を描かうとしたが、結局類型的人情しか描けなかつた。それといふのは、實際に動きつゝある現實的な人情にふれなかつたからである。露伴は一個の理想を描くには描いたが、それと現實生活との交渉といふことに對しては、少しも考察を拂はなかつた。

斯かる現實と交渉の薄い、遊戯的な、所謂藝術至上主義的な作風がなぜ文壇全體を支配するに至つたか、それは既に述べた通り、人々が擾亂動搖の跡を受けて何かしら落着きを求め、活動よりは靜止を欲する社會であつたからである。

三　舊文學の復活

國粹保存主義が文藝の上にあらはれて、最初に國文學の研究となり、再轉して元祿文學の復興となり、三轉して、舊態文學の出現となつた。饗庭篁村(竹のや主人)と齋藤綠雨とは、その代表的作者である。篁村は『むら竹』(二十

二年)、『當世商人氣質』(二十二年)、『掘出しもの』(二十二年、「新著百種」の一篇)、『勝鬨』(新作十二番)などを發表した。何れも江戸文學の模倣で、その思想も古い。何處か世を馬鹿にしたやうな、それでゐて憤ることもせず、却てそれを洒落のめして喜んでゐるといつた隱者然たる味があつた。然し不思議にも文壇には勢力があつて、所謂根岸派の頭領で、その周圍には森田思軒や幸田露伴なども集まつた。或は江戸文學中馬琴や春水或は鯉丈や魯文しか知られてゐなかつた明治十年代に、早くも八文字屋江島屋の戲作に深く通じて、元祿文學の菩提味を知らしめたといふやうなこと、言ひかへれば元祿文學の開拓復興に皮切の功を見せたといふことが、彼の名を重からしめたのかも知れぬ。尚ほ彼はそれ以後多くの作を著はしたが、その全盛期はこの第二期である。然し最近その死を報ぜられるまで、「朝日新聞」に竹の舍の號で劇評をかきつゞけ、古老の間に珍重されてゐたのは事實である。

綠雨は明治文壇の一奇才として長く記憶さるべき人物であらう。彼は常に

世に背いて、皮肉冷笑、諷刺のうちに僅かに生きてゐた舊文學派の一人であつた。その作には『かくれんぼ』(二十四年)、『油地獄』(二十四年)、『門三味線』(二十四年)等があつて、彼の特色たる諷刺の辛辣さは頁毎に躍つてはゐるが、そこには生きた理想に對する批評も觀察も含まれてゐない。彼は又正直正太夫として批評も書いた。その傍若無人らしい言句がこはもてしたのか、當時の評壇では最有力な權威者の一人となつてゐた。

四　文學上のリリシズム

この第二期に於て吾々は、明治文學の中にリリシズムの要素が著しく加味されて來たことに注意せねばならぬ　さうしてこの脈が段々のびて行つて、やがて日本に於ける眞のロマンティシズムの運動を起した『文學界』の一派に及んで行つたのである。この傾向は一見藝術至上主義の流れに屬するものゝやうに見えるが、寧ろ人生的傾向に合致するものと解したい。何か人生に對し

て求めるものがある、現在よりは美しい、よいものを求めようとする。而かもそれが求めて得られないので、悲哀を生み涙を流す、所謂『悲哀の歌』がそこから生れて來る。この方面に於て先驅をなしたものは、矢崎嵯峨の舍（北郊散士）や、宮崎湖處子、森鷗外などである。嵯峨の舍の『初戀』『流轉』『涙の谷』などは青春の感情を現はした悲哀調のものである。湖處子には『歸省』（二十三年）といふアーピングのスケッチ・ブックを思はせるやうな情趣の豊かな作品がある。

明治二十一年獨逸留學から歸朝して、二十二年には雜誌『しがらみ草紙』を發行して泰西文壇の紹介につとめ、飜譯界にも新機軸を出した森鷗外は、又小說に筆をそめて、二十三年には『舞姬』（國民の友）、『うたかたの記』（しがらみ草紙）を發表した。何れにも獨逸のロマンティシズム文學に見られるやうな悲哀の調が現はれてゐた。

これ等の作家に依つて示された傾向を、今まで人々は餘り重要視しなかつ

たが、明治文學の變遷を眞實に知らうと思ふ者は、必ずこゝに多くの意味を見出さねばならぬ。即ち眞の意味の歐洲文藝の上でいふやうなロマンティシズムの源泉は、日本では、矢張りこの時期のこゝに存してゐたと見られる。さうしてこれが段々に末擴がりになつて、前にも述べた通り、第三期の初頭を飾る『文學界』の運動になつたと見るべきである。

五　撥鬟小說その他

以上吾々は、甚だ大摑みではあるが、第二期の文藝諸相について述べた。更に少しの餘白をかりて、第三期へ移る足がゝりについて、又重要な現象で而かも言ひもらしたことについて、二三記述して置きたいと思ふ。

この第二期が全體的に見て、紅露全盛時代であることは既に述べた。然しいつの時代に於ても作家の名聲はさう長くはつゞかない。又同じやうなものばかりを續けられてゐるのでは、どんな甘い菓子でも飽きて了う。實際紅葉

露伴の作品は甘い菓子に相違なかつた　然しそれは見てくれの非常に美しい口あたりのうまい、けれども實際滋養には餘りならない菓子だつた。そこで見てくれはどうでも好い、口あたりの少々惡い位は我慢するから、滋養になるものを喰はしてくれ、といふ要求が起つて來た。卽ち花の咲いた美しい花園ではなしに、大根や人參のとれる畑を見せてくれといふ叫びだ。人生に卽した、思索的な意義ある小說を示してくれ、かういふ要求が起つて來たのである。

この要求は勿論批評の方面に第一の發聲を得た。序ながら批評の事を一言述べて置かう。勿論小說の變遷とは密接な關係があるのだから。一體批評が明治文壇で確立されたのは、この第二期である。さうして批評らしい批評は、今日では全く別方面にゐる高田早苗（半峰居士）の『書生氣質』評に始まる。これは今日の批評壇へ出しても、決して恥しくない名批評である。それ以後各新聞紙などにぽつ〳〵作品評なるものが現はれるやうになり、稍々盛んにな

りかゝつたのが、鷗外などが雜誌『しがらみ草紙』を出した頃である。この雜誌は始めから『文學評論』と銘を打つてゐただけに、鷗外を初め、森田思軒、北散郊士などが筆をとつた。さうして、二十四年『早稻田文學』が出でゝ坪内逍遙が陣を張るに及んで、批評の權威は一段と高まり、逍遙一度沒理想論を發表するや、鷗外は獨逸ハルトマンの理想主義的美學を論據として、彼に戰を挑んだ。蓋し批試界始めての論爭であらう。

こんな順序で批評は益々振ひ、批評家は飜譯者と相俟つて、文壇に智識を與へること決して少くなかつた。文學の新運動に呼びかけをするものは批評家であるといはれるが、第二期の末に於てそれが文字通りになされたのである。意義ある小說、深刻な小說、人生に卽した小說、所謂人生的傾向の小說に對する要求は、批評家に依つて新たな發聲を得た。けれども直ちにその要求を滿たすやうな小說は勿論出なかつた。そこで從來の小說には滿足が出來ず、といつて新しい要求に基いたものは未だ出ないといふ、所謂過渡期現象

がそこに現はれた。この過渡期に思はぬ利益を占めたのが、ちぬの浦浪六の『三日月次郎吉』(二十四年)を初め、『井筒女之助』『奴の小萬』『破太鼓』『髯の自休』などの所謂撥鬢小說と、黑岩淚香の『鐵假面』『大金塊』『死美人』『人耶鬼耶』などの探偵小說とである。前者は、その中に吾々日本人の腦裡にきざみ込まれてゐる武士道精神と俠客氣質とに訴へる要素があつたこと、權威に對する反抗精神の示されてゐたことなどに依つて、意外な人氣をかち得たのである。後者は、空想慾の誇張された冒險生活に、無限の魅力と刺戟力とを持つてゐたものらしい。

飜譯界を見ても、前期に比べるとずつと進んで來た。二葉亭、森鷗外、森田思軒、嵯峨の舍等は、多く獨、佛、露の新作紹介につとめ、新しい空氣を捲き起した。二十六年には、內田不知庵の『罪と罰』(ドストエフスキー)の飜譯が出たし、無論抄譯ではあるが、田山花袋の『コサック兵』(トルストイ)も出た。斯くして、明治文壇は泰西の近代文藝思潮に步一步近づいて行つた。

第三期の文學

第六講　日清戰爭と思想界の推移

一　戰爭と國民的自覺

明治二十七八年の日清戰爭は、維新以來日本が物質的にも精神的にも貯積して來た力を試す唯一の試金石であつた。戰勝の結果、日本は外に向つては國威を發揚し、内には國民的自覺又は國民的自負を促がすことが出來た。それはナショナリズム若しくはインペリアリズムを發揮せしめるに、まことに好都合な一事件であり、お國大切の觀念を國民の頭腦に植ゑつけるに都合の好い機會であつた。さうして戰勝の結果は、社會的、政治的には軍國主義、官僚主義、藩閥政治の跋扈を來たすと共に、自由主義を鼓吹し、思想的には國民的意識を助長すると共に、個人的自覺の念をも强めるに至つた。

從つてその結果は實に目醒ましかつた。實業界、產業界の進步はいふまで

もなく、思想界、學術界の發達も前期に比しては著しいものがあつた。最早や單なる西洋崇拜、歐化主義ではなかつた。又固陋な國粹主義、お家重寶主義もその影をひそめた。何事をなすにも國民的自覺に基いて、批評的に、內省的に、分析的にと心掛けた。

これを今、思想界の變遷に就いて少しく調べて見ると、早くも其處には日本主義或は國家主義なるものが現はれて、前期の歐化主義や國粹主義とは頗る趣を異にした思想の傾向を現はした。

二　日本主義の提唱

この日本主義が、始めて明瞭に現はれたのは、明治三十年五月に、高山林次郎(樗牛)、木村鷹太郎、湯本武比古、井上哲次郎等の發表した「日本主義」である。さうしてこの根本の動機は、更に遡つて、二十八九年頃に及んでゐると見てよからう。卽ち二十八年の湯本武比古の『日本倫理學』は、日本主義

鼓吹の伏線であつたし、柴田峽治の主として教育勅語に依つた大日本教の宣言は、國家主義の前ぶれに外ならなかつた。勿論湯本にしても柴田にしても歐米の新思潮にふれたといふ新しい人ではなく、何れかといへばチョンマゲを有難がつてゐる保守主義の人物であつた。その主張する所、國粹保存主義者の口吻に似た點が多いが、唯だ何でもかでも日本がえらいといふのではなく、日本は他國に比しても決して劣らない長所得點を持つてゐると、比較分析をやつたところに、一味の新しさがある。

これ等の思想が伏線となり導火線となつて、やがて日本主義は生れた。その主張は、『……是に於てか日本主義は、世界平和の維持を務め、進みて人類的情誼の發達を期す、而して要は我邦建國の精神を發揮し、我國民の大抱負を實現せんとするにあり』といふ言に徵しても、又湯本の西洋の開化を學ぶといふも、開化そのものが目的にあらずして、皇基を振起し、建國の精神を發揮すべき目的の一方便にすぎずといつたのに見ても知れる通り、從來漫然

と唱へられてゐた歐化主義の傾向と國家主義の傾向とを調和させたものに他ならぬ。儒家の銹刀を持出す固陋な思想でもなく、又西洋崇拜カブレの思想でもなく、吾をより良く生かすために彼のよき血と肉とをとつて、養ひ育て、新日本の基礎を固め、新日本の道德宗敎を發揮し、さうして世界に於ける日本としての活動を十分に示さうではないかといふのであつた。勿論、その主張者に依つて考へ方に多少の相違はあつたが、何れも宗敎に中心を置いてゐたことは同樣である。卽ち佛敎もいけない、キリスト敎も排すべし、ただ日本敎といふ新しい宗敎を以て、政治の根源、道德、思想の原動力となすべしといふ獨斷說であつた。

一度、この說が主張されると、非常な勢を以てそれは國民を風靡した。その勢力は、戰勝といふ風にのつて、國民をまんまと吹き倒して了つた。さうしてこの日本主義が、姿をかへ、形を異にして敎育の上、政治の上、外交の上に現はれたのが、取りもなほさず國家主義である。

三　世界主義と個人主義

然し、日本主義の宣傳に對してはリアクション、反動の叫び聲が起らずにはゐなかつた。それは先づ宗敎の方面から起つた。姉崎正治の『日本主義に促す』などは、ほんの横槍程度のものにすぎなかつた。キリスト敎の方面、又は一部宗敎學者の間から盛んな非難反對が生じた。就中『日本主義は野に叫べる豫言者の聲にあらず、中に熱誠なく、理想なく、人物なし』と叫んだ「早稻田文學」記者、吾人は泰西の政治主義と同時に、その世界的宗敎主義を採らねばならぬと論じた組合敎會派の小崎弘道、その他大西祝等の言には、甚だ痛快なものがあつた。

斯かる反駁が、宗敎的見地に立つてのそれであることは言ふまでもないが、その根本をつきつめて見ると、其處には世界主義の思想の潜んでゐることを否定し得ない。從つて日本主義に對する宗敎上の反對は、結局、日本主義と

世界主義の爭ひ、更に言ひ換へれば國家主義と世界主義との角逐である。キリスト敎徒、宗敎學者以外の反對論者の根據とするところも、皆この世界主義であつた。歐洲戰爭以來今日に至るまで、まだ問題になつてゐる、ナシヨナリズムとインターナシヨナリズムとの交渉關係の問題が、勿論甚だ幼稚な程度に於てゞはあるが、當時既に論議されてゐたことは、十分注意に値する事柄である。さうしてこの論爭の內容が如何なる價値、如何なる意味を持つてゐるものか、さういふ點を吟味して見るのも興味ある仕事であるが、玆で取扱ふにはあまり廣汎であるから、略して置く。

前期に於て頭を擡げて來た個人的自覺の念は、一時、日淸戰爭の勝利に基く國民的自覺の念にあふられた日本主義、國家主義、乃至は世界主義に依つて、その姿をくらましたやうに見えたが、事實は決してさうでない。國民的自覺心の發生と共に、個人的自覺は益々强まりこそしたれ、決して薄れはしなかつた　國民的自覺の產物たる日本主義、國家主義が强固に主張されゝば

されるに從つて、個人的自覺の念は強烈の度を增して行つたのである。

少しくこの間の徑路を辿つて見るに、それは社會我に對する疑問から出發したものと見ることが出來る。一個人も國民としてはその自我を沒却し、國家のために、社會のために、その好む所を捨てゝ、飽くまでも國家社會の規約に服從せねばならぬといふが、果してこれは正當な道であらうか。個人性を沒却してまでも、國家や社會につくすことが、國家や社會をよりよく生かすことになるだらうか。國家や社會は、個人性を壓迫しなければその存立を全うすることが出來ないものだらうか。やれ國家道德だの、何だのと言つて個人の自由を束縛するが、さうしなければ、社會の秩序は保てないものだらうか。かういふ疑問が、國民的自覺をつきつめた人に取つては、當然の結果として浮ばずにはゐなかつた。さうしてその疑問に對する解答の結果は、個人の自由を主張する個人主義であつた。さうしてこの主義を主張した本尊は、ニーチェの思想を借りて來た高山樗牛や登張竹風などである。

この傾向はいろ〳〵に分裂して或は本能滿足說となり、或は美的生活論となり、或は變裝して社會主義となり、やがては懷疑主義ともなり、見神說ともなつた。さうしてそれ等の樣々に分裂した傾向が、それ〴〵有力な最上の力となつて三十四五年の思想界を風靡したが、終に次代まで持ちつゞけられるだけの力たり得ずして、やがて起つて來た自然主義の大潮流に或は合し、或は吞まれるといふ結果になつた。勿論、この個人主義的傾向が自然主義の地盤を直接間接に培つたことは言ふまでもない。

四　社會主義

さて以上に擧げた樣々に分裂した個人的傾向についても、一々述べなければならぬのであるが、今はその餘裕がないから、已むを得ず割愛する。然しただ放つて置く譯にも行かぬ。本能滿足說、美的生活論などについては、何れ文學を論ずる場合にも觸れるからまあよいとして、社會主義に就いてだけ

は一言して置かうと思ふ。それは社會主義が思想の上にも實行の上にも大問題になつてゐる今日のことであり、又その當時の社會運動が、三十七八年から四十一二年頃までに現はした木下尙江の社會主義的小說の出現に直接間接に影響のあることとであるから。

社會主義は、二十年代に漸く擡頭したものであつて、その當時は大した勢力にならなかつたが、日清戰爭後になつては、上に述べたやうな思想的背景と、急激な產業の發達に伴ふ無產勞働者の生活苦の刺戟とに依つて次第に力を增すやうになつた。三十年には東京義友會といふ勞働組合が出來たり、勞働演說會が開かれたり、又雜誌としては『社會雜誌』『勞働世界』、單行本としては田島錦治の『日本現時の社會問題』、松村介石の『社會改良家列傳』等が出た。又三十一年には、福井準造の『近世社會主義』、村井知至の『社會主義』、三十三年には久松義典の『近世社會主義評論』、脫世散史の『社會燈』等、三十四年には西川光次郎の『社會黨』、片山潛、西川光次郎共著『日本勞働運動』、

安部磯雄の『社會問題解釋法』等、三十五年にはトーマス・ムーアの『ユートピア』に擬した架空小說、矢野龍溪の『新社會』、三十六年には幸德傳次郎の『社會主義神髓』等、社會主義に關する雜誌單行本が非常に多く出版された。さうして一方には實際運動が絕えず起伏興亡暇なきの有樣であつた。なかで最も注目すべきは三十四年に、片山、幸德、木下(尙江)、河上(淸)、西川、安部の六人で、社會民主黨なるものの宣言書を發表したことである。その主義主張の大要は、同胞主義の擴張、軍備全廢、階級制度撤廢、土地及び資本の公有、交通機關の公有、財產、政權の平等などであつた。その徹底的な程度は、今の社會主義のそれに比較して、優るとも決して劣つてはゐないやうに思はれる。

以上甚だ大摑みではあるが、第三期に於ける思想の變遷推移の跡を辿つて見た。この退屈であつた辿りを無意味に終らしめないためには、この期間中に於ける文學の研究をするに當つて、その思想界の傾向と文學との交涉關係

を頭に絕えず入れて置くことが必要であらう。

五　戰爭と文藝界

日淸戰爭は、文藝界にも直接間接に幾多の影響を及ぼした。前項でも述べた通り、二十五六年の文藝界は甚だ振はなかつた。紅葉露伴も昔日の聲名なく、撥髮小說、探偵小說、甚だ隆盛を極めたとは言へ、低級文學の誹を免かれず、從つて批評家の間にしきりと意義ある小說の出現を叫ぶ者が出て來たのである。

この沈滯の空氣を破つたのは、實に日淸戰爭であつた。あらゆる方面が戰爭に依つて強い刺戟を得て活動し始めた。文藝界も亦それにつれて動き出した。先づ小說をのせる雜誌が急に增加した。二十八年には、『文藝倶樂部』、『太陽』、『帝國文學』等が創刊され、二十九年には『新小說』が再興されて、何れも小說に重きを置いた。それに『讀賣』『朝日』『國會』等の諸新聞も競つて小說を

のせるといふ風であつた。斯うして文學者に取つては活動の舞臺が急に廣くなつた。勿論活動舞臺の廣くなつたことを、何も文藝の盛んになつた唯一の原因と見るのではないが、有力なその一原因と見ることに異議はあるまい。

雜誌の増加を文藝興隆の外因と見るならば、當時に於ける有爲な文學者の輩出は、その內因を自ら語るものであらう。前期以來の大家以外に硯友社の柳浪、眉山、鏡花等修養期を脫して圓熟境に達し、帝大方面からは新に高山樗牛、大町桂月、姉崎嘲風、上田柳村、土井晩翠、鹽井雨江等が出て所謂赤門派をつくり、機關誌「帝國文學」を出し早稻田方面からは金子筑水、水谷不倒、島村抱月、綱島梁川、五十嵐巴川(力)等が前後して現はれ、所謂早稻田派をかためた。これに「文學界」一派の平田禿木、島崎藤村、戶川秋骨、戶川殘花、馬場孤蝶、星野天知、樋口一葉等を加へれば、文壇は實に多士濟々その活動が前期の末に比して如何に眼ざましかつたかは略々想像がつく。順序として、先づ「文學界」の運動から述べて見よう。

六　『文學界』の運動とその意義

「文學界」の運動は本來詩の領域に屬すべきものである。その意味から言へば、小說を本意としての本講に於てこれに言及するのは失當の業であるかも知れぬが、尙ほ且つ私は一言これに言及せずにはゐられないのである。それほど私はこの派の運動に重大な意味を認めてゐる。嘗つて土居光知は、大正十二年四月の「新小說」英國號に於て、『明治文學の歷史は文學界同人の運動を無視しては成立しがたいものである』と言つたが、如何にも我が意を得た考へである。在來の文藝を一口に寫實主義の文藝と言ふならば、それは何處かに實利實益主義、功利主義の餘香が殘つてゐるか、若しくは人生の爲めといひ、藝術の爲めといひながら、何れも現實の人生に甘んじてゐるやうな、人生を弄具にしてゐるやうな心持が勝つて、何處にも人生に對する熱情、疑惑といふやうなものが無くはなかつたか。生に對する無限の執着、熱烈な人生

的意慾、ゲーテの所謂『より高い現實の幻影』を欲求する心熱、さういふものが感ぜられなくはなかつたか。更に言ひかへれば、歐洲の文藝に見られるやうな、ロマンティシズムの精神といふものが殆どなくはなかつたか。さういふ何となくパサ〳〵した濕ひのない文藝に一味新淸の空氣を送つて、これを濕ひのある、さうしてそこから生に對する一種の憧れの情緒を呼びさますことの出來るものにしたのは、全く文學界の一派であつた。即ち彼等はロマンティシズムの香氣を日本の文藝に吹き込んだのである。更に極言すれば、彼等はロマンティックな文學を本當の吾々の文學とした計りでなく、さういふ文學を吾々の生命の奧底から產み出す生活を營んだのである。

この文學界連中は、最初は北村透谷を中心にして唯同好の士が相寄つて人生を談じ、文學を論じてゐたに過ぎなかつたが、二十六年一月、初めて雜誌『文學界』を出した。同人は北村透谷、島崎藤村、戶川秋骨、同殘花、馬場孤蝶、星野天知兄弟、上田柳村の諸氏であつた。これに田山花袋、樋口一葉、

その他多くの寄稿家があつて、二十八九年頃は全盛を極め、三十一年廢刊となり、同時に彼等の運動は、衰へたのではなく、寧ろ廣く深く文壇に喰入つて、目立たなくなつた。彼等は、詩、創作、評論を通じて自己の人生觀を披瀝した。外國文學も大いに紹介したが、それは何時も單に知識の窓を通してのみでなく、必ず感情の波を潜らしてゞあつた。今彼等の人生觀を一摑みに說明して見ると次のやうである。從來の人生觀に滿足せず、現實の功利的、實利的生活に不滿を感じ、因襲的道德や宗教に服從せず、何等か常に新しいものを求め、或は戀愛を以て生命とし、或は藝術に生きることを願ひ、或は進んで藝術の世界を直ちに實行の世界に移さうとして、常に苦しみ惱んだ。かうして詩人的空想的人生を描いては現實世界と衝突した。北村透谷は實にかゝる思想の犧牲となつて自殺したのである(二十七年五月)。彼等は斯うい ふ人生觀に依つて生きてゐた爲めに、世間からはいろ〳〵に誤解され又非難された。就中、功利的實利的人生觀に終始してゐた民友社一派からは烈しい

攻撃を受けた。然し要するにさういふ非難攻撃は似而非ロマンティシズムか、又は墮落したロマンティシズムかが受ける非難である。勿論、文學界一派の人々にはその非難に値するやうなものがあつたに相違ない。けれどもそれだからといつて、彼等の持つてゐた人生と永遠に相亙るロマンティシズムの精神までを否定し去ることは出來ない。尙ほ彼等の抱いてゐた、丁度中世紀の騎士若しくはミンネジンガーを思はせるやうな女性崇拜、及び戀愛讃美についても述べねばならぬのであるが、玆では悉しく話してゐる餘裕がない。たゞそれが日本の婦人運動史に可なり大きな地位を占むべきものであることだけを附加して置く。

第七講　文學と社會意識

一　社會意識の眼醒

「文學界」の同人が、人生的意義を深く追求し、無限の生活、美の生活、理想の世界を憬れた結果、何時しか現實生活、實際社會の岸邊から足をふみはづして、象牙の塔にかくれ込んで了ふやうな傾向を示したことは、たまく ロマンティシズムの持つ弱點を現はしたまでゝ當然であるとはいふものゝ、今日の吾々から見ると、それは可なり大きな不滿でなければならぬ。

彼等は大膽にも戰爭の如きは國家の仕事であつて吾々の與り知らぬところであると公言して、一國の大事業であつた戰爭を超越し、眼前の社會現象を無視する文學に何の權威があるといふやうな輿論（例へば、高山樗牛や大町桂月の唱へたやうな）に反抗した。然しこの反抗は、必ずしも「文學界」同人

の占有ではなかつた。當時の文學者の多くは、戰爭は戰爭、文學は文學だといふやうな殿樣風を吹かせて、案外落着き拂つてゐた。文學者がさういふ方面に立ち入ることは、自分を卑しくすることであり、與へられた特權に泥をぬることであると思つてゐた。別の言葉で說明すると、彼等はまだ社會意識に眼醒めなかつたのである。それは時代の風潮がそこまで行つてゐなかつたとも見られるから、已むを得ない。

然し、所謂戰爭文學なるものがあるにはあつた。江見水蔭、小杉天外、泉鏡花、饗庭篁村、松居松葉、須藤南翠、村井弦齊、福地櫻痴等の小說乃至脚本、外山正一、井上選軒、戸川殘花などの新體詩が、その代表的なものであるが、多くは、皮相なヘロイズムの讃美か、武士道の鼓舞かで、それ等を通して、人道的精神がうかがはれるとか、戰爭に對する深い考察が暗示されるとかいふものでは勿論なかつた。だから、何も社會意識に眼醒めて、確たる自覺のもとに生れたのではなかつた。戰爭記事に對すると同じ興味がさせた

のであつて、單なる流行に止まつてゐた。際物などと批評家から輕視されたのは全くそのためである。彼等が若し社會意識に强く眼醒めてゐたら、屹度第一義的の意義ある文學を創造することが出來たであらう。

戰爭は眞の文學を生む題材たり得ないなどと考へてゐる人があるが、それは大間違ひだ。トルストイの『戰爭と平和』は立派に世界の文學となつてゐる。又近い例をあげれば、ロマン・ローランの『クルランボー』の如き、又はエイチ・ジイ・ウェルズの『ブリットリング氏は見透す』の如き、アンリ・バルビュッスの『光明』の如き、何れも今度の歐洲大戰を題材にした現代に於て最も意義ある小說である。さうしてそれ等の作品を强く生かしてゐるものは、社會意識だ。その社會意識が、日淸戰爭當時の所謂戰爭文學には露程もなかつた。從つて無意義であるのは當然だ。

けれども、社會意識は何時までも文學者の頭の中で眠つてはゐなかつた。戰爭中、若しくは戰爭の結果として、國民的自覺、社會的自覺が、一般民衆

の腦裡にきざまれて來たことは、前に述べた通りである。これ卽ち社會意識の勃興である。さうしてその意識が文學に交渉して來た結果が、いふところの觀念小說、深刻小說、悲慘小說。社會小說である。ここまで來て、小說は始めて、人生への接近といふ朧げな概念から、實社會、實生活への接近といふ明確な具體性を持つものとなつた。以上の小說は、決して直前乃至直後の戰爭を直接題材にしたのではないが、意識的に、社會生活、社會對個人といふやうな問題に、視野の範圍を擴げて行つた。これは元より作家各自の自覺に俟つものであることはいふまでもないが、新進氣鋭の批評家の聲援の効が僅少でなかつたことも忘れてはならない。さうして批評家の聲は、同時に輿論の聲であつて、社會がそこまで進んで來たのは、全く時代の然らしめたところといはなくてはならぬ。時代が明白にそれを要求してゐたのである。さうしてこの時代の要求に應じて始めて現はれたのは所謂觀念小說である。

二　觀念小說

そこで觀念小說とは、誰がいひ出したのか、どういふものを指すのか、はつきりしてゐないが、二十八年に出た川上眉山の『書記官』(太陽)、『うらおもて』(國民の友)や、泉鏡花の『夜行巡査』『外科室』(何れも「文藝倶樂部」)などが、その代表作になつてゐる。『書記官』は、一人の處女が、父親の利慾のためにその貞操を犧牲にするといふ一の社會現象を取扱つたものであり、『うらおもて』は、一人の德行高い男が、冷酷無情な世人に飜弄されて、財産をなくし、社會から顧みられなくなり、始めて社會の無情に氣づき、果ては利慾一片で動く社會では何をしたつて好いといふ氣になつて、盜賊となる。その徑路を描いたものである。又鏡花の『夜行巡査』は、職務に忠實な一巡査が、一夜たまたま彼の戀人の父である泥醉漢の、戀人に助けられて家へ歸つて行くのを後からついて行く、醉漢はしきりに彼の惡口をいつて、娘と彼の仲を割かう

とする、彼は立腹を我慢して尙ほついて行くと、醉漢は誤つて堀の中に落ちる。彼は先つきの誹謗嘲罵を忘れて、水中に飛込んで醉漢を助けようとして、却つてあはれな最期をとげる。これが一篇の荒筋である。戀愛と責任感との衝突で、責任感のために戀愛も生命も、二つながら破られる悲劇である。

以上の數例に依つても知れる通り、これ等の小說は、或る人物なり事件なりを描いて、最後に或る觀念を讀者の頭腦に强く浸み込ませようとする。卽ち種々の悲劇、罪惡、この世にはいろいろな悲劇や罪惡があるが、その依つて來るところをつきつめて見ると、社會にその根源がある。だから個人に罪があるのではなく、社會に罪がある。社會の制度や在來の道德や因襲やが個人を驅つて罪に導き、悲劇を演ぜしめるのだといふ觀念を强く讀者に起させようとする。

然し稍ゝもすれば、觀念が先に立つて、それを裏付ける具體性が乏しく、從つて、事件が不自然になり、社會觀を表はすに急で、心理的變化のプロセ

スが不明瞭である。然しながら、在來の寫實主義が、問題を全く個人生活の範圍に限つて、社會乃至環境との關係を殆ど無視してゐたのに比べると、人生觀上の一大進歩であつた。觀念小說は、確かに、在來の寫實小說に一歩否な數歩を進めたものといつてよい。

一度、眉山、鏡花二氏がこの一大傾向を示すや、或は社會の罪を描かうとするもの、或は深刻な性格心理を寫さうとするものが簇々と現はれて來た。この爲め、一時、從來の寫實小說でもなし、撥鬢小說でもなしといつて愛憎づかしをされてゐた小說界は、枯木に花を迎へるの觀を呈した。これ全く社會的自覺の賜といはなくてはならぬ。

三　深刻小說

觀念小說は、以上に述べたやうな當然の歸結から、自然と題材を深刻な悲劇とか罪禍とかに求めるやうになつた。さうして、必然的に心理的徑過が要

く見られるに到つた。そこで當時の批評家は、この觀念小說を時に或は心理小說、或は深刻小說、或は悲慘小說と呼んだ。さうしてこの深刻小說、悲慘小說の名に最も相應はしいのは、廣津柳浪の諸作である。

柳浪の作では、二十八年五月に出た『黑蜥蜓』が、注目に値するものであつた。作中の主要人物はお都賀といふので、彼女は七人目の妻として大工職與太郎のところへ嫁人つて來た。與太郎には始終酒ばかり飮んでゴロ〳〵してゐる父があつた。お都賀は、夫に對すると同じやうに父親にも仕へた。しかし父親は何かにつけて難くせを持ち出した。それには元より理由があつた。夫の留守に、父親はお都賀を我がものにしようとしたのだつた。けれどもお都賀は夫に對する貞操を守つて決してきかなかつた。そこでお都賀に對する父親の虐待は烈しくなつた。幾度家を去らうとお都賀は決心したか知れない、けれども夫を思ひ、子供を思つては思ひ止まつた。しかし到頭たへられなくなつた。最後が來た。彼女は隣家の老婆からきいた黑蜥蜓を以て父親を毒殺

し、自分は溺死した。

この荒筋に依つても知れる通り、柳浪は好んで、悲慘な、暗黑な事件を取扱つた。さうして人物を心理的に性格的に描かうと可なり苦心した跡が見える。この一篇に依つて悲慘小說、深刻小說の作家として名聲を博した彼は、益々その特色の鮮かな作品を發表した。なかで最も世評の高かつたのは、『今戸心中』(二十九年七月「文藝俱樂部」)、『河內屋』(二十九年九月「新小說」)などである。

以上の二作に依つても知れる通り、柳浪が好んで選んだ題材は、人生の暗黑面である、性格と境遇とが齎らす悲劇である。從つて、性格悲劇とも境遇悲劇ともいへる。その描く人物は、『黑蜥蜓』のお都賀の如く、『名から松皮と呼ばるゝ黑痘痕、眼さへ左には星入り』『鼻も口も尋常ながら、眉毛は赤土の土手に、枯木の拔疎なるも斯くや』といふ、醜い女であり、又『變目傳』の傳吉の如く、『身材いと低くして、肢體は少さく生れつき』、二十七歲だといふに、

『ゆきは六寸五分、丈は三尺一寸、其にても尚ほ踵を掩すばかりなる着物は、羽織にも好みて赤出の唐棧縞を用ひ、常に手を懐にし、駒下駄突掛けて、ちよこ〳〵と小走りに歩める様、往來の人目を惹けば、口惡善なき童等は、蜘蛛男又は侏儒と綽名し』、又『左の後背より頬へ掛け、湯傷の痕ひつゝりになつて、後背を竪に斜に釣寄せ、右の半面に比ぶれば、別人なるが如く見ゆ』る故に變目傳と綽名されてゐる男――多くは特殊な人物である。その特殊なるが故に悲劇が生れる。又事件といへば、例へば『河内屋』に見られる如く、清二郎にどうしても最後の殺人行爲をさせずには置かぬやうな境遇を設けて、その範圍内で許される事件である。

　題材の深刻な點に於て、殺人心理の微細な點に於て、柳浪は屢々ロシヤのドストエフスキーに擬せられる。けれども、ドストエフスキーほどの自然さはない。又ドストエフスキー程に、心理描寫が科學的精緻を極めてゐない。今日の吾々から見ると、餘りに不自然であり、つくり事であると思はれる。

稍ゝもすれば探偵小說といふ感じがつきまとふ。實人生、實社會に始つたものが何時のまにかその實人生、實社會を離れて、一夢の世界へ這入つて了ふ。つまり悲慘のための悲慘、深刻のための深刻になる。勿論當時の文壇に於ては稀に見る心理解剖家であり、想像力の逞ましい作家であつたに相違ないが、今日から見ると、その心理解剖、想像力には不自然さがあり、實感味が缺けてゐることを否みがたい。從つてその當時名篇傑作と稱せられたものよりも、寧ろ瑣末な事件を扱つた小篇に、今から見て心を動かされるものがある。

觀念のための觀念、悲慘のための悲慘、深刻のための深刻といふやうな非難の聲は、一人柳浪だけが負つた不滿ではなかつた。當時の新進作家の作風が、皆その缺陷を示すに至つたのである。彼等は折角、社會といふものに眼をさまして來たに拘らず、何時しか又その社會を忘れて架空の世界に這入つた。そこで評壇では再び新しい要求の聲が起つて來た。社會小說の出現に對する要求がそれである。

四　社會小說

何時の時代、如何なる場所に於ても同じであるが、小說、廣くは藝術が吾の人生や社會から離れて、象牙の塔の中で笛を吹いて藝術家が一人樂しむといふ傾向を見せて來ると、其處に必ず藝術革新の叫び聲が擧げられる。この期に於ける社會小說の要求も亦その例にもれない。

觀念小說も、深刻小說も、悲慘小說も、何時となく型が出來て、徒らに觀念を求め、悲慘を尋ね、深刻を喜ぶの餘り、如實の心理、如實の社會、人生を離れて、架空の世界に人間の葛藤を描き出して滿足するといふ風になつて來た。その結果それ等の小說は、實社會に疎い、實人生に遠いといふ非難が二十九年の末頃から起つた。既に二十九年に島村抱月は、「早稻田文學」の二號に亘つて、『小說界の新潮を論ず』といふ論文で、觀念小說、深刻小說の由來を究め、且つそれに對する不滿を暗示したが、二十九年の末頃から、「早稻

田文學」記者は筆を揃へて、社會小說の出現を叫んだ。その主張に依れば、現代の小說家は、實世間、實社會をもつと深く探求し、研究しなければならぬ。その取材の範圍を廣く政治、宗敎、敎育、乃至實業の方面に求めなくてはならぬといふのであつた。元よりこの主張は、これ以上に具體的ではなく、甚だ漠然たるものであつたが、何に對して不滿を感じ、何に對して要求したかは、自ら明白である。即ち小說に對して非現實性を排斥し、現實性を求めたのである。その結果、社會小說は現はれた。その先驅と見て好いものに、皮肉な文藝批評家として又文明批評家として知れてゐた內田不知庵の『暮の二十八日』（三十一年八月「新著月刊」）である。彼はつゞいて、『波枕』『落紅』『霜くづれ』『血櫻』等の短篇を發表した。何れも新舊思想の軋轢、宗敎信仰の衝突、若しくは社會の缺陷に基づく不合理、矛盾などを中心題材とした。藝術品としては決して完璧なものといふことが出來ないが、取材の範圍を廣くしたことは爭はれぬ事實である。さうしてこの潮流に乘じて現はれて來たものに、

二十八年『ありのすさび』に依つて認められた後藤宙外の『腐肉團』、二十九年頃から『寢白粉』『龜甲鶴』等の作に依つて評壇の注目を惹いた小栗風葉の『政黨』、或は德田秋聲の『惰けもの』等がある。

元より斯様な小說を讀んで見ても、社會小說なるものの概念については、前に述べた以外に明白な概念は得られぬ。試みに、樗牛の『所謂社會小說を論ず』なる一文中の語を借りると、『社會進化の上に於て必然の結果とも稱すべき社會的勢力の不平均なる分配に對する反抗を取りてその主要なる資材とするところの一種の小說と見て大過なきが如し』とある。これが社會小說の主張だとすれば、それは非常に意義のあるものだ。丁度今の文藝界で大問題になつてゐるプロレタリアの藝術の主張に似たところがあるではないか。現代社會に於ける無産階級、プロレタリアの反抗精神に基く藝術、それが取りもなほさず社會小說の主張であつた。又理論的に哲學的に社會小說の意義を說いたのは、「早稻田文學」に依つてゐた金子筑水である。

これに對して樗牛はどういふ意見を持つてゐたかといふと、それが又仲々振つてゐる。彼は徹底的にさういふ小說の無意義を主張した。富者を描き、貧民を描き、犯罪の由來を描き、兇行の情狀を描くは可、又勞働者の憫むべき困厄を描き、傭主資本家の惡むべき姿雎を描くも可、又貧者、不具者に同情を寄するも可、しかし劣弱者は社會進化の過程に於ての必然的結果であるから仕方がない。而かも彼等は國家活動の勢力とならない、だから放つて置いて好い、作家たるものは、至公至正なる見地に據り、眼前の現象に惑はずして、社會活動の眞相に看到し、全圓的に社會現象を見なければならぬといふ。今日から見ると實に幼稚な、又事實を無視した、途法もない解釋といはねばならぬ。彼は明かに國家主義なるものに捉はれてゐたのである。その爲めに、國家對個人、國家に於ける貧民勞働者の奉仕の部分を全圓的に見ることの出來なかつたのは、實に彼である。而かもかゝる偏見、(今日から見て偏見で、その當時に於ては直見であつた)を抱いてゐるものは、彼ばかりではな

かつた。ダーウィンの生物學的進化論が、社會進化の原理に適用され、やがてそれが、超人主義となり、超人道徳となつて、思想界に重きをなしたのが、當時の風潮だつた。凡ての學問も、宗教も、文藝も、科學もが、支配階級のために存在してゐた。支配階級は自分の都合の好いやうに、學問を、宗教を文學を、科學を利用し、且つ裝飾とした。彼等は卽ち日本主義、國家主義といふやうな都合の好い思想を生み出した。その張本人は實に高山樗牛その人であつた。

第八講　新寫實主義の傾向

一　時代精神論

高山樗牛が前に述べた思想を、更に一歩進めて文藝にのぞんだのが、所謂時代精神論である。彼の考へに依ると、現時の小說は時代の精神にふれてゐない、時代の意識に交渉がない、小說家の扱ふ範圍は狹少である。個人的の思想や感情に終始してゐる。ところが凡そ大藝術といはれるものは、皆時代の精神から生れてゐる。例へばダンテの『神曲』を見よ、時代は中世、場所はフロレンス、歲時方處共に歷史上の一小區域にすぎぬ、けれどもその作の訴ふる力は決してその時代だけに限られず、今日の吾々にも通ずるところがある。又ミルトンの『失樂園』は、クロムウェルの革命に相當せる淸教徒的思想の體現にすぎない、けれどもその作は、時代を變へ所を異にする吾々にも力を

與へる。又ゲーテの『ウェルテル』を見よ、當時の唯理的思想に反抗したセンティメンタリズムの一餘波にすぎない、さうしてその唯理論は古くなつた、而かも作品には永久の生命がある。現時の小說も亦た斯くあらねばならぬといふのが、その主張の要點である。

そこで時代精神とは何であるか。元よりきまつた形を取つてゐるのではない。丁度日清戰爭が終りを告げた後の二三年の間の事であるから、社會はいろ〳〵の意味で動搖し、宗教界、實業界、思想界等に、何か第二の革新が起らうとしてゐる。そこに自づから時代の精神が看守されなくてはならぬ。それを描くのが現代小說の眼目ではないか、今の小說が不振なのは、一にこの時代精神が描けてゐないからだといふ甚だ漠然たるものである。

惟ふに、樗牛は、時代精神を、非常に概念的に考へてゐたらしい。一時代を支配する理想とか、道德精神とかいつたものに解さうとしてゐたやうだ。何處か他所から杓子定規を持つて來て、今の小說はその尺度に合はないから

駄目だと攻撃してゐる所がある。從つて彼の時代精神論は、理想主義文藝の提唱であつて、現實無視の聲に他ならない。

時代精神とは、その時代そのものゝ中に動いてゐる精神の謂ひでなくてはならない。その意味から言へば、寧ろ、彼が偏狹なりと非難した社會小說の主張、若しくはその實際の小說中にこそ、時代精神は動いてゐたのである。そこでその當時の小說が、力强い感銘を與へなかつたのは、決して時代精神が現はれてゐなかつたのではない。寧ろ時代精神が餘りに露骨に、概念的に、皮相的に、表はれてゐたためである。藝術といふ境地まで醱酵せずに、それが投出されてゐたためである。それは淺い意味の宣傳であり、論爭であつた。丁度今日のプロレタリア文學が受ける非難と同じ缺點を持つてゐたのである。

然し、樗牛の時代精神論が、當時の文壇に對して强い刺戟となつたことは言ふまでもない。それは、時代精神なるものが、大局から見ると文學と實人生とを一致せしめようとする傾向であつたからに他ならない。そこで、社會

の諸々の姿を見ようとする傾向、個人の心理を深く描かうとする傾向は、即ち一言で蔽へば、人生的傾向は、益々その深味を加へて、遂に現實主義、自然主義の大潮流をなすに至つたのである。けれども、そこまで行くには、まだ文壇幾多の光景がある。

二　紅葉露伴のその後

紅葉は、前期の終頃には、多く沈默して、窃かに藝道修業を專一にしてゐたやうだ。即ち飜譯若しくは飜案に從つて主にその技巧を磨き、その想を練つてゐた。これ、彼の用意周到なる所以で、皮相寫實に對する彼の非難に對して、何時かその耻を雪がうとの心構へであつたらしい。その熱心と努力とは、終に、二十九年『多情多恨』を生み、三十年『金色夜叉』を出した。

作者が如何に心血を注いだかといふことは、『多情多恨』を「讀賣新聞」に掲載するに先立つて、述べた宣言によく表はれてゐる。即ち『これ俳諧にあら

ず、雜報に非ず、飜案に非ず、合作に非ず。實に快腕一揮の創作なり』と。

『多情多恨』は神經質な主人公鷲見が、愛する妻を失つた後の、やるせない淋しい、思ひ出にさいなまれる心理狀態を克明に描いたもので、別に波瀾がある譯でもなく、脚色に複雜さがあるでもなく、極めて單純な作品である。文章も亦た平坦な言文一致だ。從つて在來の小說の刺戟の强いのになれた人には、或は冗漫と思はれ、或は無趣味と感ぜられるに相違ない。或は又在來の小說觀念から見たら、其處に深刻な事件の葛藤があるでなく、其處に蠻の如き戀に醉ふ才子佳人がゐるでもなく、ただ綿々としてつきない戀の心理情緒が描かれてゐるにすぎないから、恐らく平凡單調なものに思はれたらう。けれども其處にこそ、其の意味の現實主義、自然主義の萠芽は存してゐたのである。あるがまゝの人生を描くといふ尊い藝術境地に、作者はその第一步を踏み込んだのである。元より、あるがまゝの人生とは言ふものの、まだまだ紅葉自身の色眼鏡で鷲見の心理狀態を見て、これを描いてゐるといふ跡は

いたるところに見られる。眞實の姿にはまだ遠いといふ非難は、どうしても
のがれることが出來ない。

『多情多恨』を終ると、紅葉は、更に他の一大雄篇『金色夜叉』にとりかゝつた。これは明治の小説中最も人氣を博したものの一篇である。德富蘆花の『不如歸』と共に、單に廣く青年男女の讀書慾をそゝつたばかりでなく、脚色されて、所謂新派悲劇となつて、萬都の子女の袖をしぼつたことは、誰も知るところである。何故にそのやうな人氣を博すことが出來たのであらうか。答へは簡單である。即ちそれは、當時のブルジョア趣味に最も適合してゐたからである。たしかに、大作であり、苦心の作であるには相違なかつたが、傑作の名を以て呼ぶことは出來ない。けれども戀愛と金錢との葛藤を巧みに描いた點、脚色結構の雄大にして戯曲的な點、文章の雅俗折衷體なる點、詩的光景に富んでゐる點、藝術至上主義の極致を示したものと言つて好い。而かも紅葉自身は、當然社會のブルジョア生活に對し一大批評を試みようとしたも

のらしいが、生來の藝術至上主義は到底これをかくすことが出來ないで、その作品をして、極めて生半可な甘い作品にして了つた。しかし紅葉から見れば、これは恐らく半世の事業であつたに相違ない。それに又當時の水準から見れば、明かに二步も三步も挺んでゝゐた。しかし彼はこの大事業の完結を見ずして、三十六年不歸の客となつた。

『金色夜叉』は、作者自身の側から見ると、前期の皮相的寫實から脫して、時代の聲に呼びさまされて何物かを求めようとした最後の解決を示す作であつたに相違ない。しかし、これを廣い文藝の立場から見ると、深刻なりといはれたその心理描寫も、觀念小說の域を多く脫し得ず、その抽象的なる點も現實生活に深い根ざしを持つてゐない。この點では、『多情多恨』の方が、現實味を多く含んでゐるだけに、深い人生の意義を感ぜしめる力がより多く、第一自然だ、如實だといふ感じをより強くいだかせてくれる。

露伴は、『五重塔』以後、暫らく筆を絕つてゐたが、二十六年に『風流微塵

藏』の大作に着手した。明かに彼の作風には一轉化が示された。卽ち初期のものは、同じ理想主義の藝術といつても、ロマンティックで、夢をたのしむやうな、極端に現實ばなれのしたものであつたが、この作品以後は、一段と現實味を加へ來り、更に再轉しては、現實を抽象した理想の姿が明瞭になつて來た。尤も『新浦島』（二十八年）の如き、初期のロマンティシズムの作風を思はせる作がないでもないが、大體に於て冷透峻嚴な理想主義を以て彼の本領としたといつて差支へあるまい。露伴にはまだこの外に、『鬚男』、『二月物語』の如き異色ある作品もあるが、三十二三年頃に至つては、全く坐禪を組んだ如くに沈默を守つて了つた。

山田美妙齋は、『お千代』『鰻旦那』『若白髮』及び『里見勝元』等を發表して、多少の注意を惹いたが、その文章、卽ち言文一致が益々圓熟境に達したといふ以外には、多く言ふべき點がない。齋藤綠雨は、この期に入つては益々毒舌皮肉到らざるなく、『覿面』『雨蛙』等、蓋し諷刺小說の上乘なるものであらう。

けれども決して最う時代の潮流に乘り得る作家ではなく、鋭い皮肉も往々にして的をはづれてゐた場合がある。その當時の文明を嘲罵し皮肉るには、新しい鋭いメスがなくてはならぬ。彼の用ひてゐたメスは、多少古くなつたといふ憾みがあつた。けれども彼の門から驪て自然主義の先驅たる小杉天外が出たといふことは、注目に値する。

三　女流作家の出現

この第三期に及んで、始めて吾々は、女流作家なるものに面接する。若松賤子、小金井喜美子、北田薄氷、田澤稻舟、大塚楠緒子、三宅花圃の諸氏、或は小說に、或は飜譯に、それ〴〵才筆を見せた。その描くところは、しかし、別に新しいものでもなく、たゞ女性としての美しいやさしい感情にすぎなかつた。しかし、なかで獨り頭角をあらはして、男性作家に驚異の眼をはらせたのは、最近鄕里山梨縣に於てその碑を建てられて、永く紀念されるに

至つた樋口一葉女史である。女史の文學的生涯は、明治二十五年から二十九年死に至るまでの僅か五年に過ぎないが、その文學的生命は、『濁り江』（二十八年）や『たけくらべ』（二十八年）と共に永久に殘るであらう。

一葉は、西鶴を學び、露伴の敎を受けたので、その文章には稍々クラシカルな匂が漂つてゐるが、その描くところは、血あり肉ある生きた女性そのものである。社會や、男性から虐げられてゐる女性の歴史に、一つの光明を點じたといふこと、それが人として藝術家としての一葉の最も尊い價値でなくてはならない。一葉は、兩眼に涙をたゝへてゐる女、絶えず十字架を背に負ふてゐる女、悲しいあきらめのうちに吾を捨てゝゐる女を、深い理解と厚い同情とを以て描いた。尠くとも在來の作家が無自覺な女をかうであらう位の推測から描いてゐたのに對し、一葉は、自覺の第一歩に達した女性の心理を如實に生々と描き出した。たゞしかし積極的に一歩を進めて、婦人運動を起すといふところまでは行かなかつた。『やみ夜』の中に、『恐しきは涙の後の女子

心なり』といふ句がある。その恐しい涙の後の女子心が積極的に自覺的に働いたのが、近代の婦人運動である。一葉女史にはまだそこまでの徹底さはなかつた。しかし婦人自覺の第一歩に達してゐたことは明かだ。相馬御風が樋口一葉論の中で、一葉は、古い日本の女の最後の叫びを叫んだ人であるといつたのは、至言である。さうして、女子自らが、その自覺の第一聲を叫んだのも、亦た彼女であることを忘れてはならぬ。

四　家庭小說

三十一年になつて、多年「早稻田文學」を率ゐ且つ文壇に常に重きをなして來た坪內逍遙は、『今や社會の事、日に非にして、頹波滔々たり、文運の開拓を以て任ずる者の覺悟又自ら異ならざるを得んや。切に言へば、社會の根柢に一道の生命を黠ぜざる限りは、之れが表現たる文學や美術や、また言ふに足らざらんとす。吾人は此に見る所あつて、須らく文壇を退き、社會教育の

方面に全精力を移さんとす』といふ辭を殘して、「早稻田文學」を廢刊し、同時に自らは文壇を退いて、身を教育界に投じた。その口吻の背後には、明かに戰後の社會上の動揺、人心の不安を見ては、文藝だ、藝術だとのんきなことを言つてゐる譯には行かない、もつと何か直接の社會改造、社會再建設の仕事に從事せねばならぬといふ氣焰が見える。その面影は、何處か、哲學と宗教とを捨てゝ當面の社會問題に馳せたカーライル、藝術批評の世界から轉じて社會批評の壇上に立つたラスキンを思はせるものがある。

それは兎に角、文藝界には、あらゆる試みがあつたにも拘らず、その何れもが行詰つたやうな感じを與へたのは事實である。而かも他方に於ては、文學と一般社會とは益々接近せんとするの風潮を見せて來るといふ風で、ここに、はしなくも文藝對教育の問題などが、事新しく喧がれることになつた。現今の文學に現はれてゐる道德的水準は低い、女學生には小說閲讀を禁止すべきであるといふやうな、或る意味では偏狹な、又或る他の意味では眞理を

含んだ非難攻擊が敎育者の間から發せられた。かうして文學と敎育、文藝と道德といふやかましい問題が、火の手を上げたのである。純文藝がかういふ論爭に卷込まれてゐる時、思ひがけない發展を遂げたのは、所謂家庭小說である。

德富蘆花の『不如歸』(三十二年)、『黑潮』(三十五年)、菊池幽芳の『己が罪』(三十二年)、『若き妻』(三十五年)、『乳姉妹』(三十六年)、田口菊汀の『人の罪』、『伯爵夫人』、中村春雨の『無果花』(三十四年)、柳川春葉の『いさゝ川』等は、何れも上流、中流の社會を舞臺とし、淸い戀愛感情とか、厚い友情とか、若しくは悔悟とか、所謂ブルジョア家庭道德の美を發揮し得るやうなものを描いて、知識階級の靑年男女をホロリとさせたものだ。いふまでもなく、道德的觀念がその基調であるから、不幸といひ、艱難といひ、それは正しい心の所有者が一時たへしのぶ境遇であつて、やがてはそこに光明が開ける——その意味で、家庭小說は光明小說である。觀念小說、悲慘小說、社會小說の暗黑、悲

慘、醜惡の表現に對し、これは光明、幸福、善美のシンボルである。けれどもそれは決して現實に存する光明でなく、幸福でなく、又善美でもなかつた。人生の眞を求め、現實の姿を求めるものに對しては、元より何等の糧にもならない。生活に困らない、而かも感情のやり場に困つてゐる中流の青年男女若しくは婦女子の徒らなるセンティメントの捌場に他ならなかつた。

家庭小説とは全く趣を異にしてゐて、而かもそれと殆ど同一程度の歡迎を受けたものは、泉鏡花のロマンティックな、夢幻的な作品である。彼の初期の作品は、前にも說明したやうに、觀念的なものであつたが、『錦帶記』『通夜物語』『黑百合』『湯島詣』『妙の君』『高野聖』等、次第に夢幻味と神祕味とを發揮するやうになつた。斯くして彼は藝術至上主義の塔にかくれて再び巷へ出ようともしなかつた。

斯かる家庭的、道德的、理想的、或は夢幻的傾向に反對して、若しくはそれを無視して起つたのが、小杉天外の寫實主義的傾向である。尤もこの傾向

は必ずしも小杉天外に始まつたといふのではない。既に坪内逍遙が『小說神髓』をあらはして以來、日本の文藝界には或は現はれ、或は隱れて、存在をつゞけて來たものであるが、小杉天外に至つて始めて寫實主義の名稱が附されて一箇の明確な手法となつたのである。さうしてこの傾向は、やがて自然主義の先聲となつたとも言へる。この風潮は近代思想界の一大潮流で、文藝の上では、美そのものの表現といふよりも、實生活、自然の姿をありのまゝに再現せんとするところに力點がある。柳浪、眉山の諸作、頗るこの傾向に近いものを見せたには相違ないが、天外、風葉の作品に於て、吾々は自然主義の最初の芽生を見ることが出來る。風葉は、『戀暮流』、『臺下地』等に於て肉慾描寫、反道德的傾向を見せて、評壇の問題となり、天外は三十三年に、『初姿』を出し、つゞいて『女夫星』『戀と戀』『はやり唄』(三十五年)を、更に三十六年以後には、『魔風戀風』『新夫人』『コブシ』などを公にして、自然主義的、寫實主義的傾向を示すに至つた。

『自然は自然である、善でも無い、惡でも無い、美でも無い、醜でも無い、たゞ或時代の或國の、或人が自然の一角を捉へて、勝手に善惡美醜の名を付けるのだ。小說また想界の自然である、善惡美醜の孰れに對しても叙すべし或は叙す可からずと覊絆せらるゝ理窟は無い。たゞ讀者をして讀者の官能が自然界の現象に感觸するが如く、作中の現象を明瞭に空想し得せしむれば、それで澤山なのだ。讀者の感動すると否とは詩人の闘する所でない……』と『はやり唄』の序には書いてある。彼はゾラあたりの影響を受けて、新しい寫實主義、言ひ換へれば自然主義に先鞭をつけたのである。又天外と相前後して、ゾラの觀念派自然主義を基調とする自己の文藝上の態度を披瀝した人に、今日では嘆美派作家として知られてゐる永井荷風のあつたことを忘れてはならぬ。卽ち氏は三十五年に『地獄の花』なる長編を出し、その卷末に自然主義の主張と殆ど異るところなき藝術觀を發表した。この意味からすれば、氏は明かに自然主義の先驅者である。

その間にあつて、田山花袋、島崎藤村、國木田獨歩なども、暗々の裡にこの潮流の洗禮を受け、自然主義の素地をつくるに與つて力があつた。それに又、泰西の自然主義的の作品、例へば、トルストイ、ツルゲーネフ、ゾラ、モウパッサン、ダンヌンチオ等のものも頻りに飜譯紹介されるといふ風で、やがて三十七八年の日露戰爭を界として、全く新しい文藝の潮流が大渦を卷いて、獨り文藝界に限らず、思想界、道德界、哲學界等廣い範圍に亘つて、その影響が及ぶことになつたのである。

第四期の文學

第九講　自然主義運動の實際

一　時代思潮の推移

明治三十四五年頃の文藝界が一般に萎微停滯して、僅かに家庭小說などに依つてその餘命をつないでゐたことは、既に述べた通りである。しかし、それは決して凡てのものゝ終りを告げる靜けさの姿でなく、やがて大きな嵐を捲き起さうとする前ぶれに他ならなかつた。かの『文學界』の連中に依つて惹起されたロマンティシズムの運動は、その後益々實生活と交涉を持ち、個人の思索生活を深め、現實と理想との衝突、社會と個人との撞着矛盾を强く意識させることになり、その結果、如實に、眞實に、現實を、社會を、個人を凝視し探求しようとする知識的運動を釀し出すことになつた。

その結果は、個人主義となり、本能滿足主義となり、ニイチェ熱となり、見

神說となり、美的生活論となつた。かくして思想界は空前絶後の混沌狀態を呈して、文藝の花咲く餘裕などは元よりなかつた。表面的に見ては、實に混沌錯雜を極めた思想界に相違なかつたが、而かもその背後には一貫して動かぬものが存してゐた。卽ち個人主義がそれである。個人の解放、それが以上に於ける樣々な思想傾向の中心生命であつた。個人を解放するには、あらゆる既成のものを破壞せねばならぬ、傳統を捨てねばならぬ。個人解放と舊套破壞、これ取りもなほさずロマンティシズムの根本意義である。三十四五年から日露戰爭前後に至る思想界は、明白に、このロマンティシズムに横斷されてゐたといつて好い。別の言葉をかりれば、スツルム・ウント・ドランクの時代であつた。このロマンティシズム若しくはスツルム・ウント・ドランクの時代から生れ出て來たのが、自然主義或は現實主義である。

斯くして一方新勢力を培ふ素地がかたまつて行くと同時に、他方舊勢力は日一日と衰へて行つた。論壇の巨將高山樗牛は三十五年に、多年文壇の一大

勢力たりし尾崎紅葉は三十六年に、共にこの世を去つた。この二大文豪の死は明かに舊勢力の歿落を意味するものであつた。幸田露伴は『天うつ波』の大作に着手し、廣津柳浪は『松原饅頭』その他を發表し、川上眉山も『凡人界』以下數篇を世に問ふたが、何れも昔日の名聲をつなぐだけの力なく、まして新勢力を文壇に扶殖するなどゝいふことは、始めから望み得べくもなかつた。

この間にあつて、一味清新の氣を放つて、文壇の注目を惹くに至つたのは自然派作家の群である。即ち田山花袋は、從來のセンティメンタリズムを一擲して、三十五年『重右衛門の最期』に於て、獸性の强烈な重右衛門と野獸の如き自然兒の一少女との性格悲劇を取扱ひ、三十六年には『女敎師』を書いて、女の孤獨寂寥を主題として、ハウプトマンの『寂しき人々』を思はしめた。また三十七年には『露骨なる描寫』といふ一論文を發表して、十九世紀後半の歐洲文藝は修飾誇張を排して、只管露骨な自然を尊び、形式を捨てゝ、直ちに内面生活の眞を描出したと說き、我が當來の文藝もまた斯くあらねばならぬ

と主張した。

島崎藤村は、『老孃』『水彩畫家』『舊主人』『藁草鞋』等の諸短篇を發表して、題材を平凡な日常生活に取り、而かも藝術的生命の深い新境地を開拓し、國木田獨歩もまた三十四年發行の『武藏野』に收められてゐる『郊外』以下の諸短篇に於て、早く自然派的傾向を見せた。

斯く一方では、在來の大作家にしてこの世を去るものがあり、健在な作家も思想界の新潮に棹すだけの作品を發表し得ぬといふ狀態にあつて、他方では今まで文壇の一角にしか名を知られてゐなかつた新作家が認められることになり、期せずして文壇は一大廻轉を見ることになつた。

この廻轉をして更に一層早めたものは、日露戰爭であつた。日露戰爭は、たゞに日本の歷史を廻轉させたばかりではなく、日本の文藝界、思想界を根柢からくつがへして、新しい基礎の上にそれを築き上げる大きな役目をした。

日清戰爭に依つて、國民的自覺の念が强固になつたことは、既に述べた通

りであるが、日露戰爭は、更にこの自覺をして世界大のものたらしめた。かうして日本國民は、世界的文明に參與すべき大資格を得たのである。皇國の興廢この一擧にありといはれた戰爭であるだけに、戰後國民がその戰捷に醉ふといふことはなく、却つて異常な緊張振りを見せ、産業に、經濟に、敎育に、社會政策に著しい發展を見るに至つた。斯くして歐米諸國との交通も一時に頻繁を極め、その影響は終に思想界にも文藝界にも及ぶといふ風であつた。即ち外國思想の輸入となり、直接外國の書籍に依り、彼の地の新思想を學ぶものが日に月に多きを加へて來た。而かもその當時に於て歐洲の思想界を風靡してゐたものは、即ち十九世紀後半から勢力を得た個人主義を基調とする自然主義の風潮であつた。

國民的自覺の基調は、言ふまでもなく個人主義である。さうしてこの個人主義は既に述べた通り戰爭前から培はれてゐた。そこへ戰爭といふ刺戟が生じて、この傾向を更に押進めることになり、而かも戰後は個人主義的傾向の

思想的產物が滔々として輸入されて來たのであるから、個人主義は益々その勢力を思想界に張ることになつた。この個人主義が文藝界に表はれて、自然主義となつたのだ。即ち懷疑と無解決とを標榜する個人主義のあらはれが、取りもなほさず文藝上の自然主義である。

二　初期自然派の作品

戰爭が終ると同時に、文藝界には新しい曙の一線が射して來た。華々しい前途を豫表する幾多の現象が踵をついで現はれた。先づ三十九年島村抱月の歸朝と共に『早稻田文學』が再興され、田山花袋に依り『文章世界』が發刊されまた新作家の紹介を標榜して『趣味』が創刊されるに至つた。これ等の再興若しくは創刊の雜誌は元より、在來の新聞雜誌、何れも步調を合はせて、新文藝の潮流を皷吹し刺戟して、愈々自然主義萬能の實を擧げた。先づ三十九年に於ける目ぼしい作品を擧げると、島崎藤村の『破戒』を筆頭に、三十八年に

『獨歩集』を出した獨歩には『運命』、その他がある。『破戒』は文壇の廻轉期を事實に示した作品として重きをなした。島村抱月氏はいふ。

『「破戒」はたしかに我が文壇に於ける近來の新發現である。予は此の作に對して、小說界が始めて更に新しい廻轉期に達したことを感ずるの情に堪へぬ。歐羅巴に於ける近世自然派の問題的作品に傳はつた生命は、此の作に依つて始めて我が創作界に對等の發現を得たといつてよい。十九世紀末式ウェルト・シメルツの香ひも出てゐる。我が小說界に一期を劃するもの、若しくは劃せんとしつゝあつた幾多の先驅者を總括して、最も鮮かに新機運の旆旗を揭げたものとして、予は此の作に滿腔の敬意を捧ぐるに躊躇しない。「破戒」はたしかに近來の大作である。』

抱月氏のこの評言で知れるやうに、『破戒』はその當時に於ける新異彩であり、新驚異であつたに相違ない。筆致にも結構にも全然舊來の型を脫して、新傾向を見せてゐる。しかしこれを今日から見れば、尙ほ多く小說的たるこ

とをまぬかれぬ。現實のまゝを、如實の人生をと心掛けながら、何時か小說になつてゐる。だが新興文學の目標に鮮かな一線を劃したことは確かだ。暫らく文壇から遠ざかつてゐた自然派作家の先覺者二葉亭は三十九年に『その面影』を、同四十年に『平凡』を出した。

國木田獨步は、既に『獨步集』を前年公けにし、『正直者』『女難』等の作品に、鮮かな自然主義的傾向を見せたが、『運命』中の『運命論者』『酒中日記』等に於て、益々その特色を發揮し、更に四十一年に出した『第二獨步集』に收むる『竹の木戶』『疲勞』『二老人』等に至つて、その極致を示した。彼はその本性に於ては、寧ろ熱情を有するロマンティシストであつた。彼には常に熱烈火の如き人生へのあこがれがあつた。彼の前途には常に曉の星の如き理想が光り輝いてゐた。彼はそれを何時も求め望んでゐた。美しい人生の幻影は、實生活にぶつかつて行くに從つて一つ一つ破れて行つた。その悲しみ、苦しみ、惱み、それが彼の藝術を輝かす光であり、それを偉大にする力であつた。彼の藝術

の題材は、美しい戀ではなく、破れた戀の悲しみであり、人生の光明ではなく、暗黑の相であり、如意の人生でなく、不如意の人生であつた。彼の作品には、從つて何時も痛切な生活問題が脈打つてゐる。時にはその痛切な生活問題が皮肉な眼を以て見られることもある。あきらめの相を以て現はされることもある。痛切に如實の人生、あるがまゝの現實に打つかつた人だといふ氣が、その文字の間からにじみ出る。彼自身、俺は自然派作家ぢやないといつた。なるほど、藤村や花袋が自然派作家であるといふ意味では、彼はこの範疇に入らぬかも知れぬが、生活に、現實に實感を以てぶつかつたといふ意味では、他の誰よりも眞實に自然派作家であつたと言つて好い。

四十年には、田山花袋が『蒲團』を出して、新興文壇の巨頭となつた。『蒲團』がモデル問題を惹き起し、又た風俗壞亂の廉で發賣禁止になりかけたことは、もう遠い昔話になつた。小栗風葉が『戀ざめ』を出して、發賣禁止になつたのも、またこの年である。生田葵山の『都會』が發賣禁止になつたのも、また、

この前後であつたと思ふ。島崎藤村は『並木』以下數篇の短篇小說に於て、形式としては益々自然派の一特色たる印象的筆致を、內容としては平凡な日常生活の橫斷面の描寫を見せた。紅葉門下であつた德田秋聲は、その地味な作風の故に、自然主義前期に於ては餘り認められなかつたが、この期に入るや、その特色たる淡々たる筆致と日常生活の描寫とが期せずして自然派的傾向を示してゐるといふ理由から、注意を引くやうになつた。『己が縛』『凋落』等はこの年の主なる作品である。

この年に於て、新進中の新進として文壇の視聽を集めたのは、正宗白鳥と眞山靑果とである。前者には『紅塵』『何處へ』に集められた幾多の短篇があり後者には『靑果集』の短篇集がある。彼等は、敎養から言つても、時代から見ても、全くの新人である。花袋、藤村、獨步などは、何といつてもまだその敎養に於て舊文藝の傳統を捨て去ることが出來ずにゐるのに對して、彼等は物の見方、感じ方、描き方、取扱ひ方に於て全く舊套を脫してゐた。自然主

義の新興藝術は、本當の意味では、この二人に依つて、始めて正しい光を放つたといつた方が好い。

三　評論界の趨勢

以上の如き徑路をとつて進んで來た新興文藝の運動は、明治四十一年になつて、始めてその眞の成果を見るに至つた。これまでとても上に述べた樣に勝れた作品が出てはゐるが、何れかといへばそれ等は準備時代をかたちづくるものであつた。さうしてこの四十一年が自然派の全盛時期であつた。顧みるに、過去四十年間の明治文學は、新面目を發揮するにはしてゐたが、依然として舊套を脱し得なかつた。古い酒を所々修繕を加へた古い皮嚢に入れて滿足してゐたに過ぎなかつた。土臺も古ければ、材料も古い間に合せの建築に過ぎなかつた。樣々な新しい外國思想が輸入されても、また外國の制度文物が到來しても、それ等凡てが借りものであつた――つまり肝心の頭の改造

が出來てゐなかつたのである。ところが四十年間の訓練は、とにかく日本人の頭を改造して、外國式の制度文物を採用しても、それほど滑稽には見えなくなつて來た。卽ち何もかもがすつかり日本人のものになつたのである。自然主義の文藝は、なるほど初めは外國からの借りものではあるに相違ないが、最早や單なる飜譯ではない。それを自然に求める頭が既に作られてゐたのである。決して借り物ではない本念の要求であるといふ自覺に立脚して來たのが、この二三年來の文藝の新しい大勢である。こゝに始めて意義ある文藝の基礎がかたまつて、新しい家が建つことになつた。この新文學の基礎をかためるために以上の作家が如何に努力したかは言ふまでもないが、これ等の人々と歩調を合はせて、新興自然主義文學の主張に努力した評論家の功績もまた決して沒却してはならぬ。なかでも四十一年に、『文藝上の自然主義』『自然主義の價値』『藝術と實生活との界に横はる一線』等の諸論文を發表した島村抱月、『自然主義』の著者長谷川天溪、及び『新自然主義』『神祕的半獸主義』の

著者岩野泡鳴の如き、どうしても忘れることの出來ぬ評論家である。抱月は三十九年歐洲から歸朝し、『早稻田文學』を復興し、夙に歐洲の新藝術及び批評の紹介につとめてゐたが、四十一年には、以上の如き學殖豊かにして理路整然たる論文を發表して、混亂紛糾を極めてゐた自然主義に理論的體系を與へて、文壇に於けるその地步を確立した。

また天溪は、早くからニーチェやイブセンを研究し、個人主義の立場から人生社會を觀察してゐたが、その必然の徑路として、無解決と無目的とを標榜し、幻滅の悲哀を說き、個人の解放を叫び、現實尊重を主張し、斯くして自然主義の立場を鮮明するに至つた。自然主義を以て、單に藝術上の主義のみならず、實生活の標語と見做すことに躊躇しなかつたのは岩野泡鳴である。一彼の『神祕的半獸主義』に於ては、あらゆる舊道德、舊宗教を排斥して、一切の現象に善惡美醜の評價を下さない所謂一元描寫を主張したが、四十年にはこの思想を更に實生活の上にも及ぼさうとして、『耽溺せよ、痛恨せよ、寧ろ

裸體となつてその裸體を裸體とせよ』と叫んだ。

以上の外に、同一の立脚地から人生を論じ、藝術を說いて、新思潮の傳播につとめた評論家には片上天絃、相馬御風がある。また反對の立場から自然主義を非難し若しくは無價値となして評論した人には田中王堂、後藤宙外、樋口龍峽、森鷗外、戶川秋骨等がある。そしてその中間にあつて折衷主義をとつたものは生田長江である。

既に文藝の方面に於てさへ、その意義につき、價値につき、また效果につき、可なり烈しい反對を見たのであるから、自然主義が、更に他の方面、例へば敎育、宗敎、道德等の方面に於て如何に烈しい反對に出遇つたかは、いふまでもないことだ。それにも拘らず、大勢の赴くところは如何ともしがたく、自然主義は文藝界のあらゆる方面に浸潤し、延いてその人生觀は、思想界一般をも風靡するに至つた。

四　自然派完成期

斯くして明治四十一年は文藝界に於ける自然派の完成期であつた。それ以前を破壞期とすれば、これは建設期、かれを準備期とすれば、これは完成期であつた。この建設期、完成期に至るまでの作品は、やれ未完成だ、やれうまくない、やれ田舍者の作品だと、隨分非難された。丁度今日のプロレタリア文學が批評されてゐるやうに。けれど四十一年になると、さういふ非難の聲も靜まつて、文學は自然主義に風靡されて了つた。さうしてこの建設期完成期を飾つたものに二つの作品がある。一は田山花袋の『生』であり、他は島崎藤村の『春』である。前者は作者自身を取卷いてゐた生活の諸相を、兄のこと、兄嫁のこと、母親のこと、それから彼自身のことを、飾らず、巧まず、ありのまゝに平面的に描寫したもので、所謂自然派の一特色たる平面描寫に依つたのである。後者は、「文學界」の連中の生活を、つまりロマンティックな

若い人々の生活を、印象風に、含蓄的に描いたもの、これも自然派の傾向たる印象主義の筆致の故に、注目さるべき作品となつた。田山氏は、その後『妻』『縁』『田舍教師』『時は過ぎゆく』等の長篇を發表したが、『生』以外の新しい發展はなかつた。氏の作品に宗教味が加味されて來たといふのは、比較的新しい事實に屬する。尙氏には他に無數の短篇があるが、大體から見て同一調子のものといつて好い。島崎氏は『春』以後『犧牲』(後には『家』の前篇となる)『家』『新生』と發展し、その間に多くの短篇を出してゐるが、代表作といへば、何人も『春』を推すであらう。

正宗白鳥は、『落日』『二家族』等の長篇に依り、四十一年の文壇に異彩を放つた。しかし氏の眞價は、尙ほ後の『泥人形』『微光』等に發揮されてゐる。眞山靑果は短篇集『奔流』を出した。收むるところ數種の短篇で、何れも力強いキビキビした筆致と、慘めな現實生活の描寫とが、强く讀者を動かした。今でこそ梨園にかくれてゐるが、その當時の名聲はたいしたものだつた。白鳥

か青果かとさへ言はれてゐた位である。

徳田秋聲は、相變らず、ジメジメした筆致で、弱い生活の敗北者を描いてゐた。『二老婆』『北國産』『出産』等はその主なる作品であつた。しかし氏が眞に文學的名聲を博し、またそれだけの勝れた作品を發表するやうになつたのは、それ以後のことで、即ち『黴』『あらくれ』等の長篇に負ふところが多い。この年に於ける小栗風葉の活動は、收めて『風葉集』一卷にある。序の代りとして『文學の發賣禁止問題』に關する島村抱月の意見が揭げてある。當時の文藝と社會との交渉を考察するための好資料である。

尙ほこの年には、この大勢に乘じて出て來た多くの新進作家がある。例へば、水野葉舟、小山内薰、吉江孤雁、秋田雨雀、中村星湖、上司小劍、窪田空穗、三島霜川、近松秋江、森田草平、岩野泡鳴の諸氏の如きで、元より各人皆なそれぞれ色彩を異にしてゐるが、廣い立場から見ると、自然派的傾向を帶びてゐた。かくして、自然主義は、この年を以て、そのクライマックスに

達した觀がある。それ以後になつて、個々的には勝れた自然派の作品が出るには出たが、全體的に見ると、自然主義それ自身にさへ樣々の分解作用が生じ、何となく白熱度が減じ、加へて他の方面からも勝れた作品が現はれるといふ譯で、自然主義も稍〻下り坂になつた。

以上は自然派文藝の實際を簡單に述べたのである。必ずしも他の傾向のものが、或は平行し或は逆行して存在しなかつたといふのではない。それ等についでは、次講で、自然主義の意義と分化とを論ずる條で、言及するつもりである。

第十講　自然主義の意義及分化

一　自然主義文藝の內容

自然主義文藝とは如何なるものか、また自然主義文藝は、吾々に何を殘してくれたか。

田山花袋はよく露骨な描寫、平面描寫といふことを說いた。今この言葉を分解して見ると、二つの要素となる。一つは題材、內容の露骨平面といふこと、他はそれをありのまゝに描くといふ態度方法である。前者はサブジェクトの問題、後者はトリートメントの問題である。吾人は先づ便宜上、サブジェクトの問題から這入つて行かう。

自然主義は、人生の眞（ツルース）を描くのが最後終局の目的である。從つて文藝の題材たり得るものは、如何なるものでも構はない。古典主義や浪漫主義の文學

は、概して人生の美のみをとつてその題材内容とした。こゝに花があるとすれば、その花の美的方面のみに、觀察の範圍を限つてゐた。さうしてその觀察の報告を以て、花の全貌を描き得たりと見做した。しかし自然主義は、それが果して花の生命を傳へ得るものかといふ疑問を提出した。花の眞の生命を傳へるためには、美でない方面も描かなければならない。それを描いてこそ眞の花が浮び上るのだと主張した。人生を描く場合も同じこと、たゞその美的方面のみを描いたのでは、その眞を表はすことはむづかしい。人生の眞をあらはすためには、その醜惡な方面も、暗黒な事實も、不正な行爲も、何もかもを描かねばならぬ。自然主義は、この意味で、廣い人生、深い現實をはかる尺度である。

赤裸々な人間、さういふ人間と人間との關係、さういふ人間の寄り集まつた社會の生活、それが自然主義に取つては唯一の內容であり、題材である。同じ美人でもお化粧をし、正裝した美人は、好んでロマンティシストが選ぶ題

材で、自然派作家は、そのお化粧をはがし、正装をぬがせ、更に人間の皮膚をむき取り、解剖刀で腹の中をわつて見せる。其處にはロマンティシストや、アイディアリストが夢見てゐるやうな薄霞に包まれた美などはない。寧ろ醜惡そのもの、暗黑そのもの、獸性そのものの露出暴露である。

この主張はやがて吾々の日常生活、現實生活、社會生活を廣く且つ深刻に見る傾向を生じた。文藝と社會との關係は、こゝに至つて二にして一、一にして二といふ密度を加へて來た。

人生の眞を求めるといふ傾向は、醜惡を發見し、暗黑を暴露し、獸性を剔抉するだけではなく、更にその根柢に喰ひ入る人間性の弱點、その弱點を救はんとしてゐる。既成の宗教や道德や教育やその他の社會問題に對して破壞の斧をふらずにはゐなかつた。舊物破壞、偶像破壞の精神が自然主義の有力な主張であるのは、全くこの爲めである。社會問題、個人の解放、舊道德の破壞、既成宗教の否定などが、文藝の內容となつたのも、また故あるかなで

に大膽に切込んで行つた最初の人であらう。彼の『ルーゴン・マッカール叢書』二十卷の小說は、遺傳の及ぼす害惡を取扱つた社會小說であると同時に、一個の立派な系統的遺傳論である。叢書中、『ナナ』『獸人』及び『居酒屋』などは傑作と稱されてゐる。日本では小杉天外、永井荷風等が最初にゾラの影響を受けたが、續いて自覺的にその主張目的を受納れたのは、田山花袋である。

既に人生の眞を描くといふ以上、その所謂人生の眞は醜いもの、肉的なもの、暗いものの方面により多くあらはれてゐるから、自然派作家がその方面に題材をとるに何の不思議もない。そのせゐか、我が國の自然主義は、頭の固定した教育家や宗教家や道德家から烈しい非難を蒙つた。その非難の大要は、男女間の肉慾を露骨に描いて見せるのが、自然主義の作品らしいが、それは風敎上甚だ宜しくない、靑年子弟を誤まるものであるといふのと、自然主義は結局道德上の本能滿足主義ではないかといふのであつたらしい。何れ

の非難も、何時如何なる場合に於ても、新思想、新運動が出遇ふ馬鹿らしい誤解の反動に他ならない。勿論中には單に讀者の好奇心を唆るために、わざときはどい肉慾描寫などやつた作家もあるにはあつた。しかし、それは始めから自然主義の何たるかを解せない者の仕事であるに過ぎない。

自然主義の主張は、肉慾も現實の一部である限り、人生の眞を描かんための必要に應じては、それの赤裸々な描寫も止むを得ない、けれどもその肉慾描寫の後には、それに依つて人生の意義を髣髴させるだけの背景がなければならぬといふにあつた。モウパッサンはたゞ興味中心で結婚の夜のベッドの有樣を描いたのではなかつた。乙女心の美しい幻影が無殘にも荒々しく打碎かれて行く一種の幻滅感を描いて見せるのが、作者本來の目的であつた。要するに自然主義文學を以て、肉慾描寫に終始するが故に風教に害ありとなしたのは、醜惡や暗黑面の再現もまたこの文學の一傾向であることを忘れた考へ方である。

尙ほまた、自然主義文學を以て道德上の本能滿足主義と同一視するが如きは、藝術と實生活との關係を考へないもの、また餘りに都合よく考へすぎたものの偏見である。藝術と實生活との關係問題は、なか〳〵難しいからこゝで述べてゐる暇はない。たゞ自然主義作家はこの問題を隨分眞摯になつて考察したといふことだけを書きそへて置かう。

次には、題材乃至內容の點から自然主義の價値について考へて見たい。平凡なものの中に奇蹟を發見したといふのは、その一つであらう。題材を廣く且つ自由にした、その結果文學を社會的にしたといふことも見逃す譯には行くまい。醜惡や苦痛の表現もまた立派な藝術になり得るといふ一新生面を美學上に打開したといふことも、また自然主義の價値であらう。たゞしかし、題材の平面化に墮して立體化に進まなかつたといふことは、やがて無味乾燥單調平板の不滿を起して、自然主義文學の衰微を早めるに至つた。それは何物にも換へ難い損失であつた。同時にそれは所謂『眞理』の本體を求める聲で

もあつた。眞理の本體は果して神であるか、精神であるか、肉體であるか、それとも矢張り美そのものであるのか。その本體をこれ等のうちの何れに、若しくは他の何物に求めるかによつて、自然主義は當然分化せねばならなかつたのである。題材內容から見た自然主義は、大體以上の通りである。次には、描寫の方法態度論が殘る。

二　描寫の方法態度

既に人生の眞、あるがまゝの人生を描くのであるから、文字の上の虛飾があつてはならない。文字の衣が多ければ多いだけ、人生の眞は、讀むものにぴつたりと觸れて來ない。技巧無用論の起る所以である。自然派の首唱者田山花袋が露骨な描寫、排技巧を主張したのは、寧ろ當然である。それに對して、當時の惡口屋は、田舍者の花袋が無技巧だ、排技巧だといふのは、都會趣味の紅葉などの眞似がやりたくも出來ないからだらうなどと冷かした。ま

た技巧なしで文學が生れるかといふやうな詭辯を弄して、無技巧論を駁する者もあつた。何れも稚氣の沙汰といふべきだ。無技巧の眞意、排技巧の目標は、人生の眞を傳へるにあたつて、それを邪魔する技巧は不必要である、しかしそれを一層切實に傳へる技巧はなくてならぬといふ點に存してゐた。それでなくて、どうして花袋始め、その他の自然派作家がフローベルの『ある動作を表はすにはたつた一つの動詞、ある形狀を表はすにはたつた一つの形容詞、あるものを表はすにはたつた一つの名詞しかない』といふ單一語說を金科玉條とおしいたゞくものか。以上を描寫の方法即ち媒介物に關する說明とするなら、描寫の態度は自から主觀の問題になる。ありのまゝの人生を再現するのであるから、作者の主觀や理想を交へることは無用である。自然を描くにも人生を寫すにも、出來るだけそのまゝを直寫し細寫しようとする。勢ひ明鏡が物象をはつきり映し出す如き態度でなければならぬ。客觀的である、沒主觀的である、排理想的である。フローベルは言つた、『藝術家の心は

見究めることの出來ぬほど廣々とした、さうしてその底には天の星屑をはつきり映し出すほど透通つた海のやうなものでなくてはならぬ』と。彼の所謂無人格性（インパアソナリツム）とはこの心鏡を傳へたものに他ならぬ。またゾラは藝術を科學と心得て、觀察の報告を集めて、これを頭の中の實驗室で實驗する、さうすれば自から小說は出來る、だから四方八方から材料さへ集めれば好いと考へ、その考へに從つて創作した。

ゾラや、フローベルの斯かる作風に對して、テーヌは自然の再現を極意として個人性を一切その影にひそましめるものだといつた。またブリュンチェールは自然派文學の特色を名づけるに、無感情、無人格性を以てした。

さて、理想としての沒主觀、排理想、純客觀の態度はあり得ても、實際に作者が、或る事物や人物に接してその態度をとり得るものか否か。それは甚だ難しい問題である。口でこそ明鏡だが、なか〱實際には明鏡たり得ない。それではそんな無理をするよりも、寧ろ客體が作者の官能に訴へたものを本

位にして、それを忠實に映し出す方がましではないか。こゝで自然主義は一轉して印象主義となる。これに對して飽くまでも對象に忠實ならんとする在來の傾向を本來自然主義といつてゐる。しかし本來自然主義の生命は、たとひ、その主張が貫徹されたとしても、獪らされる結果は對象に忠實な寫眞が出來るといふに過ぎないから、結局藝術を去つて行くことになりはしないか。藝術は元より寫眞ではない、報告書ではない。でも幸ひ、そこまで行かないうちに、自然主義に對しては、瑣末主義(トリヰイアリズム)に墮した、無生命な寫眞に傾いたといふ非難が起つて、作家もそれに氣がついた。この徑過は歐洲大陸の文藝界に於ても日本のそれに於ても、略々同一であつたやうに思ふ。外國ではフランスのゾラが、日本では田山花袋が、一時瑣末主義の代表者となつた。若しまた印象派自然主義の代表者を求めるなら、フランスにゴンクール兄弟あるが如くに、日本には島崎藤村がある。

描寫の方法態度の上での自然主義が、文字の虚飾を去り、簡易平明、一意

對象の中軸を把握せんとした努力に於て、その效果を見せた點はあつぱれであるが、沒主觀を說き、排理想を唱へ、客觀的態度を高調して、やがて自縄自縛に陷つたのは見苦しい業であつた。

しかし自然主義をして衰へさせた最大の原因は、現實主義の積極的方面を缺いてゐたといふ點である。自然派作家は、人生の暗黑面、醜惡面、不正不義の方面を剔抉して、これを再現することにつとめた。その結果は、それらが人生の全部であると見做して、やがて、懷疑、無解決を實生活上に標榜するに至つた。自然主義の文藝はペシミズムの色を以て塗られた。これは全く現實主義の積極的方面を忘れたために他ならぬ。醜惡面、暗黑面、不正不義を何のために暴露再現したか、人生の眞を得んがためにだ。では人生の眞を何のために得るか、その人生の眞を把握して、それに依つてより好い人間生活、社會生活を創造せんとする意慾に基いた全圓的目的があるためではないか。この意慾に基いて創作された文藝を求めるなら、誰しもロシアの作品に

指を向けるであらう。日本の自然派作家には、全くこの意慾がなかつた。最初にはあつても次第に忘れられて了つた。

斯く自然主義は內部的崩壞の要因をつくつてゐたと同時に、或はこれと並行してゐた他種類の文藝的芽生の成長、或は反動的勢力のために、衰徵の徵を示して來た。明治の末期二三年間は、斯かる文藝上の混亂動搖を語るものと見ることが出來る。

三　社會主義的小說

日淸戰爭後俄かに勢ひを增して來た社會主義思想は、日露戰爭前後に於ける產業主義、資本主義の確立と共に、益々深くその根を社會の底に張ることになつて、社會運動をして盛んならしめた。この思想傾向が文藝の方面に現はれたのが、社會主義小說で、木下尙江はその代表者であつた。『火の柱』(三十七年)、『良人の自白』(三十七年)、『靈か肉か』(四十年)、『乞食』(四十一年)、『墓

場』(四十一年)、『勞働』(四十二年)等には何れも、多少通俗小説の臭味がないではないが、著者の白熱せる社會解放、個人解放の叫びが、宗教的苦悶の奥底を通して放たれてゐる。勿論著者は、當時の社會主義運動に對して疑ひを差しはさまずにはゐられなかつた。社會主義運動果して盲ひた靈光の一閃を生活の上に投げることが出來るか否か。こゝで彼の魂は、直接の社會運動に行くか、宗教にすがつて迷ひを去るかの岐路に立つた。民衆全體の問題を考へる時、社會主義は直接の武器である。個人が、個人だけの悟りを開かうとする時、宗教はその唯一の後援者である。尚江は終に最後の道を選んだ。彼としては當然であつたに相違ないが、今日の吾々には幾多の問題が彼に依つて殘されてゐる。今はそれを考へる餘裕がない。こゝではたゞ彼の作品が、今日のプロレタリア文學の先驅ではないかといふことだけを附加して置く。

四　餘裕派文藝

人生に對し糞眞面目になり、いきまき、妙にいきせいて顏あからめてゐた自然派文藝に對して、寧ろ冷笑するやうな態度をとり、自然派の現實突入的態度なるに對し、回避的態度に出で、一方の刹那的態度に對し、低徊的態度に遊び、一方の熱情的態度に對し、微溫的態度に依つたもの、これを餘裕派文藝とかりに名づければ、その派の代表者は言ふまでもなく夏目漱石である。この文藝はもと俳諧派の寫生文から來たもので、子規に始まり、高濱虛子を經て漱石に至つて完成したといつてよからう。虛子のものでは、『俳諧師』『凡人』中の諸短篇、殊に『三疊と四疊半』それから『鷄頭』中の短篇が、その手法態度は飽くまで餘裕派式であるが、人生の眞實を傳へてゐる點で、價値を持つてゐる。彼は外國文學の影響を受けない、純日本趣味の作家である。そこへ行くと、夏目漱石は、同じく日本風の寫生文から出たとはいへ、彼には英文學趣味が多分にある。英文學趣味と東洋趣味との混融、それが彼の藝術である。與へられた或る社會、或る家庭に於て出來るだけ趣味と娛樂とを健全に

享樂するといふのが彼の人生觀で、彼の藝術は同時にこの人生觀に依つて裏付られたものだ。『吾輩は猫である』以下多數の作品は皆な斯くしてプチ・ブルジョアの藝術である。個人思想にふれた惱みもなければ、生活の苦しみに根ざした味もない。けれどもその觀察の奇警なると、文章の清新他奇なると、その內容の道德的中庸的なるとは、一般讀者の魅力を廣く惹くに十分であつた。さうして文學に一つのスタイルを作つたことに對しては十分な效果を認めるが、人生に新しい何物を寄與したらうか、それは疑問である。たゞしかしその流れを汲んで、新思潮派の第一次、第二次の作家達が出たといふことは、明治文學の流れを考へる者の見落してはならぬ重要事實である。第一次新思潮派には小山內薰、谷崎潤一郎などがある。それに直接の門下として鈴木三重吉、森田草平がある。谷崎潤一郎が『刺青』(四十三年)、鈴木三重吉が『赤い鳥』(四十四年)に於て、或は藝術至上主義、或はデカタン的傾向を見せたことなどは、自然派文藝に取つての可なり有力な反動であつた。永井荷風、吉井

勇の諸氏も、またこの傾向を强めるに與つて力があつた。ニオ・ロマンティシズムの作品を以て、自然派全盛期にも更に右顧左顧することなく健實な步みをつゞけて來た小川未明が、自然派全盛期の後を受けて頭角をあらはして來たのも、また當然といはねばならぬ。森鷗外も亦餘裕派文藝の一方の代表者であつた。尙ほこれ等の點に就いては何れ項を改めて述べるであらう。

五　人道主義への推移

しかし自然主義に對する反動勢力中最も有勢で、終に次の時代を支配するに至つたのは、「白樺」一派の人道主義である。明治から大正への推移は、樣々の異論があるとは思ふが、大體に於て自然主義から人道主義への推移と見てよからう。雜誌「白樺」からは、武者小路實篤、志賀直哉、有島武郎、里見弴長與善郎などの如き作家が出た。今日でこそ銘々別の道を、どうして一緒に行動をしてゐたらうかと思はれるやうな全く異つた道を辿つてゐるが、その

當初に於ては、彼等は同じ旗印の下に集つて、劃時代的な仕事を試みた。それが人道主義である。彼等は自然主義が暗黒を求めたのに對して光明を願つた。無解決、懷疑の代りに明るい生甲斐のある人間生活を肯定した。その理想からいふと、ロシヤの現實主義、即ち積極的な人間の肯定と一致するものであつた。勿論作品の色調をいふのではない。その點ではこの二つのものは白と黑ほどに違つてゐる。けれども如何に虐げられ抑へられてゐても、尙ほその底に人間性の光を、輝きを求めようとする理想に於ては一致してゐるといへよう。

この意味で、自然主義の衰微はフランス自然主義の影響の淺化を示すものであり、人道主義の擡頭は、ロシア現實主義の影響の深化を物語るものだ。尠くともその精神に於て、その當初に於てはさうであつた。たゞしかしそれは一歩を踏み誤まれば、昔ながらの理想主義になつて了ふ。人道主義にその危險がなかつたとは言へない。

様々に分化した自然主義、人道主義、これに新思潮派の藝術至上主義、最近に擡頭したプロレタリア文學思潮を加へて、今日の文藝が形づくられてゐる。この文藝は如何なる焦點をつくつて集中するか。それは明日の問題である。

第十一講　ニオ・ロマンティシズムの文學

一　ニオ・ロマンティシズムの概觀

自然主義の反動乃至傍系勢力の中、精神生活の高調、人間性の光明、理想の靈光を求めることにつとめた傾向を、新理想主義（ニオ・アイディアリズム）といふことが出來るならば、寧ろそれとは全く反對に、藝術至上主義、享樂主義、乃至唯美主義などのデカタン的傾向を一括して、新浪漫主義（ニオ・ロマンティシズム）と呼ぶことに敢へて不思議はあるまい。

元來、このニオ・ロマンティシズムなる語は、歐洲の文藝史家が、十九世紀後半の自然主義乃至現實主義に反抗して立つた新文學を總稱して呼んだ名前である。そして歐洲に於ける新浪漫主義の文學は、種々複雜な要素を混入してゐるから、一言でかういふものだと說明することは甚だ困難である。けれど

も、その特色と見らるべきものを中心にして考へて見ると、大體二つの部類に區別することが出來るやうに思はれる。一つはロシヤに現はれたトスカ、卽ち世界苦といはれてゐる厭世的、懷疑的思想であり、他はフランスを中心として起つたデカタン卽ち頽廢的思想である。そしてこのデカタン思想は更に分れて神祕主義と唯美主義との二つになつてゐる。

兎に角、歐洲には、自然主義又は現實主義の文學の反動傾向として、この新浪漫主義が一時非常な勢力を揮つた。それと丁度同じやうな現象が、日本の自然主義文學の後にも生じたのである。その反動傾向として發生したものが、いろいろの點で、歐洲の新浪漫主義の文學に似通つてゐるところから、吾々は暫らく、日本に於ける自然主義以後の文學にもその名稱を附して、說明の便を計らうと思ふ。

たゞ一つ注意を要すべきことは、ロシヤに於けるトスカのやうな思想的傾向が、日本の新浪漫主義にはないといふことである。蓋し、何處までも暗い

憂鬱な、救はれやうのない厭世思想は、スラヴ人特有の思想で、同じ歐洲でもラテン系統、チユートン系統の厭世的傾向とは大分違つてゐて、寧ろ日本人は、思想感情の上ではラテン系統、チユートン系統に似てゐるからであらう。或は南方的、北方的と區別して見てもよい。日本人には、スラヴ人程の深刻さがない。苦痛の感覺が執拗でない。感情に對してすぐ免疫性となる。從つて苦痛に對してもすぐ馴れて了ふ。深い苦悶や執着がない。トスカのやうな厭世的思想のない所以である。チエホフの初期の作品、ゴルキイの『ふさぎの蟲』、アンドリエーフの作品などは、先づ生れないといつてよからう。

新浪漫主義から、トスカの思想を拔取つた後に殘るもの、卽ち藝術至上主義、唯美主義、惡魔主義、神祕主義、享樂主義が、自然主義以後の文學にどう具現され、活現されたか。吾々は暫らくその方面を觀察して見たい。ニオ・ロマンティシズムは、明治の末期から大正三四年までの文學界に一つの力となつてゐた運動である。それは先づ文學に於ける享樂的傾向、官能的傾向とな

つて現はれた。然らば享樂的傾向、官能的傾向とは何であるか。それに就いては、大正二年二月の「早稻田文學」の『明治四十五年及び大正元年文藝史料』が最も鮮明に語つてゐる。曰く、

『享樂的傾向は、云ひ換へれば嘆美的傾向である。人生を觀照し思索すると云ふよりも、寧ろ生活を享樂しようと云ふのがその本領である。思想的でなくして官能的である。向上的であるよりも寧ろ多く頽廢的である。自覺的に苦悶的に若くは努力的に人生の眞意義を攫まうとするよりは、寧ろ能ふかぎり官能上の滿足を享樂し行かうとする傾向である。隨てその派の文學に現はれる所は多く官能的の嘆美である。能ふかぎり微細なる官能を働かせて、人生の美樂を探り求めて、之を咏嘆し若くは表現せんとする。そこにその派の藝術が生れるのである　隨て從來の所謂客觀派文學の平板乾燥に陷つたのに對する反動として之れを觀る時は、その出現に少なからざる意味が存する。』

しかし實際に現はれたその派の作品が、果して自然主義的客觀的作品の平

板單調といふ不滿を取除いて、その當時の讀書階級に充分な滿足を與へることが出來たか否かは、自づから別問題である。それについては、又この享樂主義の效過については、何れ後で述べるとし、先づ如何なる作家が如何なる作品を發表して、享樂主義の傾向を發揮したかそれを見たい。

二　谷崎潤一郎の諸作

明治四十三年に『刺青』を、同四十四年に『少年』『幇間』等の作を發表して一代の鬼才とまで稱された谷崎潤一郎を、吾々は先づ第一に、この派の代表者として擧げなければなるまい。美を熱愛し、官能の滿足を享樂しようとする彼の本來の性情から見れば、彼が享樂主義の傾向を追ふことは、何の不思議もない。彼は徹頭徹尾都會人である。わけても官能の美と情緒生活とを心ゆくまで味識せねばやまぬ性情の所有者である。江戸情緒若しくは江戸趣味は、彼の生活と魂とに深く喰入つて、彼を現實の冷靜なる觀照者たらしめて

置かなかつた。斯かる生活や態度から生れて來る彼の藝術に、享樂的傾向や耽美的傾向が附き纒つてゐるのは、寧ろ當然である。そしてこの傾向は、殊に初期の作品に著しい特色となつて、現はれてゐる。例へば『刺青』の中には『すべて美しいものは强者であり、醜い者は弱者であつた』と云つて、江戸の美しい生活を讃美し、憧憬してゐるし、又若い刺青師の年來の宿願は『光輝ある美女の肌を得て、それへ己の魂を刺り込む事であつた』とは言ふものの、彼の氣分に適つた味はひと調子とを持つた女は容易に見つからずして空しく三四年を過ごし、やつとのことで理想通りの一少女に出遇ひ、年來の希望を果して死ぬといふのであるが、そこにも彼の耽美的傾向が遺憾なく發揮されてゐる。

耽美的傾向や享樂的傾向が、追憶的となり、回顧的となるのは極めて自然の數である。醜惡なりと觀ずる現在生活から見れば、過去の世界や、少年時の世界は、誰に取つても美しい幻の世界であり、享樂の泉む源泉である。そ

の當時、阿部省三の『山の手の子』その他永井荷風の或る作品などと共に、谷崎潤一郎の作品が、追憶文學と呼ばれたのは、その爲めである。

極端なる美の追求者、生活の享樂者としての欲求は、彼をして單なる美の憧憬者たらしめては置かなかつた。同じく美を求めるにしても、異常なる美日常生活の表面上では見出されぬ美、オスカー・ワイルドの所謂『森の知らざる花、林の所有せざる鳥』(虛僞の頽廢)の美を求め、同じく官能の快感を求めるにしても、病的な官能、惡魔的な官能により多くの滿足と快感とを感ぜねば已まなかつた。彼の後の作品に加はつて來たこのやうな複雜な要素は、これを或は病的傾向、或は惡魔主義的傾向、或は神祕的傾向と呼んで差支へあるまい。大正元年から同三四年に亘つて著はした、例へば『惡魔』とか、『惡魔續編』とか、『熱風に吹かれて』とか、『捨てられるまで』とか、『お艶殺し』とか、『お才と巳之介』とかは、病的傾向、惡魔主義的傾向を著しく帶びてゐる。更に大正六七年頃に書いた『人面疽』、『ハッサン・カンの妖術』、『玄奘三藏』及び『魔術師』など

は何れかといへば、神祕的傾向に屬するものといふことが出來よう。

以上の作品は、その各々のあらはす傾向に於いて、作者の特異性を發揮したものに相違ないが、文壇の上からいつて殊に問題になつたのは『お艶殺し』である。これは近松秋江の『舞鶴心中』と共に大正四年一月の「中央公論」に掲載された。そしてこの二作は圖らずも所謂情話文學の端を開くに至つたのである。『お艶殺し』は、前にも述べたやうに、惡魔主義的の作品に相違ないが、而かもその形式が全くの物語であり、内容が旣に江戸末期の草双紙式のものであるところから、文壇はこれを呼ぶに情話を以てした。

さういへば、『お艶殺し』は、確かに、一種のローマンスである。江戸中きつて美しいと云はれてゐる一人娘のお艶と、そこの雇人のこれも亦た美しい新助との淸い戀愛がもとで、お艶が次第に肉の歡樂、官能の滿足に耽り、終には辰巳藝者となつて凄い腕に幾人となく男を誘惑する身となり、新助はふとしたことから人を殺したのがきつかけで、血を欲する慾望が何時しか腕に集

まつて、二人三人とその犧牲に供し、而かも他方で、お艶とは生死の境を彷徨してゐるやうな淫蕩な生活を續け、やがてお艶の心が他の男に傾いたと知つた新助は、忽ち例の血を見たい慾望にかられてお艶をその犧牲にしてしまつた。これは『お艶殺し』のほんの荒筋に過ぎない。けれども、これに依つても知れる通り、作者の惡魔的傾向が、例へば血を求める人間の性情などに現はれてゐないことはないが、それは心理的といふよりも寧ろ因縁的に描かれてゐるから、さう強く感ぜられず、どうしてもローマンスの興味が先に立つ。蓋し情話文學といはれる所以であらう。尙ほ序だから、當時の情話文學に就いて一言して置かう。

近松秋江の『舞鶴心中』も當時の文壇には、可なりの刺戟を與へた作品である。彼が『別れた妻に送る手紙』を書いて以來、男女の痴情心理を描出することに於いて、異常の才能を有することは一般の等しく認めるところであつた。その彼が久しい沈默を破つて公にしたのが、この一篇である。男は京都の有

名な旅館の一人息子で年は二十三、東京の或る大學に學んで、所謂近代の思想にもふれてゐた。女はその家の召使で、未だあどけない十六の少女であつた。この若い美しい二人は悲しい戀のもつれから、相抱いて海に投じた。場所は風光明眉な舞鶴の磯、時は波の穗がほの紫の夢をゆする初夏の夕であつた。舞鶴心中として當時世に謳はれてゐたこの事實を、近松秋江獨特の情趣豊かな筆致で描いたのが、即ちこの『舞鶴心中』である。尙ほ、この外に、長田幹彦の『祇園夜話』、田村俊子女史の『小さん金五郎』等が出たのも、この前後のことであつて、所謂情話文學は、殆ど文壇の大勢を風靡して、漸く文學を遊戲視し、享樂化する風潮が盛んになつた。その結果は、勇敢なる批評家赤木桁平の『遊蕩文學撲滅論』となつて、文壇の視聽を集めるに至つた。また當然の徑路といはねばならぬ。

さて谷崎氏の作品に話を戻す。『刺青』や『少年』や『祕密』の如き初期の作には如何にも純な豊かな作者の藝術的情緒といつたやうなもの、若しくは唉美的

傾向乃至江戸趣味といつたやうなものが鮮かに特色づけられてゐるが、『惡魔』を初め、その他の病的傾向のもの、惡魔的傾向のもの、乃至神祕的傾向のものになると、作者の所謂、嘆美趣味、神祕感、惡魔主義、乃至病的戀愛心理が泌々と味はへぬのは、どういふ譯であらうか。『惡魔』や『ハッサン・カンの妖術』や『魔術師』や『人面疽』には、强ひて設けた病的心理、强ひて作つた神祕不可思議はあるが、實感としての病的心理、實感としての神祕不可思議がない。

生活上の享樂主義者は、生活を享樂せずにはゐられない本能の已み難さを持つたものにして、始めてその名に値する。彼は常に現實の沒趣味と醜惡とを厭ふ結果、新しい美の世界を創造しようとする。尠くとも美の幻影に依つて自己の生活を豊富多彩ならしめんとする谷崎潤一郎の一面に、斯かる享樂主義者としての性情あることは何人も認めてゐる所である。そして『刺靑』や『少年』や『祕密』の如き初期の作品が、或る强い力となつて、吾々の胸に逼つて來るのは、全くこの現實に對する不滿、現實の沒趣味と醜惡とに對する

反抗の氣分から生れて來る作者の純眞な情味生活のしたゝりがある爲めに他ならない。

翻つて、『惡魔』や『惡魔續編』になると、作者が殊更に變態心理のために變態心理を描き、惡魔的氣分のために惡魔的氣分を描いてゐるやうに感ぜられて、變態心理を描き、惡魔的氣分を表出することに、どれだけの必然さがあり、どれだけの內的要求があるかを疑はずにはゐられない。作者が眞にさういふ變態心理を描くべき必然さを見出してこそ、又作中の人物が當然さういふ性格の所有者となつた時こそ、始めて『惡魔』や『惡魔續編』の如き作品は强い力を以て讀者の胸に逼つて行くのではないか。斯う見てくると、惡魔主義者としての谷崎氏は、人生の一角を押し詰めて、ゆがめて、病的にして見せる技巧の力はあるが、さて何が故にさう押し詰められ、ゆがめられ、病的にされるのであるかといふ必然さの根柢をはつきり把握してゐないやうに思はれる。野に咲かざる花を野に咲かせてこそ、林に巢喰はざる鳥を林に歌はせてこそ

藝術家は眞の使命を果し得るものといはねばならぬ。夢の國に花を吹かせ、夢の林に鳥を歌はせてゐるのでは、百年待つても、現實にはならぬ。

更に神祕主義者としての谷崎氏の一面を見るに、エドガア・アラン・ポーなどの影響があるやうに思はれる。『人面疽』や『ハッサン・カンの妖術』や『魔術師』の中に取扱はれてゐる世界は、日常の生活とは全く緣の遠い、不可思議な神祕な生活現象である。わけても『人面疽』や『魔術師』の如きは、人物や事件は、表面吾々の日常生活に存するものと變りはないが、その根柢を貫く作者の覘ひどころは、全く神祕若しくは不可思議の現象である。その內容は飽くまでもファンタスティカルで、不思議な材料に依つて不思議な出來事が仕組まれてゐる。而かも作者がなまなか實在の人物や場面を持つて來て、ライフ・ライクに描かうとすればするほど、インヒューマンな感じが色濃く浮き上つて來る。彼は流石に神祕感を强めるために、お化を持つて來るやうなことはしない。けれども近代科學に依つて未だ研究の步を進められない、而かも研究の對象として

重要視されてゐる心靈現象の如きものを、好んで神祕の材料とする。この意味で、彼は近代の科學的幽靈に依つて人生を神祕化しようとする。『活動寫眞の幽靈』や『印度の幽靈』に依つて、人生の神祕を具現しようとするのである。

神祕を求め、不可思議の世界を念ずることは確かに吾々の生活を深くし又高めることに相違ない。けれども生活を離れた神祕不可思議の世界を求め念ずることが、人生をよりよく生かすことだとは思はれない。生活の中に見出し得る神祕不可思議こそ、吾々の生活を深め、幽玄なものとするのである。けれども谷崎氏の描く神祕不可思議は果してこの生活の中に見出される神祕不可思議であらうか。何となく現實生活に足のついてゐない神祕不可思議である。生活の扉を開いて突きあたつたといふ神祕不可思議ではない。眞の神祕主義は、決して材料や人物や場面を珍らしいもの、變つたもの、不思議なものにするといふことではない。それはよりよき生活の可能を信ずることでなければならない。しかし、『人面疽』や『ハッサン・カンの妖術』や『魔術師』の如き

作には、よりよき生活の可能に對する信念の强さは見えてゐない。よしあるにしても弱い幽かなものである。そしてこの點が稍々もすれば一部の人々から、單なるディレッタントと見られ、又好事家と思はれる所以であらう。

三　永井荷風の藝術その他

永井荷風が、享樂的傾向、官能的傾向を發揮して、文壇の注目を惹いたのも、亦この時期であつた。永井荷風の作風は、始めから享樂的、官能的といふ譯ではなかつた。文壇に初見參をした頃の彼は、寧ろ自然主義的色彩を多分に藏してゐた。硯友社一派の釀し出した戯作者の空氣、享樂的風潮が未だ文壇の大半を浸潤して居り、他方では島崎藤村、田山花袋、國木田獨歩の諸氏が、新作風を示しながらも、大膽に自己の立場を宣明し得ず、何れかといへば、遠慮勝であつた場合に、敢然として佛のエミール・ゾラの觀念派的自然主義に基く自己の態度を宣言すると同時に、それの裏附けと見るべき作品を

示した點からいへば、彼は寧ろ日本に於ける自然主義の先驅者、開拓者と呼ばれて然るべきである。即ち彼は明治三十五年九月に長編小說『地獄の花』を發表し、その卷末に、自ら堂々と次の如き主張を聲明した。

『人類の一面は確かに動物的たるをまぬがれざるなり。此れ其の組織せらる肉體の生理的誘惑によるとなさんか。將た動物より進化し來れる祖先の遺傳となさんか。そはともあれ、人類は自ら共習慣と情實とによりて宗敎と道德とを形造るに及び、久しく修養を經たる現在の生活に於てはこの暗面を全き罪惡として名付るに至れり。斯く定められたる事情の上に此の暗黑なる動物性は猶如何なる進行をなさんとするか。若し其れ完全なる理想の人生を形造らんとせば余は先づ此の暗面に向つて特殊なる硏究を爲さゞる可らずと信ずるなり。そは實に正義の光を得んとする法廷に於て、必ず犯罪の證跡と其の顚末とを好んで精査する必要あるに等しからずや。されば余は專ら祖先の遺傳と境遇とに伴ふ暗黑なる幾多の慾情と腕力暴行の事實を憚りなく活寫せ

んと欲す。』

『暗面に向つて特別なる研究をなさざる可らず』といひ、『慾情と腕力暴行の事實を憚りなく活寫せんと欲す』といひ、何れも自然主義の主張に他ならない。しかし主張や態度の上で自然主義者であつた彼は、實際の創作に於て、よくその主張や態度に副うてゐたかどうか、言ひかへれば、その當時に書いた『野心』(三十五年二月)、『地獄の花』(同年六月)、『夢の女』(三十六年五月)等の作品に於て、自家の主張や態度を充分に發揮し得たか否か。この點に就いては『藝術家としての永井荷風』なる一文を書いた相馬御風が、次のやうに明白に說明してゐる。曰く、

『氏(荷風)はつひにゾラの如く、自家の藝術を單なる事實の記錄として甘んじて居ることも出來なかつたし、又それを以て正義の福音を傳ふる傳道書ともなし得なかつた。正義の光を得んとする法廷に於て、必ず犯罪の證跡と共の顚末とを好んで精査する必要あるに等しき態度を以て、人生の暗黑面に向

つて特別なる研究を爲さゞるべからずと主張しながらも、氏はつひにその所謂人生の暗黑面に向つて冷靜なる司法者の態度を持し得る人ではなかつた。頭に於てゾライズムの遵奉者であつた氏は、胸に於ては一個のロマンチシストであり、センチメンタリストであつた。』

著しい二つの對象が、始めから永井荷風といふ一箇の藝術家の中に巢喰つてゐたのである。相馬御風は更につゞけて言ふ。

『主義に於いては飽くまでもゾラ一流の科學的又は社會改良家的な自然主義者たることを期した氏も、その眞に人生を味はふ段になると兎角ロマンチシストたりセンチメンタリストたる自分に裏切りされた。人生の暗黑面に向つて藝術的興味を有する點では、又その事の理由を一種の理想派的見地から是認しようとした點では、ゾラ一流の自然主義と撥を一にして居たが、實際自分の觀た人生の取り扱ひ方、描き方に於ては、寧ろより多くロマンチックであり、センチメンタルであつた。描寫的であると云ふよりも、寧ろ咏嘆的であ

つた。解剖的であると云ふよりは寧ろ說明的であつた。』

この解釋に依つても知れる通り、永井荷風は、始めから冷靜な科學者のやうな態度で、人生を觀照し解剖することの出來る人ではなかつた。別言すれば、實驗的、科學的自然主義者たるには、餘りに多くの主觀的要素を持合はせ過ぎてゐた。而かもその冷靜な客觀的態度と燃えるやうな主觀的要素とが、初期の作品の中には、離れ〻〻になつてゐた。

それは兎に角として、彼は自然主義の先驅的聲明と見るべき藝術上の態度を公表したまゝ、明治三十六年漂然としてアメリカの旅へ赴き、杳としてその消息を絕つて了つた。その間に、自然主義の風潮は我が文藝界はいふに及ばず、思想界、學術界を風靡するに至つた。突如、彼は、自然主義全盛期の四十一年に『あめりか物語』一卷を以て再び文壇に現はれた。同じく四十二年には『ふらんす物語』を公にした。二篇共に、ボードレールの所謂『唯だ行かんが爲めに行かんとするものこそ、眞個の旅人なれ。心は氣球の如くに輕く

身は悪運の手より逃れ得ず、如何なる故とも知らずして、常に唯だ行かん哉行かん哉と叫ぶ』旅人の氣持で、異國の情緒、風俗、人情を書き記した短篇の集りである。手法の上から見ると、初期の作品の如く、描寫と説明とが離れ離れでなく、主觀と客觀とに不思議な融合が見られる。更に作者の人生に對する態度を見るに、共處には觀念派的自然主義の風はなく、同じく暗黒面を暴露するにも、その信念に正義人道を振りかざすほどの白熱さなく、これも亦必然の人生の一相なりとのあきらめの悟道と、更に進んではさういふ人生の一相をも、人間生活を充實させ完全ならしめるためには享樂の資料となりはしないかといつたやうな、所謂享樂的傾向、嘆美的傾向さへ存する。内容も多くは、この享樂的傾向、嘆美的傾向に相應はしいものである。

『ふらんす物語』中の『巴里のわかれ』にこんな一節がある。

『フランス! あゝフランス! 自分は中學校で初めて世界歴史を學んだ時から子供心に何と云ふ理由もなくフランスが好きになつた。自分は未だ嘗つて、

英語に興味を持つた事がない。一語でも二語でも、自分はフランス語を口にする時には、無上の光榮を感ずる。自分が過る年アメリカに渡つたのも、直接にフランスを訪ふべき便宜のない身の上は斯る機會を捕へやう手段に過ぎなかつた。旅人の空想と現實とは常に錯誤すると云ふけれど、現實に見たフランスは、見ざる以前のフランスよりも、更に美しく、更に優しかつた。あゝ！わがフランスよ！自分はおん身を見んが爲めにのみ、此の世に生れて來た如く感ずる。』

彼が接してゐたそのおん身フランスとは、抑々如何なるフランスか、それは云ふまでもなく、藝術宮殿のフランスであつた。歡樂のパリーであつた、裸美人の舞踊に夜を明かすパリーであつた、肉の歡樂に耽るパリーの巷であつた。『あめりか物語』や『ふらんす物語』には、最早や『地獄の花』や『夢の女』などに見えてゐたゾライズム、即ち、觀念的自然主義の要素、若しくは三十五年のあの宣言に見えてゐたやうな正義的觀念も、社會改良家的な心意氣もなか

つた。吾を忘れて、只管、人生を享樂し快樂化せんとする傾向が漸く著しくなつて來た。しかし、たゞこゝに一つ注意すべきことは、その享樂的傾向、快樂的情緒、乃至官能主義の奥底に、尙ほ縷々としてつきざる一脈の哀感の漂ひ流れてゐることである。享樂といひ、快樂といひ、官能滿足といふも、それは遊野郞がたゞ金のあるにまかせて遊び浮かれまはる快樂、享樂、官能滿足ではない。それは又あの紅葉一派が遊びを、娯樂を標榜した單なる享樂的傾向とも違つてゐる。永井荷風の『あめりか物語』『ふらんす物語』に見えた享樂的傾向は、人生に向つて眞實を求め、生活に向つて正しく生きんことを求め、且つ又生に對する無限の執着を感じた者のみが辿りつくことの出來るものに他ならなかつた。彼も亦た近代主義者の一人であつた。求めて得られない悲哀を痛切に實感し、ヴェルレーヌと共に、『都に雨の濺ぐが如く、わが心には涙の雨が降る。如何なれば、かゝる悲しみの、わが心の中に進み入りし。地に響き、屋根に響く、あゝ蕭條たる雨の音よ、雨の調よ。されどわが心は

何が爲めに憂うるとも知らず、唯だ譯もなく潤ふ。譯もなく悲しむこそ、悲しみの極みとは云ふならめ、憎むでもなく、愛するでもなくて、わが心には無量の悲しみが宿る』と口ずさまずにはゐられなかつたのである。モダーニストの悲哀と哀感、荷風の『あめりか物語』『ふらんす物語』が不思議なほど吾吾に魅力を有するのは、その享樂的傾向の背後にそれが一脈漂つてゐる爲めである。

奥底に一脈の哀感と悲哀とを湛へたこの享樂的傾向は、一年毎に色濃くなつて行つた。四十二年から四五年に亘つて、彼は長編小說『冷笑』『すみだ川』『歡樂』を書き、短編小說『新歸朝者の日記』『風邪ごゝち』『見果てぬ夢』『牡丹の客』などを書いた。これ等の作では、享樂的傾向が依然として全體の色彩を濃厚にしてゐるが、その底に强く流れてゐる悲哀と哀感とはそれ自身の形をとゞめず、或は冷笑と化し、或は皮肉と變じ、或は批評となつて現はれてゐる。卽ち悲哀哀感の要素に理知的說明が加はつて來たのである。そしてその

最も好い例は、『冷笑』であらう。

この一篇は、フランスの藝術的空氣にふれ、アメリカの自治的な社會生活を見て來た新歸朝者たる作者の日本現在の社會、特に東京生活の批評であると同時に、その現在生活に堪へ得ずして、享樂的になり、一種の茶人式な冷笑的な生活狀態に陷つて行く人の生活を描き出したものに他ならない。だから、只だ單にその當時の批評家が批評し去つたやうに、快樂主義若しくは享樂主義の謳歌とのみ見るのは間違ひである。それ故にこそ作者自身も『自分の著作「冷笑」は享樂主義をのみ歌つたものではない。寧ろ享樂主義の主人公が風土の空氣に餘儀なくせられて川柳式のあきらめと生悟りに入らうとする苦悶と悲哀とを語らうとしたものである』と說明した。

しかし彼の作風や傾向は、次第に現代社會に對する批評といふ觀念的要素が尠くなつて、享樂的、官能的、快樂的要素が多くなつて行つた。『歡樂』はいふに及ばず、『新歸朝者の日記』、大正元年に入つての『見果てぬ夢』、『風邪ごゝ

ち』、乃至はその前後の脚本『暴君』『わくらば』、さては比較的最近の『腕くらべ』（大正六年）、『おかめ笹』（大正九年）等、一篇としてその傾向を物語らぬものはない。

さて谷崎、永井の二氏は、個性的にはかなり違つたものを持つてゐるとはいへ、自然派文學が萎微停滯してゐた間に、一脈の生氣と活力とを文壇に送つたニオ・ロマンティシストの大立物であることは疑ひなき事實である。そして谷崎潤一郎がより多くオスカア・ワイルドとかエドガア・アラン・ポーとかの唯美的傾向、神秘的傾向を代表するものとすれば、永井荷風はボードレール、ヴェルレーヌの頽廢的、哀感的要素をより多く代表するものといへよう。一方が英國的なら、他方はフランス的である。さりながら二者共に享樂主義の上に立脚してゐることはいふまでもない。

四　その他の作家

谷崎、永井二氏の他に享樂主義の傾向を鮮かに發揮したのは、夏目漱石の門下から出た鈴木三重吉である。『千代紙』以後『赤い鳥』などに至る諸作、並に長編小說『小鳥の巢』の如きは、何れも美しき夢を物語り、未だ見ぬ女の心を憧れる純情を表現し、纖細微妙な官能を生々と描寫して、讀者をして思はず恍惚の世界へ誘つて行かずにはゐない。けれども其處には谷崎氏に見られる如き、醜のうちにも美を見出し、惡のうちにも善を見出さうとする病的、惡魔的傾向はなく、又永井氏に見られる如き、美や善を求めて尙ほ得られない悲哀、若しくは哀感の要素はない。追憶に現實を忘れ、夢に美を描いて滿足するといふ、何れかといへば、近代精神の苦悶を伴はないロマンティシズムの特色を多く帶びてゐた。しかし、この淡い夢のやうなロマンティシズムも、『黑血』『桑の實』などになると、寧ろ現實的傾向に壓倒される氣味であつた。素々彼は寫生文の氣持と手法とから文學へ這入つたゞけに、その作風が現實的傾向を示すに何の不思議もない。

鈴木三重吉の外に、小川未明、森田草平の諸氏をも尙ほニオ・ロマンティシストとして數へる評家もあるが、私は少しくその見解を異にする。何れ彼等については項を改めて論ずる折があると思ふから、その時に自づから釋明されるであらう。

五　ニオ・ロマンティシズムの效過

さて以上擧げ來たつた諸氏は、文藝界に如何なる効果を示し得たか。何よりも先づ行詰つて平板單調の譏を免れなかつた自然主義文藝の行手に、官能美の裝ひを以て、新感覺の觸發を以て、一道の光明を投げ與へた效績を沒却することは出來ない。自然主義が現實生活の中に眞を發見したといへるならニオ・ロマンティシズムは現實生活の中に美を見出したといつてよからう。確かに新しい感覺を發見した、新しい官能美を發見した、そして人生を豐富にした、生活を多彩ならしめた。けれどもそれは何時しか、現實を沒却し、生活

とは緣遠い世界を夢見ることになつた。在來のロマンティシズムが陷つた、一人よがりの、空想世界に落込み、象牙の塔に引込んで、銀の笛を吹くやうな結果になつた。

如何なる場合に於ても、近代藝術の强みは、現實的といふ一點に存する。新浪漫主義はこの最重要な强みを失ふと同時に、稍〻もすれば遊戲的傾向を文藝界に招來し勝ちであつた。

第十二講　漱石及鷗外の藝術

一　夏目漱石の文學觀

自然主義の傍系勢力中最も大きな潮流をなして、常に文壇の一方に重きをなしてゐたのは、夏目漱石、森鷗外諸氏の所謂餘裕派文學である。こゝでは二氏の藝術について、いさゝか述べて見たいと思ふ。先づ夏目氏の文學觀から窺はう。

夏目氏の文學觀を究めるためには、彼の性格と素養とを知らなければならぬ。夏目氏は、善惡共に江戸つ子の持つあらゆる特性を身に具へてゐた人である。その顯著な特性の一つは、反抗精神である。時の勢力に反抗する、所謂强きを挫き、弱きを助けるといつた俠氣がそれである。正義觀の旗色に依つて常に行爲を導いて行くといふのが、その特性の第二である。そしてその

第三の特性は、輕快洒脱の趣である。自然主義萬能の文壇に反抗して立つたこと、若しくは、文藝に Heroism の精神を求めたことは、第一特性のあらはれであり、自分の文藝に道徳的精神を發揮し、他人の作品にその精神の發露を要求したことは、たま〳〵第二特性をあらはした實例であり、更に氏の作風にある滑稽洒脱の風格は、第三特性の發揮に他ならぬ。

夏目氏の文學的敎養の第一は俳句である。次には寫生文である。天然自然の風物に感懷を托して、塵世俗事を忘れるといふ東洋人趣味を解したのは、全くこの爲めであつた。氏が禪の趣味を解したのも亦た當然である。外國文學の中では英文學に最も多くの興味を持ち、深い共鳴を感じた。それは英文學が、他の大陸文學に比し、人間の臭味が尠く、天然自然の香氣が割合に多かつたためであらう。一體に西洋の文學には、天然自然を詠じた美しい文學が尠く、いかに人間臭味の多い文學に充ちてゐるかを、『文學論』の中か何處かでいつてゐた。さういへば、フランスに源を發した自然主義の文學の如き

は、人間の臭味そのもののみの表現であるといつても過言ではないのだから、夏目氏がそれを嫌つた、尠くとも、それに共鳴しなかつたのは當然である。かういふ性格と教養とが方程式をつくつて生み出す氏の文學觀が如何なるものであるかは、略ゝ見當がつくことであらう。しかしたゞ見當をつけたゞけではすまされぬ。はつきりとその正體を摑んで安心する必要がある。夏目氏は、明治四十年に高濱虛子の短編集『鷄頭』に長い序文を書いた。それは明かに氏の文學觀である。他にもいろ〳〵氏の文學觀を窺ふべき材料は澤山あるが、先づこの序文に依るのが、一番近道であらう。

夏目氏の解釋によると、小說には二種類ある。一は餘裕派、他は非餘裕派の小說である、餘裕のある小說とは、逼らない小說、非常といふ字を避けた小說、觸れる觸れないといふ當時の流行語を用ひれば、所謂觸れない小說であり、餘裕のない小說とは、セッパつまつた小說、息の詰まるやうな小說、呑氣な分子、氣樂な分子のない小說、一生の浮沈に關するやうな大問題を主と

する小説である。更に言葉を換へていへば、生活の大事件、その他重大な問題を材料としない餘裕のある小説で、運命だとか、人生だとかを問題にしたのが餘裕のない小説である。餘裕のない小説にも存在の權利があるなら、餘裕のある小説にも存在の權利はある。茶を品し花に灌ぐのも餘裕である。冗談を云ふのも餘裕である。繪畫彫刻に閑を遣るのも餘裕である。日露戰爭の永續せざる限り、世間がボルクマンの様な人間で充滿しない限りは餘裕だらけである。而して吾人も已むを得ざる場合の外は此の餘裕を喜ぶものである。從つて此等の餘裕から生ずる材料は皆小説となつて適當である。これは勿論絕對的ではない。自然派側で嚴肅な人生、眞面目な人生、即した人生を標榜して、堂々とその意に味方せぬなまぬるい藝術家的態度を攻擊したのに對する反抗である。けれどもそれがやがて氏の主張であつたことは、その當時の作品が明かに證據してゐる。『吾が輩は猫である』(三十八年)、『坊つちやん』(三十九年)等は、最もよく以上の說を裏書きするものである。

この餘裕ある小說といふ概念から引き出されるものは、低徊趣味である。これに就いて氏はいふ。『是は便宜の爲め余の製造した言語であるから他人には解り樣がなからうが先づ一口に云ふと一事を卽し一物を卽して、獨特もしくは連想の興味を起して、左から眺めたり右から眺めたりして容易に去り難いと言ふ風な趣味を指すのである。だから低徊趣味と云はないでも依々趣味戀々趣味と云つてもよい。』これも一直線にものを眺めてぐい〳〵と書いて行く自然派の作風に暗に對抗したものと見ることが出來る。この趣味は氏の凡ての作品につきまとつてゐる。時にくどいと思はれるのは全くこの趣味の惡化に他ならない。

この低徊趣味から更に連想されるのは、非人情の世界といふことである。藝術の一境に非人情の世界といふのがある。『草枕』(三十九年)は全くこの境地を描き出したものといつてよい。『苦しんだり、怒つたり、騷いだり、泣いたりは人の世につきものだ。余も三十年の間それを仕通して、飽き飽きした。

飽き〳〵した上に芝居や小説で同じ刺激を繰返しては大變だ。余が欲する詩はそんな世間の人情を鼓舞する様なものではない。俗念を放棄して、しばらくでも塵界を離れた心持になれる詩である。いくら傑作でも人情を離れた芝居はない。理非を絶した小説は少からう。どこ迄も世間を出る事が出來ぬのが彼等の特色である。』しかしそれでは面白くないといふのは、非人情の天地を逍遙したい『草枕』の主人公の感想である。又『草枕』には、『住みにくき世から、住みにくき煩ひを引き拔いて、難有い世界をまのあたりに寫すのが詩である。畫である。或るは音樂と彫刻である。』とも、又、『あらゆる藝術の士は人の世を長閑にし、人の心を豐かにするが故に尊い』とも云つてゐる。ところがこの條件にぴつたり合ふ藝術が尠ない。詩の如き比較的人界を脱した種類の藝術でも、殊に西洋のそれになると、浮世の臭ひがつきまとつてゐる。浮世の勸工場をはなれたものは、たゞ東洋の詩歌のみである。『採菊東籬下、悠然見南山。只それぎりの裏に暑苦しい世の中を丸で忘れた光景が出て來る。

垣の向ふに隣の娘が覗いてる譯でもなければ、南山に親友が奉職して居る次第でもない　超然と出世間的に利害損得の汗を流し去つた心持ちになれる。』といふのである。『二十世紀に睡眠が必要ならば、二十世紀に此出世間的の詩味は大切である。』とは、『草枕』に於ける有名な警句の一つである。

要するに、詩でも小說でも、きつたはつたの實生活の苦鬪をあらはすのは一向差支へないが、實生活の苦味や悲しみや苦勞を忘れしめて、扁舟を浮べて桃源に遊ばしめるといふやうな趣をそなへてゐてこそ、藝術としての存在意義があるといふのである。從つて夏目氏の考へによると、藝術は、自然派作家が考へるやうに、何も人生の意義を髣髴させるとか、生活の眞實な味ひをかみしめて、それを如實に表出するとかしなくも好いのである。たゞ讀むものをして、愉快に面白くさせ、現實生活の苦鬪を忘れさせさへすれば、藝術の能事は終るのである。これ明かに藝術至上主義の考へ方である、藝術のための藝術を奉ずる者の考へ方である。藝術を以て單に娯樂、享樂の一方便

と見做す者の考へるところと何等選ぶところがない。

しかし夏目氏の藝術観は、こゝにおさまつてゐるのではない。更に一歩を進めて、人の心を長閑にする、愉快にする、面白くするには、する方法がある。その方法をあやまつた文學は、文學としての價値の尠ないものである。眞をあらはしても文學は出來る。善を表現しても文學は出來る。又美を發揮しても文學は成立する。それから壯、即ちヘロイズムを發揮した文學もある。だが、その何れの場合に於ても、他の要素をけがしたりきづつけたりしてはならぬ。例へば、眞を發揮する自然派の文學の如きは、眞のために、善や美を往々にして破壞して顧みないことがある。又ロマンティシズムの文學は、美のみを發揮せんがために、眞や善を全くきづつけて了ふ場合がある。何れも文學として面白くないと夏目氏は思つたらしい。わけても如何なる場合にあつても、善を傷け、破壞することは、文學の邪道であると考へてゐたやうに思はれる。氏が如何に普通の既成道德觀念に捉はれて、その支配を受けてゐ

たかといふことは、『文藝の哲學的基礎』（四十年四月の講演）や『創作家の態度』（四十一年二月の講演）や、更に漱石全集中の別冊、藏書書入の文に徴して見ると明かである。『文藝の哲學的基礎』の中に、モウパッサンの作品を批評した條がある。例の『放浪者』――これは一人の乞食が、諸所を放浪してゐるうちに、或る時非常に腹が減つて來たので、人の氣はいのない人家へ忍び込んで、パンや葡萄酒を盜み出して、口腹の慾を充たし、村端れまで來ると、眠むくなつてうと〳〵してゐる。そこへ村の娘が通りかゝる。腹が出來、酒の氣は廻り、他に慾のなくなつた乞食は、その娘を見るや急に獸慾を遂行するといふ筋である。日本では田山花袋が『葱一束』といふ題でほゞこれと同じやうな事件を扱つた――を批評して、成程、さもありさうな眞を發揮してゐるには相違ないが、他の理想卽ち善の理想を破壞してゐる。從つてその打ち壞された理想を全然忘れない以上は、折角の面白味は打ち消されてしまうといつてゐる。

又同じくモウパッサンの『頸飾』――これは或る貧しい官吏の夫婦者が上官の催す夜會に招かれたので、亭主は細君同伴で出掛け細君を喜ばしてやらうと思つた。ところが細君の方では身仕度になかく金がかゝつた。そして到頭頸飾だけは金持の友人の細君から借りることにした。それは金剛石入の頸飾であつた。いよく盛裝して夜會へ細君は夫と一緒に行つて底のぬけるほど踊り廻つた。そして歸りに氣がついた時には、例の頸飾がなかつた。いろいろの方法で探したが、到頭見つからないで了つた。そこで夫婦は血の出るやうな思ひで方々から借金して、かりたのとそつくりの頸飾を買つて返した。その後細君はすつかり下女のやうに身を落して働き、その借金の返濟に骨を折つた。十年目かで、例の頸飾の主に細君はあつたが、向ふでは氣づかぬほど細君はやつれてゐた。夫人がどうしたのかときくと、細君はこれくと一切を打ちあけた。すると夫人は、それは御氣の毒でした。あれはまがひものだつたのですのにと答へた。これがその荒筋である――について夏目氏は次

のやうにいつてゐる。『最後の一句は大に振るつたもので、定めてモウパッサン氏の大得意な所と思はれます。輕薄な巴里の社會の眞相はさもかうあるだらう穿ち得て妙だと手を拍ち度くなるかも知れません。そこが此作の理想のある所で、そこが此作の不愉快な所であります。よくせきの場合だから細君が虛榮心を折つて、田舍育ちの山出し女と迄成り下つて、何年の間苦心の末、身に釣り合はぬ借金を綺麗に返したのは立派な心掛けで立派な行動であるからして、もしモウパッサン氏に一點の道義的同情があるならば、少なくとも此細君の心行きを活かしてやらなければ濟まない譯でありませう。――同情を表すべき善行をかきながら、同情を表してならぬと禁じたのが此作であります。いくら眞眼を穿つにしても、善の理想をかう害しては、私には贊成出來ません。』又漱石全集の別冊には、次のやうに書いてある。

『此落ちが嫌である。こゝに至つて今迄のいゝ感じが悉く打ち壞されて仕舞ふ。なぜモウパッサンはかうだらう。此一節がなければ夫婦の辛苦したのは全

く義理堅い美德で、輕薄なる細君も此出來事の爲めに眞正なる人間となつたのだから、讀者も非常に同情をもつて讀んで行かれるのに、この結末の一篇の爲めに夫婦は丸で馬鹿にされて仕舞ふ。つまり毫も利目のない美德をつくして居たのである。モウパッサンは何を苦しんで此夫婦の美德を殺して仕舞つたのか分らない。つまり佛國の現代の社會に生息して共冷刻な皮肉な空氣で自身が臭くなつて居るからである。』

モウパッサンの道義的觀念の缺如に對し夏目氏が如何に不滿を感じてゐるかは、以上で知ることが出來よう。そしてこれはたゞにモウパッサンの作品に對してのみではない。ゾラやズーデルマンの或る作品やシェークスピアの『オセロ』に對してもさうである。凡て道義的觀念の稀薄な若しくはそれの缺如した作品に對し夏目氏は不滿を感じたのである。その點はロシヤのトルストイと非常に似たところがある。そしてこれは、反對に言ひかへれば、凡ての文學藝術に對して夏目氏は道義的觀念を求めずにはゐられなかつたといふことと

になる。尠くとも道義的觀念を破壞するやうな眞や美や壯の發揮を認めなかつたことはたしかである。夏目氏が道義的作家であるといはれるのは、全くこの爲めに他ならない。

夏目氏は更に進んで、文藝に向つて、一種のへロイズムを要求してゐる。意志の發するところ、そこにへロイズムが生ずる。文藝がこのへロイズムを表現した時、そこには壯嚴の美が發揮される。それは眞、善、美と同じ一つの文藝上の理想である。『眞正の Heroism に至つては實に壯烈な感じがあるだらうと思ひます。文藝家のうちでは此種の情緒を理想とするものは現代に於ては殆どない樣に思ひます。』(『文藝の哲學的基礎』)と氏は暗に現代文藝がこの壯嚴美を缺いてゐることを嘆じてゐる。

これを要するに、夏目氏の文學觀は、一言でいへば、毫も新しいところがなく、極めて古い在來の文學觀から一歩も出てゐない。文藝は縹渺として風塵を忘れしめ、武陵桃源の夢を結ばせるもの、而かもその夢は道德を破壞し

傷ける種類のものであつてはならぬこと、出來れば、壯嚴の美をも加へて懦夫をして立たしめる態のものであらねばならぬといふのである。そこには毫も近代人の惱みを通した藝術に對する要求も憧憬もない。所詮氏の解釋に從へば、文學は一種の享樂である。道德に傷をづけない程の道樂である。出來ればヘロイックな心持を讀む者に起させるものであつて欲しいといふことに歸着する。そして氏の十四五年間に亘る大小數十篇の小說は、略々以上の如き文學觀をそのまゝ裏書きしたやうなものである。尤も晩年の作には大分趣の異つたものもあるにはある。

二　夏目氏の作品

氏は比較的晩年に創作に筆を執り始めて、まだこれからといふところで世を去つたが、その作品は決して尠くない。今その主なるものを略ゝ年代順に列記して見ると、『吾が輩は猫である』(三八――三九)、『倫敦塔』(三八)、『カーライ

ル博物館』(三八)、『幻影の盾』(三八)、『琴のそら音』(三八)、『一夜』(三八)、『薤露行』(三八)、『趣味の遺傳』(三九)、『坊つちやん』(三九)、『草枕』(三九)、『二百十日』(三九)、『野分』(四〇)、『虞美人草』(四〇)、『坑夫』四一)、『三四郎』(四一)、『それから』(四二)、『門』(四三)、『彼岸過迄』(四四)、『行人』、(大正元年)、『心』(三)、『道草』(四)、『明暗』(五)である。尚ほこの外に『京に着ける夕』とか、『文鳥』とか、『夢十夜』とか、『永日小品』とか、『滿韓ところ〲』とか、『硝子戸の中』とかの小品、若しくは『文學論』『文學評論』等の研究論文、その他折につけて書かれ又話された隨筆、講演等を加へれば、如何に勢力の偉大であつたかゞ知れる。

夏目氏の作品は大體これを三種類に區別することが出來る。第一は、ロマンティックな、夢幻縹渺の情趣を織り出したもので、『倫敦塔』『幻影の盾』『琴のそら音』『一夜』『草枕』『二百十日』『虞美人草』等がそれである。第二は滑稽諧謔のうちに社會人生を諷刺したもので、『吾が輩は猫である』『坊つちやん』『野分』等の諸作である。第三は所謂心理小說で、自然派の傾向を無意識の間に

とり入れたもので、『三四郎』以下の諸作を全部これに加へてよい。
　ところで第一の作は、始めから讀者を夢幻の境に誘ひ、浮世の勸工場を閉鎖し、武陵桃源の仙境を束の間でも見せれば、能事既にその大體を終るのであるから、義理がどうだ、人情がどうだ、戀がどうだなどは既に問題の外である。願ふはたゞ天地の耿氣に觸るゝことである、無絃の琴を靈臺に聽くことである、解し難きが故に無限の域に徘徊して、縹渺のちまたに彷徨することである、換言すれば、依々趣味、戀々趣味、低徊趣味に思ひきり耽ることである。その願ひ、その憧れに酬ひれば、藝術の職能は足る。他に意義はない。『草枕』『倫敦塔』『幻影の盾』『虞美人草』などはこの意味で、夏目氏の傑作中の傑作である。景を寫せば忽ち其處に光彩陸離たる虹を現じ、情を寫せば忽ち幽艶愁色の姿を點ず、趣ある人物を點じ、趣ある會話をやる。平凡は氏の最も厭ふところである。『此作者は趣なき會話を嫌ふ。猜疑不和の世界に一點の精彩を着せざる毒舌は美しき筆に、心地よき春を紙に流す詩人の風流で

はない。……』と『虞美人草』の中でいつてゐるではないか。夏目氏は明治大正を通じての大名文家の一人である。而かもその特色は、このロマンティックな情趣を表現した作品に於て、特に著しくあらはれてゐる。

さてこのロマンティックな作品に就いて、吾々が注意すべきは、それが、ロマンティックな情懐の發露でありながら、何となく冷たい、例へば秋の夕暮の空氣のやうな感じを以て逼まるといふことである。それは何故であらうか。情熱的であるべきものが、凡て理知で支配され整理されてゐるからである。言ひかへれば、情熱そのまゝの發動は微塵だもない。凡ては理知に依つてつくられてゐる。調劑されてゐる。情熱までが、既に本來は情熱的であるべきロマンティックな作品すらが、斯樣に理知のいぶしをかけられてゐるのであるから、他の滑稽諧謔を主にしたもの、心理的なものがさうであるのは決して怪しむに足らぬ。

第二種の滑稽諧謔を主とした、『吾が輩は猫である』『坊つちやん』『野分』な

ども、煎じつめれば生活遊離の文學である。風塵をよそにした、人臭のない滑稽洒脱の別乾坤の表白こそ、『猫』の生命である。たゞしこゝでロマンティックの別天地と異るのは、俗世を對象に置かないと置くとの差異である。ロマンティックの別天地は全く俗と緣を切つた世界である。ところが、この滑稽洒脫の世界は俗世に三分の色目をつかひながら、これを無理にもぬりつぶして、有るを無きが如くに見做すのである。從つて嘲世罵俗は、この天地に於ける唯一無二の武器である。たゞ〳〵世を嘲りのめし、俗を罵りたほしてゐれば好いのである。さればこそ、禪坊主の出來そこなひのやうな世にそむいた連中が騷ぎ廻つてゐるのである。しかし『坊つちやん』になると趣は稍々異る。嘲世罵俗ではすませない。不義不德の世間人事をたゞ嘲り罵るだけではなく、これを打ちたほして、正義の御旗を人の世の巷にひるがへさうとする理想の熱が見えてゐる。とはいへそれは自覺した社會改造の信仰ではない。やんちや坊主の江戸つ子、勇み肌の一時的つけ景氣にすぎない。『野分』には、諷刺

家としての夏目漱石の特色があらはれてゐる。しかし夏目氏を以てユーモリストと解することは出來ても、諷刺家とはいへない。何となれば、諷刺家は、眞に社會に對し人生に對し熱烈火の如き反抗熱、革命熱がなければならぬからである。夏目氏にはさういふ反抗熱、革命熱は微塵もない。ユーモリストとは云ひ得ても、サチリストと呼ばれ得ぬ所以である。

さて以上二種類の作品に於ては、全く道義的觀念を何等差しはさむべき餘地を持つてゐないことに、注意せねばならぬ。全くノンモーラルの世界である。道德を超越した世界である。ところが、第三種類の作品になると、道德問題が這入つて來る。そして言ふまでもなく、その道德問題の中心をなすものは、他の凡ての藝術品に於けるが如く、男女關係のそれである。而かもその問題の解決は、きまつて舊道德の圈內を一步も出てゐない。『三四郎』の中の美禰子は、危險な瀨戶側まで三四郎を誘つて置いて逃げた。三四郎は別に何とも思はなかつた。美禰子も氣の毒とは思はなかつた。二人の戀愛は一時

たなびいた霞のやうに、やがてぽつと消えた。危地に入らんとして入り得なかつた爲めに、二人の關係は、事なくして、無事におさまつたのである。『それから』は明かに男女の三角關係である。しかしこゝにも圓滿な道德的解決が行はれてゐる。それは夫と戀人とを一時に持つてゐる女が重い病氣にかゝつてゐる、即ち死に依つてこんがらかつた問題がとかれてゐる。

更に『門』はどうであるか、これは友人の思つてゐた女を自分の妻君にした男の淋しさを描いたものであるが、都合の好い世間道德と利己主義とが働いて、先づ事なくすんで行く夫婦の生活に一段落をつけてゐる。だから『三四郎』も『それから』も『門』も何れ劣らず都合の好い小說である。きちんときまるところできまつてゐる小說である。

けれども『彼岸過迄』とか、『行人』とか、『心』とか、『明暗』などになると、不思議にも近代人の憂愁といふか、悲哀といふか、一種の、既成の道德や宗敎やでは解決の出來ない淋しさが漲つて來てゐる。もうそれ等になると、た

だ面白い小說ではない、愉快な小說ではない。重苦しい、何か人生とか、生活とか、人の一生とかいふものを考へさせずには置かぬ力がある。これは抑抑何を示すものであらうか。無意識的にか、意識的にか、夏目氏が自然派作家の如く、人生を眞面目に眞摯に考察するやうになつて來た結果を示すものと見ることに、さまで多くの誤算はあるまいと思ふ。吾々が問題とし苦悶とし懷疑とするものを夏目氏も漸くにして考へ出して來たのである。『行人』や『明暗』に於て、文學は終に氏の眞摯な生活表現となつたのである。『行人』の惱みは同時に吾々の惱みであり、『明暗』の利己心の暴露は同時に吾々の利己心の鏡である。『行人』は、知識人の知り得ざる惱みを、實に深刻に描き出してゐる。『明暗』は、近代人の特色なる利己心を、ゑぐるが如く刻むが如く、實に鮮かに浮き上げてゐる。問題としての觸れ方には殆ど遺憾がない。個人の問題、戀愛の問題、さういふものに直面して、たぢろがないところに、以前の漱石とは似もつかぬ特色がある。けれどもこれを一個の藝術品として見

れば、矢張り理知でこね上げたといふ遺憾がある。それを如何ともすることが出來ぬ。凡てがからくりの興味になつてゐる。

三　『行人』の意義と價値

漱石氏が、單に美を發揮すること、人生にふれない、所謂餘裕ある小說を書くこと、低徊趣味に惑溺してゐることにのみ滿足しないで、作品を通して痛切なる人生問題にふれ、眞の發揮に心を向け、人生の價値の改造に意を用ひるやうになつたことは、確かに大なる進步である。これを自然主義文學への妥協と見るのは當らない。氏自身の心に起つた自然なる人生觀の進化であり、推移である。蓋し、あれほど自然主義全盛時代に、自然派に反抗して來たものが、今更、自然主義が衰微の徵を示し、他に幾多の反動運動が起りかけて來た時にあたつて、わざ〳〵自然派に妥協する必要は毛頭なかつたのである。

茲では、自然主義的に傾いた漱石氏の作品の中でも、特に意義あるものと思はれる『行人』と『明暗』とをとつて、研究し、批判して、漱石氏の進化し推移した人生觀なり藝術觀なりを究めて見たいと思ふ。『行人』は、『友達』『兄』『歸つてから』『塵勞』の四篇から成立つてゐる可なり長い作品である。自分はといふ一人稱の形式を用ひてはゐるが、自分なる本篇の說話者長野二郎はと三人稱で書いても、作品の調子を亂すとは思はれぬほど、材題は客觀的である。即ち『自分』が、事件中の一角に立つてゐて、その兄の心理を描き出すといつた形である。

第一編の『友達』は、作品全體から見ると、最も非有機的なものである。しかし簡單に筋だけ述べて見る。二郎は、梅田の停車場につく早々、母の遠緣にあたり、以前彼の家の厄介になつてゐたことのある岡田夫婦の許へ俥を走らせた。一つには一緒に高野登りを約束した友達の三澤と落合ふ爲め、二つには母から賴まれた岡田の所謂『例の一件』即ち長野家に今厄介になつてゐる

お貞さんといふ女を岡田の口入れで佐野といふ大阪にゐる男へ緣づけるといふことについての用向きを果す爲めである。悉しくいへば、佐野の人品や性情を豫め調べることである。佐野には岡田を介して遇ひ、その結果役目も果したが、待つ三澤は豫定通りには來なかつた。幾日目かにたよりがあつたが、それには大阪の或る病院に入院してゐると知らせてあつた。二郎は岡田の家を引拂つて、病院の近くに宿を求め、毎日三澤を見舞つた。三澤は大して重くならずにすんだ。しかし病院には、彼と妙な因緣のある患者が一人ゐた。それは彼が始めて大阪へ着いた晩、友達と一緒に飮んだ席へ出た藝者で、彼が强ひて飮ましたのが元で、胃を惡くして入院したのであつた。彼はだからどうしても女の病氣の責任は自分にあると感じて、退院する時には、二郎に賴んで、岡本から金を借り、それを女に與へた。彼は何故その女に執着してゐたかといふに、その女が、以前自分に惚れてゐたらしいといふ精神病の出戻りの『娘さん』に似てゐたからである。三澤は退院すると東京へ歸つた。二

郎は東京から來る母と兄夫婦とを迎へるため後に殘つた。

『友達』はたゞこれだけのことを書いたにすぎない。而かも後の三篇に大した有機的關係がない。無理に有機的關係をつければ、後で二郎の兄が、女は不可解だと迷つて苦しむ心持を精神的な出戻り娘に反映さしてゐるところだけにすぎぬ。

第二編の『兄』からは愈々中心的興味になつて行く。母や兄夫婦が來阪したのは、一つにはお貞さんと佐野との結婚をまとめるため、二つにはいきぬきといふ意味があつた。で一方が片づくと、彼等は四人して和歌ノ浦へ行くことにした。二郎の兄は、學者であり、見識家であり、『其上詩人らしい純粹な氣質を持つて生れた好い男であつた。』けれども、可なり世間を知らない、我儘な孤獨な人でもあつた。家庭にあつても、矢張り學者で、夫たり、親たり、兄たるの情の所有者ではなかつた。その意味で、彼の妻は不幸であつた。二人の間には、愛情らしいものが更になかつた。妻も何時となしに冷淡な淋し

い女になつた。そして義弟の二郎に對し案外濕かな感情を示した。それに兄は不快に感じてゐた。和歌ノ浦へ來てから、兄は弟を促して、權現樣の境内に導いた。そして弟に『直はお前に惚れてるんぢやないか』と尋ねた。二郎はそんな筈がと答へた。兄は、女の心といふものはどうしても分らぬと嘆息した。そして『自分は女の容貌に滿足する人を見ると羨ましい。女の肉に滿足する人を見ても羨ましい。自分はどうあつても女の靈といふか魂といふか、所謂スピリットを攫まなければ滿足が出來ない。それだからどうしても自分には戀愛事件が起らない』といふメレディスの言葉を引いて、『おれが靈も魂も所謂スピリットを攫まない女と結婚してゐる事丈は慥かだ。』といふ。

その日は何事もなくすんだが、その翌日の夕方、兄は又弟を誘つて、今度は紀三井寺を連れて行き、そこで弟に自分の妻の節操をためしてくれと頼んだ。弟はそんな馬鹿な眞似は出來ぬと斷つた。では晝間二人で和歌山へ行つて、妻の氣持を聞いて見てくれと頼んだ。弟はそれだけは仕方なしに引き受

けた。

愈々二人は和歌山へ出掛けた。嫂は非常に快活に振舞つた。弟は嫂の心を探るべく種々努力したが、その甲斐がなかつた。そしてたゞ嫂から快い感じを受取つた。二人が或る料理屋で飯をすましてゐると、何時の間にか空模様が變つて、烈しい風が吹き出し、雨が威勢よく降つて來た。全くの暴風雨である。やがて電信が不通になる、交通機關が絶える、そして到頭和歌山の或る宿屋に泊らなければならなくなつた。電燈の消えた宿屋の室に、二人は對座した。嫂は而かもその折を見て化粧することを忘れなかつた、暴風雨に包まれ、兄や母のことを思ひ、嫂と一つ室に寢苦しい夜を、弟は明かした。その翌朝、急いで二人は歸つた。弟は兄に報ずべき何物も持つてゐなかつた。兄は不機嫌だつた。和歌ノ浦も嵐はひどく、それに兄の不氣嫌がどう破裂しまいものでもないことを豫知した。母の主張で皆は急いで和歌ノ浦を引き上げることにした。これが第二編『兄』である。讀者はこゝで、始めて作者が何

を取扱はうとしてゐるかに、略ゝ見當がつくであらう。婦人問題の一つである所謂三角關係の問題である。三角關係でも、一人の女を中心にした兄弟の愛を問題にしたものである。これは決して新しい問題ではない。古くはダンテの『神曲』の中にある有名なパオロとフランチェスカの一齣にあらはされてゐる。又ダンヌンチョは、これを近代的に取扱つて『フランチェスカ』を書いてゐる。又メーテルリンクの『ペリアスとメリサンド』『アグラベーヌとセリセット』も矢張り同じ題材を取扱つた名高い作品である。又ハウプトマンの『寂しき人々』、イプセンの『ロスメルス・ホルムス』『死より醒めなば』なども題材の上からは同一系統に屬すべきものである。しかし、この中でも二人の兄弟が一人の女を同時に愛するといふ筋のものは、『フランチェスカ』と『ペリアスとメリサンド』とである。かういふ題材は西洋でも珍らしいが、日本の文學になると、更に珍らしいやうに思はれる。日本にも三角關係を扱つたものは、『求女塚傳說』の昔から、近松西鶴の德川文學に可なり多いが、兄、弟、女を角の頂點とす

る三角關係は殆どないといつてよい。眞にそれが痛切な問題として取扱はれるやうになつたのは、自然主義文學が勃興してからのやうに思はれる。小栗風葉の『凉炎』といふ短編は、明かにこの題材を取扱つたものと記憶する。田山花袋の作にも同一系統のものがあつたと思ふ。

それは兎に角題材としては、これは可なり新しい、未開地のものに屬する。而かも道德的立場からいへば、烈しい非難に値する題材である。それを道德家なる漱石氏が取扱つたといふことは確かに氏の道德的進步である。同時に人生觀上の進步である。しかし何處までそれが徹底的に取扱はれたかは自づから別問題で、更に第三編、第四編を讀んでからでなくては判斷することが出來ない。

ところで、第三編『歸つてから』になると、兄は、益々疑ひ深い人となり、弟と妻とに對して猜疑の眼を見張るのであつた。兄はパオロとフランチェスカの話を始めて、『二郎、何故肝心な夫の名を世間が忘れてパオロとフランチェス

ガ丈覺えてゐるのか。その譯を知つてゐるか』とたづねる時があつた。そして彼はかう說明した。『己は斯う解釋する。人間の作つた夫婦といふ關係よりも、自然が醸した戀愛の方が、實際神聖だから、それで時を經るに從つて、狹い社會の作つた窮屈な道德を脫ぎ捨てて、大きな自然の法則を嘆美する聲丈が、我々の耳を刺激するやうに殘るのではなからうか。尤も其當時はみんな道德に加勢する。二人のやうな關係を不義だと云つて咎める。然しそれは其事件の起つた瞬間を治める爲の道義に驅られた云はゞ通り雨のやうなもので、後へ殘るのは何うしても靑天と白日、卽ちパオロとフランチェスカさ。何うだ左右は思はんかね。』兄は弟を疑ることをやめなかつた。弟は終にやりきれなくなつて、他所へ下宿することにした。そして時々家へ歸ることがあつても、兄には顏を合せなかつた。兄は益々不氣嫌になつて行つた。

思ひがけない時に、嫂がひよつくり二郎の下宿へ尋ねて行つた。これが第四編の『塵勞』の始めである。嫂はいかにもなれ〳〵しく、而かも淋しい心の

訴へをした。その時二郎は測るべからざる女性の強さを電氣のやうに感じたのである。嫂は謎を殘して歸つて行つた。兄の樣子は益々險惡になるばかりで、神經に多少異常を呈して來たとさへいはれるやうになつた。多少事情を知つてゐる二郎の友達の三澤は、二郎に早く結婚しろ、さうすれば兄さんも心が落着くだらうといつて、或る女と暗に二郎を見合ひさせた。しかしその話は進まなかつた。その代りに二郎は兄の同僚に賴んで兄を旅行させるやうに取計らつた。そしてその同僚に、兄の旅先での狀態を悉しく知らしてくれと賴んだ。旅先からはその同僚から長い手紙が來た。それには、始めのうちは、兄は少しも落着かないで困まつたが、段々神經も穩かになつて、『何んな人の所へ行かうと、嫁に行けば、女は夫のために邪になるのだ。さういふ僕が既に僕の妻を何の位惡くしたか分らない。自分が惡くした妻から、幸福を求めるのは押しが强過ぎるぢやないか。幸福は嫁に行つて天眞を損なはれた女からは要求出來るものぢやないよ。』といふやうにさへなつたと知らせてあ

つた。『塵勞』はこゝで終つてゐる。同時に『行人』の終りである。

作者は、三角關係とはつきり斷つてはゐないが、問題の中心を其處に置いたことは明白である。しかしその問題に何等解決を與へてゐない、未解決のまゝである。尤も作者は始めから、嫂と弟との氣持は、ぼかして、はつきり描き出してはゐないのであるから、解決をこの作に求めるのは、間違ひであらう。けれども、全體として見るとき、兄の心理が隨分よく生彩に浮び上つてゐるのに較べて、嫂や弟の氣持が案外はつきりしてゐないので、何となく齒がゆい感じがする。わけても弟の行動や愛情や氣分に對して作者が甚だ曖昧な態度を取つてゐるのが、物足りなく思はれる。弟が嫂に對して愛を感じてゐるのかどうか、又そんなことには頓着なく行動してゐるのか、それに對する作者の見方がはつきりしてゐない。若し弟に本當に兄を思ふ氣持があるならば、そして嫂に對して愛を感じてゐないならば、嫂が彼に心を傾けて來ても尠くともさういふ素振りを見せても、それに對して最つと斷乎たる處置

が出來る筈だ。そして作者がそこに力點を置けば、あの作の趣は大分變つたであらう。嫂が弟に心を傾けてゐることは明かである。けれども弟が果してそれに對してどれだけ眞面目になつてゐるか、それは甚だ曖昧である。では思つてゐるとも、思つてゐないともつかぬ態度をとつて、兄を徒に苦しめてゐるのかといふに、さうでもない。兄のことも心配してゐる、兄の不氣嫌に基く家庭の憂鬱も氣にしてゐる。それでは兄にはすまないが、又家庭を暗くすることは氣になるが、嫂を思はずにはゐられないといふ複雑な弟の氣持をあらはしてゐるかといふに、それもしてゐない。要するに弟の性格、感情、氣持は不透明で、作者は、その不透明をそのまゝに描いてゐる。而かもその不透明は不自然な不透明である。あの場合に於て、兄を苦しめてゐるのは、嫂にもその責任の一端はかゝつて存してゐるが、大部分自分であると氣がつかぬ筈はない。若し氣がつかぬとすれば、あの弟は馬鹿でなければならぬ。けれども彼は決して馬鹿ではない。馬鹿でなくて氣がつかないといふのは、

作者が要するにさういふ風に彼を作り上げたからである。つまり不自然につくり上げたのである。

既に弟が嫂を思つてゐるのでもない、思つてゐないのでもない。さうかといつてどつちともつかぬ自分自身にも分らぬ氣持を持つてゐるのでもない――さういふ漠然とした性格に描かれてゐるために、兄の苦悶が甚だしくつくりものにされてゐる。作者は弟を傀儡にして、兄を操つてゐるのではないか。しかし、兄の苦悶をたゞそれだけとして見れば、これが一番よく刻銘に描かれてゐる。近代人の惱みの一面はかくもあらうと思はれる程度に、讀者の腦裡に刻み込まれずにはゐない。學問や知識のみがあつて、世間を知らない、冷たい書齋の人、さういふ性格を作者は殆ど遺憾なく表現してゐる。

女は謎といふ思想は夏目漱石の女性觀の根底をなす思想ではあるまいか。この思想は早く既に『草枕』の中に見えてゐる。あの志保田の娘は謎の女である。それから三四郎にもその女性觀がある。美禰子は、三四郎にとつては確

かに謎の女である。それと同時に『行人』の直子は二郎の兄にとつても、二郎にとつてさへも謎の女であつた。一體に漱石氏は、女を俗物にするか、謎にするか乃至理想にするか、どつちかであつた。『猫』の苦沙彌先生の妻君、『野分』の道野先生の妻君、『それから』の代助の友人の妻君、『門』の宗助の妻君等は何れも前者に屬し、『虞美人草』の藤尾、『三四郎』の美禰子、『草枕』の志保田の娘、『行人』の直子、『明暗』のお延は後者に屬する。而かも俗人にして置きながらも、必ず何かの奇蹟を演ぜしめずには置かない。女は謎といふ思想が漱石氏の女性觀を支配する根底をなしてゐるといつたのは、この爲めである。

『行人』は、これを全體として見ると、失敗の作といはねばならぬ。この作に依つて吾々は心を樂しまされもしなければ、さうかといつて人間の惱みを深く考へさせられもしない。何となく作者に餘計な道をあつちでもない、こつちでもないと引つ張り廻はされて、その結果元のところへ返され、目的地

へ行かずにゐるやうな不滿を感ずる。それは一體何故かと考へて見るに、作者は人生に對し眞摯な意慾を持つてゐないからではないかと思はれる。熱烈な要求を持つてゐないからではないかと思はれる。若し假りに作者にさういふ意慾、さういふ要求があつたなら、あゝまで三角關係をカラクリ細工にはしなかつたであらうし、あゝまで弟の性格を不徹底にはしなかつたであらう。要するに『行人』は三角關係の机上遊戲である。而かも甚だ面白くない遊戲である。美を感ぜしめず、道德を敎へず、人生の眞を示さざる遊戲である。

四　『明暗』の利己心解剖

『明暗』は『行人』よりは更に一步を進めて自然主義的作風に接したものといはれた漱石氏の最後の作である。氏は終に筆半ばにして、大正五年十二月九日突如としてこの世を去つた。『明暗』の眞の佳境は寧ろ今後にあるのではなからうかと思はれるほどに、この作は未完成のものである。しかし何を書か

うとしたものであるかは凡そ見當がつく。それは利己心の解剖である。近代人の誰もが心底に持つてゐるが、しかしいろ〳〵な纏衣でかくしてゐる醜い汚ない利己心をこれほど深刻にゑぐり出した作は、自然派の作品にさへ餘りないといはれた。

『明暗』は主人公津田を中心にして、その細君お延、その妹のお秀、その叔父、その友人小林などの交渉關係から生ずる平凡な會社員のエゴイスティックな心理を描き出したものに他ならない。嘗つて「早稲田文學」で明暗の批評をのせたことがある。その中で相馬御風はいつた。『N――兄。君はこの作を讀んで何を見、何を得られたか知りませんが、僕は日々夜々に僕等の心を暗くし、弱くし、硬くし、貧しくし、不安にし、濁らせてゐるセルフィッシネスを、惡いイゴイズムをこれ位痛刻に、これくらゐ嚴密にえぐり出された作品に、近頃全く接しなかつたやうに思ひます。』更に本間久雄氏も、略〻相馬と同じ立場から次のやうにいつてゐる。

『明暗は未完のまゝですから、全體として作者はどういふところを覘つたのかわかりません。たゞ私が一番この作から興味を感じた點は、そこには、吾々――今少し限つて云へば私――といふ人間の內面の姿、而もそれは醜い、汚らはしい人間性の一面をまざ〳〵と描かれてあるといふ點であります。事實私は、この位深刻に私達の醜くい、汚ない一面を鋭く描いた小說を近頃見たことはありません。』かう本間氏は推奬の言葉を述べた後で、更にその悉しい說明に及んでゐる。

『どんな點が醜く汚ないか。それは外でもない。作中人物の多くに見る利己と僞善と虛構とです。尤も中には小林とか藤井の叔父とかいふ例外もないではありませんが、主人公の津田を始め、津田の妻君のお延、妹のお秀、その他の人々の生活は全くこの利己と僞善と虛構との外何物もないやうに思はれます。』

而かもこの虛構と利己と僞善とは本間氏もいはれてゐる通り、主人公津田

に於て最も甚だしい。かういふ極端な個人主義的な、僞善的な主人公を中心として、幾多の小個人主義者が勝手に玉の如くころがり合つてゐる生活、それが『明暗』に描き出された人間生活である。そこには眞實の光もなければ、溫かい淚もない。

さういふ人間なり、生活なりを、作者は一絲亂れざる整然たる調子で描き出してゐる。特に心理解剖に作者は非常な努力を拂つたもののやうに思はれる。けれども作者の筆は果して人間の心理を生かして描いてゐるかどうか。卽ち生きた有機的なものとして描いてゐるかどうか。描いてある生活が眞實に徹してゐるかどうか。それは非常な問題である。あれほど刻銘に醜い人間の心理を描きながら、あれほど深刻に人間の虛僞を剔りながら、逼つて來る力が案外に少い。つくりものだといふ感じがする。この點に就いては、同じく「早稻田文學」誌上で『明暗』の批評をした相馬泰三と中村星湖との言にきくべきものがある。相馬泰三はいふ。

『「明暗」の中に、私は社會、人生に對する多くの意見を讀み、諸々の觀察に接した。また、巧みな多種の心理解剖を見せられた。隨所に、適度な氣品に粉飾された警句や諧謔や詩題やをも味つた。が、何處にも眞物の人間を遂に見出すことが出來なかつた。「明暗」の中に出て來る諸人物は、必ずしも凡てが死んでゐると云へないかも知れない。しかし、彼等は彼等自身自由に呼吸し、思ふまゝに勝手な振舞の出來る獨立した人間では決してない。卽ち作者によつて、その喉の根を締められてゐる、そしてある定められた時に呼吸を許されてゐるやうな、作り上げられた人間である。ゼンマイ仕掛の人形のやうな人物である。作者が一々あやつつてこそ動くが、その他の場合では死んでゐるのである。要するに動いた生きた人間を描いてゐない、生きた本當の心理を掴んでゐないといふことになる。』　更に中村星湖の說明に耳を傾けよう。

『……私は例の夏目式だと思つた。理窟つぽい、といふよりは、ブッキッシュの心

理的說明が第一である。克明な綺麗な物の描寫が第二である。人物と人物との會話が誰と誰との場合であつても、いつも機智と諧謔とに富んだ禪坊主の問答のやうなのが第三である。すべてに低徊的なのが第四である。一絲亂れずといふ取りかたづけた氣の利いた文章が第五である。モデルがあるともいふし、無いともいふが、また作者自身の色んな方面を色んな人物に具象されたのだとも言ふが、實際は生きてゐさうもない個性がハッキリしてゐるらしくて案外類形的な人物が、ちやうど好い時に出て來て、ちやうど好い時に引つ込んで行くのが第六である。』

更に中村氏は進んでいふ。『破綻は無いにしても生々の氣に缺けてゐる。智識の遊戲、神經の葛藤はあつても、感情の活動はない。………』と。これは獨り『明暗』のみに限らず、漱石氏の作風を批評して遺憾のない言葉である。

これを要するに、作者は題材の點に於いては、人生や實生活に接近して來たが、それに對する態度は、矢張り廻避的であり、遊戲的であり、低徊的で

あり、餘裕派式である。たゞ利己心を知的に解剖して見せただけである。それに對する作者の批評がない、解釋がない。氏の『則天去私』といふ人生觀上のモットーからすれば、當然あゝいふ利己心や僞善や虛構を郤けることに傾くべきであらうが、『明暗』にはそこまでの積極的意圖が見えない。利己心や虛構や僞善を克明に解剖しながら、眞實に心の底から訴へる力に乏しいのは全くこの爲めに他ならない。

五　夏目漱石氏の位置

漱石氏は、その作品を通して終に人生に呼びかける藝術家ではなかつた。人生に何等かの希望をつなぎ、何等かの理想をかけ、何等かの意圖を働かして、これに價値の改造を加へようとする近代の偉大な藝術家の力を持つた作家ではなかつた。飽くまでも現代の生活に面白味を加へて、その千變萬化の姿態を紙上に轉がして眺め樂しむ樂觀的傾向の藝術家であつた。自然派作家

には到底なり得ない人であつた。しかし人生の闘士としてではなく、藝術家としての修養に於いて、技巧の點に於いて、文章の點に於いては、氏は古今獨歩であつた。それ等の點では明治大正を通じて、恐らく氏の右に出づるものはあるまい。特に『草枕』『虞美人草』の名文は長く斯道の模範として後世までも殘るであらう。

單に文學藝術を享樂の資料と考へてゐる者、藝術は單に美を創造しさへすればよいと考へてゐる者、又文學藝術を消閑の具と心得てゐる者に取つては、夏目氏の作品位愉快で面白く氣持のよいものはあるまい。笑はしてくれる、美を與へてくれる、喜ばしてくれる。在來の藝術觀からすれば、凡ての條件を最も完全に最も圓滿に具有してゐる。面白い讀物の性質を持つてゐることはその一つである。名文で而かも平易暢達であることはその二である。奇警な觀察、妙味ある滑稽諧謔はその三である。知識を多方面に展開して興趣を豐かならしめてゐることはその四である。從つてどんなに長いものでも、必

ず讀者をあきさせることがない。それにも拘らず、藝術家としての第一義的な根本性質を缺いてゐたやうに思ふ。第二義、第三義的の藝術家の持つべきものは他の作家にも增して遙かに多く持つてゐたが、第一義性を持つてゐなかつたといふことは漱石氏のフェータルな缺陷ではなからうか。

その第一義性とは何か。人生に對する深い愛である。人生に對する眞面目な要求である、人生に對する遠大な理想である、人生に對する價値改造の意慾である。夏目氏は、これ等の愛なり、要求なり、理想なり、意慾なりを殆ど持合せてゐなかつた。たとひ持合せてゐたにせよ、それは最小限度に於いてゞあつた。さういふ愛や要求や理想や意慾やを持つべく、氏は餘りに東洋人であつた。東洋的哲學の修養に浸りすぎてゐた。超脫の境地こそ氏の安全地帶であつた。うるさい世の中から脫して、しばらくでも靜かな時を永遠に生きようとするのが氏の理想であつた。そして自分だけは、濁りにしまず、渦卷にまき込まれず、塵に明け塵に暮れて行く俗世間を高い所から、硝子戶

の中から、靜かに眺めて、或は嘲笑して見たり、或は默殺して見たり、或は無下に握りつぶして喜んだりするのであつた。

決して手を出して抱きすくめてやることもしなければ、情のある溫かい言葉をかけてやることもしないし、又叱咤して鼓舞激勵してやることもなければ、道を敎へてやるといふ親切も示さなかつた。嘗つて生田長江は、夏目漱石を目して『あたゝかみ』又は『若々しさ』のない作家だといつたことがある。生田氏はいふ。

『漱石氏の如きは、あまりに早く若々しさをなくしたといふよりもはじめからして年寄じみた人ではなかつたらうか。作品の上にも、議論の上にも、多感なる若々しさが甚だ足りない。わか〳〵しさの火がないならば老熟の鐵鎚も共の用をなさぬ。經驗の含蓄をして複雜深刻ならしめることが出來なくなつて來る。斯う見て來ると竟に漱石氏を以て經驗乏しき人となすことの理由なきにあらざるを思ふ。特にそのすばらしき學問に對しては非常に遜色ある

經驗であると思ふ。

『すばらしき學問に對して非常に遜色のある經驗は藝術家としての漱石氏の第一の弱味でなければならぬ。』

『あたゝかみ』『若々しさ』は永遠に人生を豐富ならしめ力あらしめ生甲斐あらしめるものである。ところが漱石氏は始めから、それを缺いてゐた。ロマンティックな作風と云はれてゐる『草枕』や『虞美人草』にさへ『若々しさ』や『あたかみ』は認められない。仙骨味はあつても、純情のほとばしりともいふべきものが更にない。さういへば、夏目氏位、センティメンタルな要素を持たない作家も珍らしい。

かく、『あたゝかみ』を持たず、『若々しさ』を持たず、更に『センティメンタリズム』を持たずして、人生を超越し、人の世を時に笑ひ、時に嘲り、時に默殺してゐた夏目氏は、果してそれでは自己をどれ丈しつかり摑んでゐたであらうか。東洋流の超俗解脫の士には往々にして俗世からは緣をたち切つて

も、自己そのものからは解脫しきれず、超越しきれないで、寧ろ自己そのものに眼をふさいでゐる場合がある。超俗解脫しようとする自己そのものの本質に少しも徹することなしに平然たる態度を持するのである。夏目氏にもこれに似た態度がなかつたとは決していへない。近代人の苦惱は自己を知らんとするところから起つて來る。自己の存在に對して確實な證劵を握りしめた時、近代人のほこりがあり勝利がある。自己の存在に對して確實な證劵を掴み得ずして、悶え苦しむところに近代的苦悶のあらはれがある。漱石氏にはその苦悶がない、ましてそのほこりや勝利に於いてをやである。その苦悶があり、ほこりや勝利に對する渇望があればこそ、世間や實社會やが痛切な問題の對象となつて來る。笑つたり、嘲つたり、默殺したりしてはゐられない筈である。この意味に於て夏目漱石は近代人ではない。

自己を知ることは自己を擴大し、延長することである。そしてその擴大、その延長に都合の惡い一切の外圍や環境や社會は、この熱烈な自己擴張、自

己延長の欲望の前にはその元のまゝの姿をとゞめて置く譯には行かない。當然破壞されるか改造されねばならぬ。偶像破壞は自然派文學のモットーの一つであつた。社會改造は、現下文壇の一勢力で、やがては支配勢力たらんとするプロレタリア文學のモットーである。ところが漱石氏には、その偶像破壞の信念もなければ、社會改造の熱情もない。加藤朝鳥は嘗つて、夏目氏を偶像の握りつぶしやだといつたことがある。或はさうかも知れない。尠くとも偶像の破壞では斷じてない。尙ほ又現在の社會生活から最大多量の享樂を得る手段を講ずる功利主義者ではあつても、最大多量の享樂を最大多數の者に分ち與へようとする合理的社會を夢見たことはなかつた。漱石氏は斯くして遂に自ら塵をはらひ、醜きを美しさにかへて、道を歩く旅行者にあらずして、眼をつぶつて塵をよけ醜くさを見まいとする人であつた。

とはいへ、夏目漱石は、明治大正の文壇にあつては確かに一異彩であり、一巨將であつた。人各々見るところを異にするから一概にはいへないが、若

しかりに私をして明治大正を通じての大文豪を擧げしめるならば、二葉亭、獨歩、一葉は第一位に來るであらう。次にはと問はれゝば逍遙、鷗外兩氏と共に漱石氏を擧げるであらう。蓋し二葉亭、獨歩、一葉は生活と藝術とを別別には見なかつた。生活に對する一種の熱情が、やがて藝術そのものであつた。無限に生命の延長擴大を夢見るものに取つて永遠に價値ある所以である。鷗外、漱石二氏の藝術は生活から遊離した、從つて生活意志のない藝術だとも言へる。從つて未來に生をつなぐ者にはさまで有難くない。

六　森鷗外氏の藝術

自然主義の圏外に立つて、種々の意味で、漱石と相並んで問題になつたのは、森鷗外である。自然主義の正系から見れば、氏の活動は、明かに反動勢力であつたが、自然主義全盛當時にも、相當文藝界に重きをなし、自然主義の衰退期になつてからは、特に異色のある存在として、常に注目の的となつ

てゐた。

茲では悉しい森鷗外の研究をする餘白が與へられてゐない。ただ氏の藝術の輪廓だけを示すにとゞめて置く。

森鷗外は徹頭徹尾、理智の人、科學的頭腦の所有者である。從つて普通の意味に於いては、藝術家肌の人とは決していへない。その點は、夏目漱石以上である。如何に、ロマンティックな題材を捉へて來ても、出來上つた作品の與へる印象は、決してチ、アンの繪が與へるやうな妖艶とか豊醇とかいふやうなそれではなくて、冷たい彫刻の味ひである。

氏の初期の作品『うたかたの記』(明治二十二年、鷗外の主宰してゐた雜誌「しがらみ草紙」に發表)や、『舞姬』(明治二十二年、雜誌「國民の友」に所載)は、題材內容は明かにロマンティックなものであるに拘らず、讀者に與へる印象は冷たく固い何物かである。何處までも秋の朝といつたやうな感じである。既にロマンティック時代に書いたものが、かゝる特色を持つてゐるのであるか

ら、それ以後の作品が益々枯淡な、知的な風格を具へるやうになつたことはいふまでもない。夏目漱石と相並んで、若しくはそれ以上に理智主義の作家といはれてよい所以である。

理智の人、知識的頭腦の所有者であるだけに、氏は創作の傍、文藝評論の方面にも筆を執つて、目醒ましい活躍を示した。特に、明治二十年以後の、新興日本文學の建設には、該博な知識を以て外國文學の輸入紹介につとめて、貢献する所が、決して僅少でなかつた。西歐の文學作品の紹介もすれば、文藝評論、文學論、進んでは深遠な美學、哲學の輸入にも、これ務めるといふ風であつた。鷗外氏が日本の文學界に貢献した點からいへば、寧ろこの方面であるとさへ見られるかも知れない。評論界は一時、「早稻田文學」の坪內小羊氏對「しがらみ草紙」の鷗外漁氏の論戰場となつたことさへある。就中、理想論、沒理想論の論爭、歷史劇に關する論爭等は、視聽をそばだゝせるに充分なるものであつた。

自然主義が勃興する少し前頃から、鷗外氏は評論の筆を略々收めた形で、主として創作や飜譯に沒頭した。或る意味では、自然主義の紹介者であるに拘らず、氏は、自然主義の文學に反對しないまでも、これを冷眼視した。氏が自然主義文學をどう見てゐたか、今その一例を擧げて見ると、『自然主義を論じて我が脚本作家に及ぶ』（明治四十年「演藝畫報」六月號所載）の一文中に次の如く述べてゐる。

『自然主義又の名寫實主義なるもの、近時著しく我が文藝界を風靡し、小說と言はず、繪畫といはず、作家は一に之を標榜して、努めて時潮に投ぜん事を庶幾しつつあり。…………然れども退いて仔細に考ふるに、自然主義の通弊として專ら客觀の對象に拘はるが爲に、悲しい哉作中主觀の捉ふべき無く、文藝としては飽き足らぬ節多し。…………予は自然主義を藝術と睽離せるものとまでは按はざれど、要するに其効果は積極的に非ずして、寧ろ消極的なり。譬へば病者に與ふる藥の如く、人病まざれば藥の用無し、

之を用ひるは、たまたま其壯健ならざるが故なり。自然主義は理想に非ず、唯餘りにロオマンチックに執着せる文藝界に投じたる藥なり。滋養物に非ず。自然主義を以て藝術の理想と爲すは、尙藥を以て滋養物と爲すに同じ。妥當を缺くも亦甚しからむや。』

自然主義に對する鷗外氏の考へは、略々以上につきる。では作家は如何なる主義を執ればよいか。それに對して、氏は同じく前記の一文中に、『主義は作家にとりて無用なり。固より作家が自ら主義を立つべきに非ず。要はただ時代の思潮を洞見し、人情の機微を捉へて、作物の上に自己の本領を發揮し得れば十分なり。』と述べてゐる。これはありふれた在來の抽象的文學觀である。何處へも當篏まらない點はないと同時に、何處へもぴつたりとは當篏まらない一般論である。ところが、自然主義が萬能となるや、鷗外氏は、『あそび』(明治四十三年「三田文學」所載)といふやうな作品を發表して、自然主義作家を多少皮肉くり、合せて自家の藝術觀、人生觀を具體的に仄めかした。

この作品は、官吏であり、文學者でもある木村といふ男が、寂しく見える「獨寢の閨」から夏の初の或る朝起き出してから、役所へ行つて、晝まで務め、そこで持つて行つた辨當を喰つて歸宅するまでの日常茶飯事を書いたものに過ぎない。けれどもこの主人公には、一つの哲學がある。仕事は凡てあそびの氣持でやらなければならない。藝術があそびなら仕事もあそびである。何をするにも面白く輕々と片付けるのが好い。あそびにも面白いのと面白くないのがある。役所の仕事の如きは面白くないあそびである。だがどんな仕事をも面白いあそびにするのが、理想であらう。――これが木村の哲學である。何故、かういふ哲學を木村に抱かせたのか。作者は當時の自然主義作家に多少あてつけたのである。卽ち自然主義の作家は、口を開けば、人生は嚴肅だ、眞面目だ、あそびではない、眞劍だ、木刀ではない、それ故、藝術も亦た嚴肅で、眞面目で、眞劍でなければならぬと主張してゐた。鷗外氏は、これに對し、何も藝術や人生は、そんな風に何時もいきり立つてゐるものでなくつ

たつて差支へあるまい、まあこんな生活もあるよ、こんな藝術もあるよといふ心構へで『あそび』を世間に發表したのであらう。漱石氏の低徊趣味と並んで、鷗外氏のあそびが終に主義になつて、文藝界で兎角の問題になつたのは、ここに起因するのである。

又、自然派作家のやうに、文藝や人生を窮屈に考へないでもよからうといふ考へを、象徴的といふよりも寓意的に表はした作品に、『杯』(明治四十三年「中央公論」所載)といふのがある。女の子たちが七人、清冽の泉へ、水を飲みに來る。彼等は、銘々、自然といふ銘のある銀の杯で、泉を汲む。そこへ第八の女の子が矢張り水を飲みに來る。但し持つてゐる杯は、陶器か何だかよく分らない熔巖色のものである。皆が冷かすが、第八の少女は、『わたくしの杯は大きくはございません。わたくしはわたくしの杯で戴きます。』といつて、『數滴の泉を汲んで微かに赤い脣を潤した。』

つまりこの作品では、何も同じものばかりでなく、こんな變つた杯があつ

ても好いではないか。立派に用は辨じてゐるぢやないか。自然主義の作品ばかり、文藝でもあるまいといふ意味が窺はれる。鷗外氏は斯く自然主義を冷眼視しながら、輕妙洒脫な短篇小說、新しい歷史小說、史劇の多くを發表した。それが、新理智主義の土臺石となつたことはいふまでもない。

改訂明治文學十二講　終

明治文學年表

明治元年

○明治と改元、江戸を東京と改稱す○同時に東京に遷都す○昌平學校を復興す○假名垣魯文の「假名讀八犬傳」發賣○「太政官日誌」「中外新聞」「江湖新聞」「もしほ草」等の諸新聞發刊さる○五箇條の御誓文發せらる○内田魯庵、山田美妙、北村透谷、渡邊霞亭、德富蘆花等生る○寺門靜軒、笠亭仙果等逝く

二年

○宮中歌御會復興○出版條令、新聞條例公布○府縣に小學校を設く○開成所、醫學校、昌平校を合して大學校とす○藩籍奉還○「平野國臣歌集」出づ○福澤諭吉の「世界國盡」「西洋事情」(續篇)出づ○大町桂月、川上眉山生る○橫井小楠逝く

三年

○中村正直譯「西國立志篇」同人譯ミルの「自由之理」出づ○魯文の「西洋道中膝栗毛」初篇「娼妓評判記」八冊出づ○都下に中學校を置く○松川棟庵譯「地學事始」出づ○松居松翁、金子筑水、戶川秋骨、馬場孤蝶、大橋乙羽、巖谷小波、伊原靑々園、菊地幽芳、堺利彥等生る

四年

○「橫濱每日新聞」「新聞雜誌」等發刊○木村黑川榊原篤「語彙」出づ。○魯文の「安愚樂鍋」初篇、「松飾德若譚」六篇出づ○田山花袋、德田秋聲、高山樗牛、島村抱月、土井晚翠等生る

五年

○「東京日日新聞」「郵便報知」發刊○東京に女學校を設く○中村正直同人社を起す○福澤諭吉の「學問の勸め」出づ○萬亭應賀の「釋迦八相倭文庫」(五十九、六十)出づ○魯文の「胡瓜遣」「倭國字西洋文庫」出づ○齋藤丁庵譯「魯敏孫全傳」二册出づ○横濱に始めてキリスト教會堂建つ○東京に圖書館を開く○島崎藤村、樋口一葉、岡本綺堂等生る

六年

○森有禮、西周等明六社を結ぶ○東京外國語學校を起す○征韓論起る○復讐を嚴禁す○渡邊温譯「伊蘇普物語」出づ○諭吉の「文字の教」出づ○二世春水の「時代加賀美」(四十――四十五)出づ○柳北の「柳橋新誌」(第一篇)出づ○慶賀の「虫類大議論」出づ○加藤祐一の「文明開化」出づ○泉鏡花、綱島梁川、東儀鐵笛、與謝野寛等生る

七年

○明六社より「明六社雜誌」發刊○服部撫松の「東京新繁昌記」(初篇)出づ○「朝野新聞」發刊、柳北入社す○柳北の「柳橋新誌」二篇出づ○「讀賣新聞」鈴木田正雄により發刊○西周の「百一新論」「ローマ字採用論」等出づ○應賀「近世あきれ幕」出づ○五十嵐力、河井酔茗、上司小劍、高濱虚子、佐藤紅緑等生る

八年

○「明六社雜誌」廢刊○雜誌「洋々社談」發刊○松村春輔の「復古夢物語」「近世櫻田紀聞」出づ○「かなよみ」「平假名繪入新聞」共に發刊○「新聞雜誌」改題「東京曙新聞」○永峰秀樹譯「暴夜物語」二篇○新聞條令發布○新島襄京都に同志社を建つ○小栗風葉、長谷川如是閑、野口米次郎等生る

九年

○春輔の「春雨文庫」出づ○箕浦勝人「家庭叢談」發行○撫松の「東京新誌」發刊○同人社より「同人社文學雜誌」發刊○キリスト教宣傳の結社熊本バンド成る○長谷川天溪、近松秋江、蒲原有明、尾上柴舟、島木赤彦等

生る

十年

大學校を東京大學と改稱○加藤櫻老の「萬國歌盡」出づ○柳北の「花月新誌」創刊○稻垣銀治譯「寶淫沿革史」三册出づ○「團々珍聞」「頴才新誌」發刊○西南の役起る○中村吉藏、沼波瓊音、窪田空穗等生る

十一年

○板垣等自由民權論を主唱す○丹羽純一郎譯「花柳春話」（原作者リットン）初編出づ○川島忠之助譯「八十日間世界一週」（ジュール・ヴエルヌ原作）出づ○眞山青果、千葉龜雄、與謝野晶子、有島武郎、昇曙夢等生る○大槻磐溪逝く

十二年

○國會開設の請願建白出づ○教育令を公布す○「大阪朝日新聞」發刊○「歌舞伎新報」創刊○假名垣魯文の「高橋於傳夜叉譚」岡本起泉の「島田一郎梅雨日記」等出づ○菊地大麓の「修辭及華文」出づ○正宗白鳥、前田晁永井荷風、西村眞次、山岸光宣、長谷川時雨等生る

十三年

○「六合雜誌」「東京學士院會雜誌」發刊○橋顯三（實は坪内逍遙）譯の「春風情話」出づ○吉江喬松、厨川白村田中貢太郎、高須梅溪、武林夢想庵等生る

十四年

○國會開設の大詔發せらる○板垣等自由黨を結ぶ○中江兆民の「政理叢談」「東洋學藝雜誌」等發刊○「小學唱歌集」（初篇）出づ○杉森孝次郎、森田草平等生る

十五年

○板垣退助岐阜遭難○五月東洋社會黨なる○電氣燈を點す○源綱紀速記術を始む○改進黨起る○帝政黨起る○福島事件起る○論吉「時事新報」を發刊す○外山ゝ山、井上巽軒、矢田邊尙今「新體詩抄」を出す○第一回繪畫共進會○兆民譯「民約譯解」出づ○東京專門學校早

稻田に起る〇島田青峯、有島生馬、水谷竹紫、生方敏郎、小川未明、鈴木三重吉、野口雨情等生る

十六年

〇七月一日より官報を發行す〇高等法院を始めて開く〇徵兵令を改む 〇福島事件の獄を決す 〇馬場辰猪の「天賦人權論」出づ〇官報發刊〇兆民譯「維氏美學」出づ〇矢野龍溪「經國美談」第一出づ〇坪内逍遙譯「自由太刀餘波鋭鋒」出づ〇秋田雨雀、生田長江、志賀直哉相馬御風、安部能成、岡田八千代、高村光太郎・内藤濯、野上豊一郎、人見東明、前田洋三、水野葉舟、三井甲之等生る〇岩倉具視逝く

十七年

〇華族會成る〇朝鮮閔黨我公使館を燒く〇公侯伯子男の五爵を設く〇自由黨解黨す〇名古屋事件、加波山暴動、秩父一揆、飯田事件等起る〇角藤定憲大阪に壯士芝居を起す〇藤田鳴鶴の「文明東漸史」出づ〇かなのくわい起る〇「都」の前身「今日新聞」創刊〇中村星湖、山村暮鳥、宮地嘉六、成瀨無極、川村花菱、荻原井泉水、小宮豐隆、楠山正雄、片上伸等生る〇成島柳北逝く

十八年

〇内閣組織成る〇諸省の卿を改めて大臣となす〇專賣特許條例決定〇尾崎紅葉、石橋思案、山田美妙等硯友社を結ぶ〇逍遙の「小説神髓」及び寫實主義の先驅「當世書生氣質」出づ〇鳴鶴譯「繫思談」出づ〇ローマ字會起る〇武者小路實篤、仲木貞一、長田秀雄、土岐善麿相馬泰三、木下杢太郎、北原白秋、大杉榮、仲田勝之助、安成貞雄、若山牧水等生る

十九年

〇各省官制發布〇帝國大學令發布〇大學院を置く〇私立明治學院創立〇十一月萬國赤十字社に加盟す〇「中央公論」の前身「反省雜誌」發刊〇末廣鐵腸「雪中梅」出づ〇山田美妙「風琴調一節」を出して言文一致體を唱ふ〇佐藤緑葉・須藤鐘一、谷崎潤一郎、加藤朝鳥、木下利玄、後藤末雄、白石實三、加能作次郎、野上彌生子

平塚明子、吉田絃二郎、福永挽歌、本間久雄、水守龜之助、吉井勇等生る

二十年

○保安條令を發布す○學位令を公布す○東京音樂學校起る○德富蘇峰「國民の友」發刊○「哲學雜誌」發刊○鐵腸「花間鶯」(上卷)出づ○須藤南翠「新粧之佳人」出づ○蘇峰「新日本の青年」出づ○二葉亭四迷「浮雲」(第一篇)出づ○美妙齋「以良都女」發刊○「出版月評」發刊○美妙、紅葉の「新體詩選」出づ○東海散史「佳人之奇遇」出づ○長田幹彥、坪内士行、葛西善藏、稻毛金七、加藤一夫、江口渙、山本有三、半田良平、水上龍太郎等生る

二十一年

○樞密院を置く○大學に國史科を置く○二月大隈外相に任じ條約改正に從事す○國粹主義起る○始めて二十五名に博士號を授與す○高島炭坑事件起る○東京美術學校起る○二葉亭「浮雲」第二篇出づ○三宅雄二郎等「日本人」發刊○紅葉等「我樂苦多文庫」發刊○加藤弘之、箕作麟祥、伊藤圭介學位令によりて博士を授けらる○「東京朝日新聞」發刊○二葉亭譯「あひゞき」「國民の友」に出づ○雜誌「文」發刊○田邊花圃女史「藪の鶯」出づ○美妙齋短篇集「夏木立」出づ○小說雜誌「都の花」金港堂より發刊○巖本善治「女學雜誌」發刊○少年雜誌「少年園」發刊○小說雜誌「小說萃錦」春陽堂より發刊○「大阪每日新聞」發刊○小說雜誌「大和錦」博文館より發刊○末松青萍譯「谷間の姬百合」出づ○千家元麿、柴田勝衞、島村民藏、川路柳虹、加藤武雄、谷崎精二、里見弴、賀川豐彥、長與善郞、新居格、萩原朔太郞、前田河廣一郞、阿部次郞等生る○狩野芳崖逝く

二十二年

○二月憲法發布○決鬪罪の公布○森文部大臣刺さる○東海道鐵道全通○東京專門學校文學科創立○十月十七日閣議大隈外相歸途島來恒喜に要撃せらる○歌舞伎座落成す○美妙齋の「胡蝶」春の屋の「細君」思軒譯「探偵ユーベル」等「國民の友」附錄に出づ○矢崎嵯峨の屋「初戀」「都の花」に出づ○小說雜誌「新小說」春陽堂よ

り發刊○幸田露伴「露團々」を「都の花」に「風流佛」を「新著百種」に掲載○新聞「日本」發刊○「我樂苦多文庫」を「文庫」と改題○紅葉の「二人比丘尼色懺悔」「新著百種」第一篇として出づ○高田半峰「美辭學」出づ○川上眉山「黄菊白菊」を「文庫」に掲載○鷗外「しがらみ草紙」創刊○饗庭篁村「むら竹」第一篇出づ○森鷗外等譯詩「面影」北郊散士「流轉」「國民の友」附錄に出づ○美妙「いちご姫」二葉亭「浮雲」續篇「都の花」に出づ○篁村「當世商人氣質」出づ○廣津柳浪「殘菊」「新著百種」第六篇として出づ○繪畫雜誌「國華」發刊○思軒譯「瞽使者」出づ○室生犀星、福士幸次郎、藤井眞澄、木村莊太、河竹繁俊、江馬修、久保田萬太郎、菊地寛、柳澤健、三木露風、柳宗悅、矢口達等生る

二十三年

○始めて國會を開く○愛國公黨起る○治罪法を改正し法典稍〻整ふ○教育勅語下る○國學院創立○鷗外「舞姫」を「國民の友」に發表○蘇峰「國民新聞」發刊○「日本文學全書」刊行○露伴短篇集「葉末集」出づ○宮崎湖處子「歸省」出づ○露伴「一口劍」「國民の友」に出づ○紅葉「伽羅枕」「讀賣」紙上に發表○三上高津共著「日本文學史」出づ○「新小說」廢刊○富田碎花、田中純、白鳥省吾、佐藤惣之助、岡田三郎、新井紀一、靑野季吉、豐島與志雄、中村白葉、額田六福、原田實、日夏耿之介、三宅やす子、山田邦子等生る

二十四年

○十二月帝國議會解散○川上音次郎等新演劇「板垣退助」を演ず○嚴谷漣山人「こがね丸」「少年文學」第一篇として出版○南新二「鎌倉武士」「新作十二番」第五篇として出版○中西梅花「新體梅花詩集」出づ○田口卯吉雜誌「史海」發刊○原抱一庵「闇中政治家」聚芳十種第五篇として出づ○村上浪六「三ケ月次郎吉」出づ○紅葉「二人女房」「都の花」に載る○坪内逍遙等「早稻田文學」發刊○齋藤綠雨「油地獄」出づ○綠雨「かくれんぼ」出づ○露伴「新葉末集」出づ○三上於兎吉、西宮藤朝、新城和一、細田源吉、久米正雄、宇野浩二、廣津和郎、松岡讓、米川正夫等生る○中村敬宇、佐々木弘綱、菊

地三溪等逝く

二十五年

○八月勞働協會成立○井上哲次郎とキリスト教徒との間に宗教と教育との激論爭起る○鷗外譯稿集「水沫集」出づ○露伴「五重塔」出づ○紅葉の「三人妻」出づ○正岡子規俳句の新運動を起す○黒岩涙香「萬朝報」發刊○内田不知庵「文學一班」出づ○探偵小說流行す○平林初之輔、秦豊吉、宮島新三郎、成瀨正一、南部修太郎、西條八十、生田春月、佐藤春夫、芥川龍之介、藤森成吉、堀口大學、細田民樹、森口多里等生る

二十六年

○北村透谷等雜誌「文學界」發刊○子規「獺祭書屋俳話」出づ○逍遙の「我國の史劇」「早稻田文學」に載る○「二六新報」發刊○蘇峰「吉田松陰」出づ○露伴「風流微塵藏」第一「侫舟」「國會」に載る○不知庵「罪と罰」を譯出○民友社「十二文豪」發刊○博文館「世界文庫」を發刊○高山樗牛の「瀧口入道」出づ○田山花袋譯「コサック」出づ○舟木重信、福田正夫、内藤辰雄、邦枝完二、木村莊八、大泉黒石、百田宗二等生る○古河默阿彌逝く

二十七年

○八月二十四日、日英條約批準○日清和敗る○日米條約調印○日伊條約調印○坪内逍遙史劇「桐一葉」「早稻田文學」に載る○鷹井雨江譯「湖上の美人」出づ○紅葉「心の闇」出づ○「しがらみ草紙」廢刊○江馬道助、木村毅、小島政二郎、佐々木茂索、戸川貞雄、村松正俊、山内義雄等生る○假名垣魯文、北村透谷等逝く

二十八年

○日清講和條約調印○三月秘露、六月佛國、露國、十月丁抹と條約改正成る○「帝國文學」「太陽」「文藝倶樂部」發刊○露伴「新浦島」「國會」に出づ○紅葉の「不言不語」「讀賣」に出づ○外山正一の散文詩「可兒大尉」「帝國文學」に出づ○泉鏡花「夜行巡査」及「外科室」「文藝倶樂部」に載る○小杉天外「改良若殿」「讀賣」に發表○廣津柳浪「黒蜥蜓」「文藝倶樂部」に載る○後藤宙外「ありの

すさび」「早稻田文學」に載る〇武島羽衣新體詩「小夜砧」帝國文學」に出づ〇眉山「裏表」漣「董日記」「國民の友」附錄に出づ〇雜誌「文庫」(少年園改題)發刊「文藝倶樂部」增刊號「閨秀小說」出づ〇外山上田中村「新體詩歌集」出づ〇俳會秋聲會起る〇樋口一葉「濁江」「文藝倶樂部」に掲載〇江見水蔭「女房殺し」「文藝倶樂部」に出づ〇一葉「たけくらべ」「文學界」に出づ〇櫻痴脚本「豊島嵐」出づ〇眉山「暗潮」「讀賣」に載る〇大關五郎生る〇小中村淸矩、井上毅、南新二等逝く

二十九年

〇音樂學校第一回演奏會〇鷗外「めざまし草」(「しがらみ草紙」改題)〇鷗外の論文集「つき草」出づ〇雜誌「新聲」創刊〇巽軒「比沼山の歌」「帝國文學」「太陽」に出づ〇逍遙史劇「牧の方」「早稻田文學」に出づ〇紅葉「多情多恨」「讀賣」に出づ〇「文藝倶樂部」增刊「靑年小說」出づ〇村井弦齋「日の出島」「報知新聞」に載る〇小說雜誌「新小說」再興〇柳浪「今戶心中」「文藝倶樂部」に載る〇竹越三叉「世界之日本」發刊〇與謝野鐵幹詩歌集「東西南北」出づ〇新詩雜誌「大和琴」發刊〇柳浪「河內屋」「新小說」に載る〇風葉「寢白粉」「文藝倶樂部」に載る〇宙外「闇のうつゝ」「新小說」に載る〇二葉亭譯「片戀」出づ〇綠雨の「雨蛙」出づ〇牧野信一、中戶川吉二等生る〇樋口一葉、若松賤子、末廣鐵腸等逝く

三十年

〇京都大學の設立〇社會問題研究會成る〇紅葉の「金色夜叉」「讀賣」紙上に連載〇「一葉全集」出づ〇賤子譯「小公子」出づ〇雨江、羽衣、桂月新詩文集「花紅葉」出づ〇島崎藤村新體詩「天馬」「文學界」に「深林の逍遙」「帝國文學」に載る〇美妙新體詩「魔界天女」「大和琴」に出づ〇新體詩集「こ[illegible]花」出づ〇宙外、天外等「新著月刊」發刊〇土井晩翠新體詩「破鐘の響」「帝國文學」に掲載〇櫻痴歌舞伎座立作者となる〇二葉亭譯「浮草」「太陽」に載る〇獨步、花袋、國男、湖處子等「抒情詩」を出す〇天遊、天來詩集「松虫鈴虫」出づ〇雜誌「日本主義」發刊〇鷗外喜美子譯稿集「かげ草」出づ〇藤村詩集「若菜集」出づ〇逍遙「沓手鳥孤城落月」「新小說」に掲載〇十一谷義

三郎、中河與一等生る○森田思軒、西周等逝く

三十一年

○憲政本黨組織成る○幸田露伴「二日物語」「文藝倶樂部」に掲載○子規「和歌論」「日本」に載る○魯庵「暮の二十八日」「新著月刊」に載る○日本派俳句集「新俳句」出づ○竹柏短園歌雜誌「心の花」發刊○晩翠「暮鐘」「帝國文學」に掲載○「新著月刊」廢刊○藤村詩文集「一葉舟」「夏草」出づ○「國民の友」「早稻田文學」廢刊○日本派俳誌「ほとゝぎす」發刊○風葉「戀慕流」「讀賣」に出づ○鏡花「辰巳巷談」出づ

三十二年

○二月中學校令を發布○女學校令發布○私立學校令發布○條約改正成る○帝國黨組織成る○内地雜居實施○森鷗外の「審美綱要」出づ○德富蘆花「不如歸」「國民新聞」に出づ○「反省雜誌」改題「中央公論」出づ○高山樗牛「時代精神論」を「太陽」に寄す○晩翠詩集「天地有情」出づ○菊地幽芳「己が罪」「大阪毎日」に出づ○薄田泣菫詩集「暮笛集」出づ○子規の寫生文「ほとゝぎす」に出づ○鏡花「湯島詣」出づ○天外の「蛇いちご」花袋の「ふるさと」出づ○矢田邊尙今逝く

三十三年

○九月政友會成る○雜誌「歌舞伎」「小天地」發刊○芳賀矢一「國文學史十講」出づ○高安月郊詩文集「金字塔」出づ○鐵幹詩歌雜誌「明星」發刊○宙外「田園生活」「新小説」に出づ○天外「初姿」出づ○獨步「郊外」出づ○三遊亭圓朝、大西祝、外山正一等逝く

三十四年

○四月社會民主黨成立直ちに解散○樗牛「文明批評家としての文學者」を「太陽」に載す○ニイチエ論起る○河井醉茗詩集「無弦弓」出づ○淸澤滿之宗教雜誌「精神界」發刊○國木田獨步短篇集「武藏野」及び「牛肉と馬鈴薯」出づ ○日本派俳句集「春夏秋冬」出づ○晩翠詩集「曉鐘」出づ ○蘆花「思ひ出の記」出づ○藤村詩集「落梅集」出づ○樗牛「美的生活論」「太陽」に出づ○

泣菫詩集「行く春」出づ○北田薄氷小說集「薄氷遺稿」出づ○柳川春葉「錦木」「新小說」に載る○上田柳村譯文集「みをつくし」出づ○晶子歌集「亂れ髮」出づ○鏡花「高野聖」「新小說」に出づ○月郊譯「イブセンの社會劇」出づ○中村吉藏「無果花」出づ○金子薫園歌集「片われ月」出づ○福澤諭吉、大橋乙羽、中江兆民等逝く

三十五年

○二月日英同盟成る○十二月敎科書事件の疑獄起る○天外「はやり唄」を出しゾライズムを唱ふ○樗牛「日蓮論」「太陽」に載る○綱島梁川「宗敎的眞理の性質」「早稻田學報」に載る○雜誌「文藝界」金港堂より發刊○子規「獺祭書屋俳句帖抄」上卷出づ○風葉「凉炎」「新小說」に載る○田山花袋「重右衞門の最期」出づ、氏の覺醒期也○德田秋聲「春光」「文藝界」に出づ○鷗外譯「卽興詩人」出づ○蘆花「黑潮」「國民」に載る○「透谷全集」出づ○永井荷風「地獄の花」を出しゾライズムを唱ふ○涙香譯「噫無情」「萬朝報」に連載○獨步「酒中日記」出づ○西村茂樹、正岡子規、高山樗牛等逝く

三十六年

○平民社成立す○專門學校令發布○小學校令改正國定敎科書の制度採用○音樂學校歌劇「オルフオイス」を演す○鷗外脚本「玉匣兩浦島」出づ○紅葉「新續金色夜叉」「新小說」に載る ○月郊脚本「大鹽平八郞」出づ○水蔭飜案「オセロ」新派劇に上る○天外の「魔風戀風」「讀賣」紙上に發表○抱一庵譯「聖人歟盜賊歟」出づ○平木白星詩集「日本國歌」出づ○「不如歸」新派劇に上る○月郊脚本「江戶城明渡」出づ○長田秋濤譯「椿姬」出づ ○蒲原有明詩集「獨絃哀歌」出づ ○露伴「天打つ浪」を「讀賣」に載す○子規四方太等「寫生文集」を出す○木村鷹太郞譯「プラトン全集」第一卷出づ○土肥春曙飜案「ハムレツト」新派劇に上る○詩歌雜誌「白百合」發刊○紅葉譯「鐘樓守」出づ○鏡花「風流線」「國民」に揭載○獨步「女難」「第三者」出づ○藤村操「人生不可解」を唱へ華嚴の瀧に投じて死す、青年の懷疑的傾向漸く濃厚となる○尾崎紅葉、落合直文、市川團十郞清澤滿之、尾上菊五郞等逝く

三十七年

〇日露開戰〇「紅葉全集」第一巻出づ〇「樗牛全集」第一巻出づ〇兒玉花外「花外詩集」出づ〇藤村小説「水彩畫家」「新小説」に掲載〇雜誌「時代思潮」發刊〇露伴長詩「出蘆」「讀賣」紙上に出づ〇「桐一葉」舊劇に上る〇鷗外脚本「日蓮上人辻説法」出づ〇木下尙江小説「火の柱」出づ〇抱一庵譯「巴里の秘密」出づ〇登張竹風譯「賣國奴」出づ〇逍遙「新樂劇論」「新曲浦島」出づ〇子規歌集「竹の里歌」出づ〇岩野泡鳴詩集「夕潮」出づ〇花袋「露骨なる描寫」に於て排技巧説主張〇鏡花「風流線」出づ〇幽芳の「乳姉妹」、掬汀の「女夫波」出づ〇「新潮」(「新聲」の後身)出づ〇齋藤綠雨、抱一庵、小泉八雲、市川左團次等逝く

三十八年

〇九月五日日比谷公園國民大會警察燒打〇日露講和〇夏目漱石「倫敦塔」「帝國文學」に掲載さる〇塚原澁柿歷史小説「淀殿」「日日」に連載さる〇漱石「我輩は猫である」を「ほとゝぎす」に發表す〇木下尙江「良人の自白」を著す〇風葉の「青春」「讀賣」に出づ〇前田林外詩集「夏花少女」出づ〇「牧の方」舊派劇に演ぜらる〇魯庵により「復活」「日本」に譯載さる〇泣菫詩集「二十五絃」出づ〇梁川「見神の實驗」「新人」に載る〇泡鳴詩集「悲戀悲歌」出づ〇有明詩集「春鳥集」出づ〇伊藤證信宗敎雜誌「無我の愛」發刊〇夜雨「花守」出づ〇醉茗「燈影」出づ〇梁川の「梁川文集」出づ〇獨步「獨步集」出づ〇落合直文「萩之家遺稿」出づ〇戶澤姑射、淺野憑虛譯「沙翁全集」第一巻出づ〇柳村譯詩「海潮音」出づ〇梁川論集「病間錄」出づ〇藤岡作太郎「國文學全史」平安朝篇出づ〇逍遙「新曲赫哉姬」出づ

三十九年

〇京都文科大學開講す〇二月日本社會黨組織成る〇文藝協會成る〇日本エスペラント協會成る〇「早稻田文學」再興〇每日新聞社演劇團第一回公演〇文藝協會演劇第一回試演〇晶子歌集「舞姬」「夢の華」出づ〇藤村「破戒」出づ〇獨步短篇集「運命」出づ〇宙外「月に立

つ影」「日日」に載る〇天外「コブシ」「讀賣」に出づ〇高濱虚子坂本四方太寫生文集「帆立貝」出づ〇漱石短篇集「漾虚集」出づ〇泣菫詩集「白羊宮」出づ〇木村鷹太郎「プラトン全集」第二巻出づ〇落合直文「萩之家歌集」出づ〇晩翠詩集「東海遊子吟」出づ〇あやめ會詩集「あやめ草」出づ〇泡鳴論文「神秘的半獸主義」出づ〇雜誌「趣味」「文章世界」發刊〇樂苑會第一回歌劇演奏會〇漱石「草枕」「新小說」に出づ〇山崎紫紅脚本集「七つ桔梗」出づ〇宵萍「夏の夢日本の面影」育英舍發行〇二葉亭「其の面影」「東京朝日」に出づ〇秋聲「己が縛」「萬朝報」に出づ〇晶子歌集「夢の華」出づ〇岩城準太郎「明治文學史」育英舍發行〇伊藤佐千夫「野菊の墓」佐藤紅綠の「行火」出づ〇福地櫻痴逝く

四十年

〇二月日本社會黨解散さる〇文部省主催第一回公設美術展覽會〇文藝協會第二回演藝會に春曙ハムレットを演ず〇「日本人」改題「日本及日本人」〇漱石集「鶉籠」出づ〇藤村短篇集「綠葉集」出づ〇正宗白鳥「塵埃」「趣味」に載る〇秋聲「焰」「國民」に「凋落」「讀賣新聞」に出づ〇風葉「天才」「萬朝報」に「戀ざめ」「日本」に出づ〇佐野天聲脚本「意志」「早稻田文學」に出づ〇「思軒全集」第一出づ〇獨歩短篇集「濤聲」出づ〇眞山青果「南小泉村」「新潮」に「第一人者」「中央公論」に出づ〇天聲「大農」「都新聞」に載る〇漱石「虞美人草」「朝日新聞」に出づ〇春葉「春葉集」出づ〇花袋「蒲團」「新小說」に出づ〇白鳥集「紅塵」出づ〇二葉亭「平凡」「朝日」紙上に發表〇青果「青果集」出づ〇中村星湖「少年行」出づ〇陸鷄南、綱島梁川、大村仁太郎等逝く

四十一年

〇三月廿二日憲法發布〇戊申詔書下る〇「明星」廢刊〇漱石、虚子の短篇集「鷄頭」に序して餘裕派小說を論じ、婉曲に自然主義を難ず〇藤村の「春」花袋の「一兵卒」秋聲の「出產」白鳥の「何處へ」「二家族」漱石の「三四郎」出づ〇泡鳴の詩集「闇の盃盤」出づ〇長谷川天溪「現實暴露の悲哀」を說き「自然主義の價値」を論ず〇金子筑水「生活の情味」を論ず〇川上眉山、國

木田獨歩、服部誠一、鳥谷部春汀等逝く

四十二年

○宙外、鏡花等の文藝革新會成る、反自然主義運動也○市川左團次、小山内薫等の自由劇場起る。第一回にイプセンの「ボルクマン」上演○鷗外等の「スバル」創刊○荷風「ふらんす物語」發賣禁止○秋聲の「新世帶」花袋の「田舍敎師」「妻」藤村の「芽生」草平の「煤煙」虚子の「俳諧師」白鳥の「落日」蘆花の「寄生木」出づ○抱月の「近代文藝の研究」出づ○自由詩社起り御風等口語詩の說を唱ふ○鷗外「キタ・セクスアリス」を「スバル」に載せ發賣禁止○長谷川二葉亭、依田學海等逝く

四十三年

○社會主義者幸德秋水等の事件發覺し捕はる○文藝委員會設置○中村吉藏の「牧師の家」を新社會劇にて上演す○「白樺」創刊、人道主義の文學起らんとす○抱月「文明思潮を描ける文學」を論ず○薫園の歌集「覺めたる歌」出づ○「獨歩全集」出づ○荷風の「歡樂」發賣禁止○「三田文學」創刊○秋聲の「足跡」「讀賣」に連載○藤村の「家」花袋の「緣」「毎日電報」に連載○漱石の「門」「それから」「朝日」に連載○泡鳴の「放浪」出づ○白鳥の「微光」「中央公論」に出づ○荷風の「冷笑」出づ○鷗外の短篇集「涓滴」出づ○中村秋香、藤岡作太郎、小野湖山、山田美妙、大塚楠緒子等逝く

四十四年

○一月幸德秋水以下二十四名に對する判決確定し秋水等十二名は死刑に行はる○南北正閏論行はれ從來の南朝を吉野朝と改稱に決す○文藝協會組織を改め、第一回公演に當りイプセンの「人形の家」上演○雜誌「青踏」創刊○秋田雨雀の「幻影と夜曲」出づ○薫園歌集「山河」出づ○荷風の隨筆「紅茶の後」出づ○秋聲の「黴」「朝日」に連載○白鳥の「泥人形」「早稻田文學」に、藤村の「犧牲」「中央公論」に出づ○鏡花の「三味線堀」虚子の「朝鮮」出づ○森槐南、大和田建樹、市川團藏、川上音二郎等逝く

四十五年――大正元年

〇二月内務省計畫神佛耶三教代表者懇親會を華族會館に開く〇島崎藤村フランス留學〇文學委員會は坪内逍遙の文學上の功勞を認め滿場一致を以て賞牌賞金を送る〇文藝協會劇「故鄕」上演、興行禁止の命ありて物議起る〇樋口一葉の日記公表せらる〇厨川白村「近代文學十講」出づ〇短篇集として小川未明の「少年の笛」「物言はぬ顏」出づ〇漱石の長篇「彼岸過迄」「朝日」に連載〇鈴木三重吉の「返らぬ日」發行〇水野葉舟の小品集「森」出づ〇武者小路實篤の單行本「世間知らず」荷風の「新橋夜話」出づ〇花袋の「渦」「國民」に連載〇泡鳴の「發展」出づ〇志賀直哉の「クローディアスの日記」「白樺」「大津順吉」「中央公論」に出づ〇阿部次郎「文壇の社會問題」を論ず〇高崎正風、石川啄木等逝く

明治文學（主として小說）研究書目

一　文學史的研究

（A）單行本

明治文學史　岩城準太郎著　明治三十九年

文藝史（明治史第七篇）
　明治四十二年二月「太陽」增刊

明治文學の概觀（「文章世界」金風號）
　大正元年九月增刊

近代文藝史論　高須梅溪著　大正十年

日本現代文學十二講　同　大正十三年

明治文學混沌期研究號大正十四年三月「早稻田文學」

きのふけふ　内田魯庵著　大正五年

（B）叢書、講義錄その他

明治の小說　高山樗牛
　明治三十年六月「太陽」

明治の小說に表はれた人物
　早稻田文學記者　明治三十八年十月「早文」

明治文學　芳賀矢一（「開國五十年史」の中）
　明治四十年

明治文章史　生田長江　文章學院「文章講義錄」

明治小說文章變遷史（早稻田文學普及會叢書の中）
　德田秋聲述　大正三年

明治小說内容發達史（早稻田文學普及會叢書の中）
　田山花袋述　大正三年

明治文學變遷史講話（早稻田文學普及會叢書の中）
　島村抱月述　大正四年

その他國文學史の終りには大抵明治の部あり。

二　作家及び作品研究

作者評判記　吉田香雨戲著　明治二十四年

西周傳　森林太郎　明治三十一年

成島柳北
　明治詩家評論　大江敬香　「太陽」一ノ五
　江戸兒文士上り成島柳北

笑　迎　「東西南北」三ノ四

櫻痴先生と柳北先生

塚原　澁柿　「文章世界」

成島柳北論　木村　毅「早文」大正十四年三月

魯文と柳北　山口　剛「早文」大正十四年三月

中村敬宇

故中村敬宇先生　三島　毅　「太陽」一六ノ一〇

文章より見たる中村敬宇先生

増田藤之助　「文章世界」

假名垣魯文

猫塚の掃除　胡　蝶　園　「新小説」一四ノ一二

假名垣魯文傳　野崎　左文

「早文」明治二十七年三月、四月

魯文と柳北　山　口　剛「早文」大正十四年三月

樋口一葉

女文豪が活躍の面影

三宅　花圃　「女學世界」八ノ九

一　葉　論　諸　家「中央公論」二二ノ六

一葉女史の作物

秋田雨雀等「早文」明治四十一年

一葉女史の小説に現はれた子供

倉橋文學士　「心理研究」

一葉女史の日記　「文章世界」明治四十年六月

樋口一葉論　相馬　御風

「新潮」明治四十三年

森田思軒

故思軒居士の面影

伊原青々園「早文」明治四十年六月

大西祝

故大西博士　五十嵐　力　「文章世界」

大西操山先生　芳　生　「新聲」

正岡子規

正岡子規論　「中央公論」

正岡子規を弔す　疑　峯　生　「帝國文學」

正岡子規の生涯　内藤　鳴雪　「文章世界」

子規言行錄　小谷安太郎　明治三十五年

高山樗牛

高山樗牛　長谷川天溪
「文章世界」明治四十年二月
亡兄高山樗牛　齋藤　信策
「中央公論」明治四十年六月
嗚呼高山樗牛　土井　晩翠「帝國文學」九ノ六
故高山林次郎君の天才に就いて
田中喜一「中央公論」明治四十年六月

尾崎紅葉

尾崎紅葉追悼號　「新小說」
紅葉山人　「中央公論」　明治四十年八月
尾崎紅葉　塚原澁柿園
「中央公論」明治四十年九月
中學時代の尾崎紅葉
鶴田　賢次「中學世界」一一ノ一四
紅葉先生の塾　「文章世界」　明治四十年二月
人及び藝術家としての尾崎紅葉
本間　久雄著　大正五年

齋藤綠雨

齋藤綠雨　馬場孤蝶、後藤宙外その他
「中央公論」明治四十年十月
少年時代の齋藤綠雨
ふた葉生「明星」明治三十九年十一月
綾城雜話　小杉　天外　「趣味」三ノ五
齋藤綠雨　內田　魯庵著「きのふけふ」の

中綱島梁川

故綱島梁川氏追憶　中桐確太郎、五十嵐力
「早文」四十年十月
故梁川君　後藤　宙外　「新小說」四十年十月
綱島梁川氏の人物
中桐確太郎　「趣味」四十年十月
故梁川子　金子、五十嵐、宇佐美、島村、中桐
「新人」四十年十月
文學者としての綱島君
島村　抱月　「趣味」四十年十月
文章家としての綱島梁川　五十嵐　力
「文章世界」「趣味」共に四十年十月

川上眉山

故川上眉山氏追憶錄　「新小說」一三ノ七

故川上眉山氏　「早文」四十一年七月
川上眉山　一　丈　青
「日本及日本人」四十一年七月
嗚呼眉山君　石橋　思案
「文藝倶樂部」四十一年七月
あゝ川上君以下四篇　「太陽」一四ノ一

國木田獨歩

獨　歩　號　「新星」一九ノ一
國木田獨歩　「新潮」四一年七月
故國木田獨歩氏追憶錄　「新小説」一三ノ八
文豪國木田獨歩　「趣味」三ノ八
國木田獨歩逝く、獨歩氏の遺著
「早文」四十一年八月
獨歩に就いて　「青年評論」四十一年七月
獨歩を想ふ　中澤　臨川　「文章世界」三ノ一三

長谷川二葉亭

二　葉　亭　正宗　白鳥「文章世界」四十年一月
故二葉亭氏追憶錄　「新小説」一四ノ六
二葉亭の一面　大庭　生「日本及日本人」五一〇號

役人時代の二葉亭
出川　冷郎　「東西南北」三ノ四
噫！二葉亭四迷逝けり　「文章世界」四ノ八
長谷川二葉亭君以下四篇　「趣味」三ノ六
露國に赴きたる二葉亭氏　「趣味」三ノ七
酒間茶間　「趣味」三ノ五
二葉亭四迷　坪内逍遙、内田魯庵編
四十二年八月

山田美妙

山田美妙　魯庵の「きのふけふ」の中
山田美妙齋　吉田香雨の「作者評判記」の中

附記　作家及作品研究の資料はたゞ明治年間に物故せる文藝家のみに止める。一般的に及ぼすと到底枚擧に暇あらず、それだけでも一卷の書になるかも知れぬ。豫め御諒承を乞ふ。

參考書補遺

岩城準太郎著「明治大正の國文學」　大正十四年
野崎左文著「私の見た明治文壇」（昭和二年、春陽堂）

木村　毅著「明治文學展望」（昭和三年、改造社）
橘　文七著「明治大正文學史」（昭和三年、啓文社書店）
土岐善麿編著「藝術篇」（昭和六年、朝日新聞社編「明治大正史の第五編）
新潮社發刊「日本文學講座」中の「明治文學研究」篇上、中、下。
日本評論社發刊「明治文化全集」中の「飜譯文藝篇」「時事小說篇」「文學藝術篇」等
「早稻田文學」の「明治文學研究號」（合本あり）
「新小說」の「明治大正文藝大觀」（大正十五年）
「日本文學」の「明治文學大觀號」（昭和七年三月）

改訂 明治文學十二講索引（五十音順）

ツ

テ

ト

ヒ

フ

索引終

昭和七年六月十七日改訂版印刷
昭和七年六月二十日改訂版發行

改訂 明治文學十二講 定價二圓

著者 宮島新三郎
東京市本郷區湯島一丁目一番地

發行者 高橋宇伊次
東京市牛込區下宮比町十二番地

印刷者 告原留吉
東京市牛込區下宮比町十二番地

印刷所 東京出版社印刷部

發行所 東京出版社
東京市本郷區湯島一丁目一番地
振替東京一七〇五二番
電話下谷二四五三番

早大教授 宮島新三郎・文學士 有富郁夫・前高師訓導 萬福直清 共編

現代名作新選 文學鑑賞讀本 全五卷

各定價五十錢
各 送料 四錢

中學校・女學校・師範學校・補習學校・高等小學校に於ける絶好の文學副讀本――

一、最も健全なる名作を輯む――明治大正に於ける短篇小說・小品文・詩・短歌等の名作にて最も健全なるものを敎育的立場より輯む。

一、悉く完全なる作品――今迄の讀本は總て拔萃文のみを輯めてあつたが本書の殆んど總ての作品は全文を出してある。

一、評傳作風を示す――作家の作風を知ることは門外漢には困難な仕事であるが、本書に於ては作者の肖像を加へ、其の作風といふものを細大もらさず說いてある。而も作者の評傳も加へてあるから一層興味がある。

一、鑑賞批評を加ふ――下欄には六號活字を以て作品の鑑賞法を叮寧に敎へ、各作品の終りには嚴正なる立場から批評をしてあるからその作品の核心にふれることが出來る。

早大教授 宮島新三郎氏著

短篇小說新研究

▲定價 壹圓貳拾錢 送料六錢

田山花袋氏著

長篇小說の研究

▲定價 壹圓貳拾錢 送料六錢

文學に於て最もポピユラアなものは長篇小說で、又現代文學に於て最も著しき發達を遂げたものは短篇小說であるが、其創作及び鑑賞の方法に就ては何れも未だ熟知されてゐない。此の姉妹兩著は其起源・構造・内容等を古今東西の作品を例にして縱橫に解剖指摘されたものである。故に本書を手にすれば鑑賞の立場からも、遺憾のない研究が積まれる。

著者	書名	體裁	定價送料共
生田春月氏	智慧に輝く愛	四六版假裝	一・五〇
島村民藏氏	劇の創作と鑑賞	四六版上製	同 二・四〇
富永直樹氏	現代詩創作と鑑賞	同	同 三・五〇
北村喜八氏	表現主義の戲曲	四六版假製	同 一・二六
片山伸氏	文學と社會	同	同 ・九六
野口米次郎氏	ヨネ、ノグチ代表詩	同	同 一・五六
木村毅氏	兎と妓生と	同	同 一・八〇
宮島新三郎氏	兩性論	同	同 一・〇六
武平喜代藏氏	一日一生涯	菊半總革	同 一・六六
福田正夫氏	「抒情特劇」曠野の花	菊半假製	同 一・〇四
前田河廣一郎氏	「長編創作」暴風雨時代	四六版上製	同 二・四〇
北村喜八氏	獨逸男ヒンケマン	同	同 ・九四
日夏耿之助氏	詩壇の散步	同	同 一・三六
片山伸氏	外國文學序說	四六版上製	同 二・四〇
小山内薰氏	戲曲鑑賞讀本 古典上編	四六版假製	同 ・九六
北村喜八氏	近代上編		・九六
尾崎喜八氏	「詩歌」高層雲の下	同	同 一・五六
長谷川零餘子氏	「季代別年代順」芭蕉俳句全集	四六版上製	同 一・八六

發行所 東京本鄉湯島一ノ二 振替東京一七〇五二 東京出版社